

潮風とともに

えりも 昔語り 記録集



マグロの大漁（現在のえりも港湾漁組市場付近：昭和14年ごろ）

えりも昔語りを記録する会

刊行を記念して

えりも町教育委員会教育長 小林 強

えりも昔語りを記録する会の皆さんが、町内のおじいちゃん、おばあちゃんから昔のえりもの様子や生い立ちの聞き取りを通して、郷土史に取り上げられていない、かくれた歴史を捜し求めている活動を進められていることに敬意を表します。また、快く語り手となっていただきました皆さんに心からお礼を申し上げます。

「高齢者の方が亡くなることは、町の図書館が一つ無くなることと匹敵する。」と言われた人がいました。確かに明治から大正、昭和と生き抜いてこられ、歴史の変遷を体で感じ取って、自らの生き方に活かし、生活してきたことから、生き字引と言われていることも確かであると思います。

また、風雪に耐えながら自分の歴史を刻み、今日に至っているのですから、重みのある自分史でもあると思います。

明治は「志の時代」と言われ、この時代に生まれて育てられた人は、いつも自己発展を軸にしているところがあります。この方々の心情は、本格的なものへの憧れと密着し、いちばん良い状態を大切にしている気質を持っていると聞いています。この記録を読みながら、このことを思い出しました。

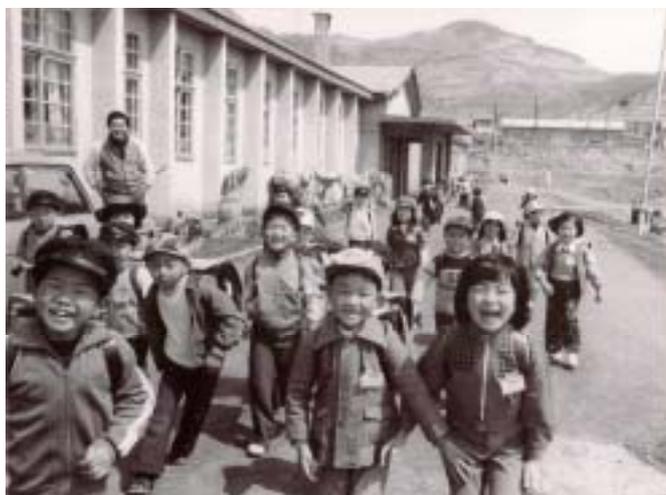
一人一人の自分史は、人に知らされていない歴史があります。その一つ一つを結ぶことによって、何か新しいドラマが生まれてくるように思います。

想像の世界を創造し、新しいえりもの歴史物語が創られるような気がします。

多くの方が、語り手となっておりますが、残念なことに、語り終えてから他界された方もおられ、寂しさを感じております。亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともにご協力をいただいたことに感謝を申し上げます。

今回の語り記録から、次の語りに繋がり、回が重なることによって、えりもの歴史が広まるとともに深まり、新しい物語が生まれるのではないかと期待をしています。

最後に、えりも昔語りを記録する会の皆さんのますますご活躍されることをご祈念申し上げ発刊の挨拶といたします。



えりも小学校児童の下校
(昭和40年代後半)

目 次

刊行を記念して

えりも町教育委員会 教育長 小林 強

お話し手	ページ	お話し手	ページ
中野 はな	目黒 1	富越 誠也	本町 63
北村 満泰	歌別 7	金丸 モト	苫別 64
大平 ミツ	本町 8	高橋 市三郎	大和 69
金沢 キク	庶野 9	種綿 ハツエ	本町 72
小山内 義一郎	庶野 11	池田 彦左衛門	東洋 73
		西嶋 喜一	歌別 74
歌別の昔ばなし	16	佐藤 清	本町 76
石黒キヤ、佐々木タマ、		金沢 秀子	庶野 78
平野フミ、村中ミワ、		内藤 ヤス	本町 81
坪 サヨ、高松八三郎、高松要正		川越 清夫	浦河 83
		阿部 清	苫小牧市 90
故工藤紋弥氏への弔辞	32	栗山 末吉	本町 93
田丸 武義	大和 33	小金 昭一	えりも岬 94
水野 繁一	大和 33	金子 亦雄	上歌別 98
工藤 しづ子	目黒 35	佐藤 幸雄	本町 99
池田 千代野	本町 38		
大内 フミエ	本町 40	笛舞の昔を語る会	105
岩川 ヨシ	歌別 42	目黒の昔を語る会	108
曾田 ツユコ	本町 43		
石川 秀一	東洋 44	山形 昌一	新浜 111
石川 フミ	東洋 44	藤井 健蔵	大和 113
寺谷 マス子	本町 48	栃久保 幸一	本町 114
藤井 久子	大和 49	坂田 達	本町 116
斎藤 源一	東洋 50	東 茂男	庶野 118
田中 サダ子	大和 52	後藤 昭二	大和 120
吉田 スエ	本町 53	長岡 菊也	本町 121
中野 勇治	えりも岬 55	神子島 清八	新浜 122
百人浜大下の砂金		川村 和子	新浜 124
中野 勇治	えりも岬 55	岡部 隆盛	大和 126
柳田 久枝	えりも岬 55	草野 泰子	本町 126
沼久内 キミ	大和 55	野阪 敏雄	庶野 126
田中 清勝	庶野 56	石川 昭	えりも岬 127
中村 敬孝	苫小牧 58	柳田 勝彦	えりも岬 127
真田 由雄	本町 59		
小山内 與十吉	庶野 61		

お話し手(五十音順)

池田 タヨ (えりも岬)
 越後 ミエ (上歌別)
 大西 敏太郎 (目黒)
 岡 辰吉 (上歌別)
 小笠原 ヨシ (笛舞)
 金丸 元太郎 (苫別)
 金森 商船 (函館)
 工藤 紋也 (目黒)
 小松 延枝 (えりも岬)
 佐々木 久四郎 (えりも岬)
 白石 万蔵 (目黒)
 白川 政太郎 (近浦)
 菅沼 誠治 (本町)
 駿河 チヨ (えりも岬)
 高橋 キヨ (笛舞)
 竹内 留吉 (本町)
 立花 豊吉 (笛舞)
 長岡 定次郎 (庶野)
 中島 伊三郎 (庶野)
 中野 勇 (本町)
 西川 岩二郎 (本町)
 西嶋 留吉 (歌別)
 長谷川 コウ (東洋)
 長谷川 フデ (庶野)
 八谷 サダ (本町)
 広島 千代次郎 (本町)
 藤井 昇三 (東洋)
 水野 茂吉 (大和)
 村中 滋雄 (歌別)
 山崎 万次郎 (笛舞)
 山本 喜一郎 (笛舞)

生い立ち 128
 漁業 129
 コンブ(昆布) 131
 コンブ(昆布)・海藻 131
 建網の形式 131
 手繰網漁業 132
 サケ建網 133
 猿留川のサケマス 133
 イカ釣り 133
 イワシの陸揚げ 133
 アグリ(イワシの巻網) 133
 クジラの陸揚げ 134
 クジラの骨 134
 スケトウダラ漁 134
 タラ釣り 134
 カトザメ釣り 134
 カツオ釣り 135
 マグロの施網 135
 八タハタ 135
 コマイ 135
 川崎船の改良 135
 発動機船 135
 漁業組合 136
 クレオソートの被害 136
 農業 136
 馬 136
 駄馬運送業 138
 馬車 138
 乳牛 138
 短角牛 139
 作物 139
 寺小屋 139
 学校 139
 病院 140
 アイヌのこと 140
 クジラの食中毒 140
 アイヌの墓地 140
 戸数 140
 津波について 141
 幌泉大火 141
 道路 141
 駅通 142
 弁財船 142



自動車が始めて幌泉村に入る。
 幌泉村役場前(大正13年)

幌泉会所	1 4 3	幌泉各村の役員	1 4 9
番屋	1 4 3	人物伝	1 4 9
税庫	1 4 3	エゾシカ	1 4 9
定期航路	1 4 3	水田	1 4 9
造材	1 4 4	酒造り・ヤマカの水	1 4 9
猿留村の開拓者	1 4 4	流行病	1 4 9
猿留村の名称、起源	1 4 4	貸元	1 5 0
猿留奥地の開拓	1 4 4	金融	1 5 0
神社	1 4 4	豊似湖のニジマス	1 5 0
稻荷神社	1 4 5	住宅建設	1 5 0
お寺	1 4 5	気候	1 5 0
妙見さま	1 4 5	ヤマベ	1 5 0
アイヌ語地名	1 4 5	苫別の開拓と地名	1 5 0
小越の様子	1 4 5	上歌別	1 5 1
百人浜の状況	1 4 6	農事実行組合	1 5 1
幌泉船入潤設置	1 4 6	上歌別の電気	1 5 1
庶野船入潤設置	1 4 7	蛸子の坂・西洋の坂	1 5 1
税金	1 4 7	英国船の座礁	1 5 1
商店	1 4 7	アメリカ船の遭難	1 5 2
貸し座敷	1 4 8	庶野の開拓者	1 5 2
遊郭	1 4 8	庶野郵便局	1 5 2
風呂屋	1 4 8	庶野の桜	1 5 2
通信	1 4 9	金森商船株式会社	1 5 3
裁判所	1 4 9	マンモスの臼歯発見	1 5 3
役場	1 4 9	思い出の校舎ほか写真集	1 5 5
警察	1 4 9		

あとがき

えりも昔語りを記録する会 会長 神子島清八



住吉神社秋の祭典
(昭和20年代後半)

本書に出てくる度量交衡(単位)

4貫 = 15 kg 1貫 = 3.75 kg = 1,000 匁 1匁 = 3.75 g

1間 = 1.818 m = 6尺 1尺 = 30.3 cm

1石 = 10斗 = 180リットル 1里 = 3927.27 m

1石 = サケ40匹、マス60匹

中野 はな 明治 40 年(1907 年)生れ

実家

95 歳です。十勝の楽古で生まれました。主人は材木もやってたし、造船屋だったの。

農家だったの、私の実家は、大豆、燕麦、小豆、その他こまごましたもの作ってました。

四人兄弟。二人が早くに亡くなってね、二人だけ生きたったの。兄は昔の人としては、長生きでね、85 か 86 歳まで生きたね。小さい頃もらって育てた子が、後ついで、一人前になって、広尾にいるの。

中野は嫁ぎ先。主人は中野民雄。嫁にきたのは大正 15 年 1 月 19 日。冬、お正月過ぎですぐ。知り合ったのは、遠いところでね。仲人さんが広尾の人で。民雄の父親、中野多理っていうの。

お見合い

まあ昔の人はそうだね。そうゆうもんだ。遠いところの人だったから、知り合ったわけでもないから、見合いして結婚したもんだから。見合いは家(うち)でしたの、楽古で。

仲人さんが広尾にいてさ、どっちも馬好きな人で、馬を見るふりして見にきたわけさ。お見合いて知らないで、会ったようなもの。昔はそんなもんさ。

猿留から土産は、なんも、そんなとき。後から、反物、“メセン”(銘仙：めいせん、絹織物の一つ)の反物一疋(ひき)と 100 円。昔、そのときで 100 円ね。そいでも大きなお金だったんだよ、そのときで。それが結納だったのか、わかんないね～。それが結納みたいなものだね～。お見合いしたのが、結婚した年の前の秋ぐらいでしょうね。

嫁入り

猿留に来るときはね～、朝にちらちらと雪降ってたのね、もう晩に目黒に着いた時はこのぐらい(両手で 20 センチぐらいの幅を作って)溜まっていたの。

目黒の浜ね、オシラベツから山道通ってくるの、ほしたら、谷あるのにね、一本橋が渡ってんの、その一本橋の上に雪がついてね、馬の背中みたいで、それ渡ってくるの。いや～おっかないおっかない。下見ると、こんなに深い谷でしょう、いや～落ちたらどうしよう～歩いて歩いて山、岩、山、岩、山、岩。そういうところ来たの、何にも、昔だから道ないでしょう。

ほで浜に出たところが、ビタランケというところで、浜に出たの、山道からね。たら、こんど浜でしょ、砂利道、山ぎわの砂利道、ジャックジャック、進んでいるんだかなんだか、わけわかんない、どのぐらい歩いたかわからないの。歩いて、歩いて、山、山、山、山。何処へ行ったら家があるのか思ってきた。

ビタランケまで山道ね。あっち(広尾側)から来れ



ビタランケ(昭和 34 年ごろ)

ば大峠、小峠、下がって、ビタランケ。

ビタランケから猿留まで一里あるもんね。それも山。猿留は小さいとこでしょう。昔コールテン(布地の一種)の足袋はいて、わらじはいて、足が冷たくて、冷たくて、それから今度しもやけになったの、それで。

嫁入り道具は、そんなとき馬二頭いったの。昔だから、鞍つけてね。ほれ、馬の背中に鞍つけて、両側に荷物積んで。

親戚の人が二人迎えに来て、広尾で泊まって、そして、次の日に皆一緒になって。

広尾は三浦さんという家が、馬してるの、そのじいちゃんが馬の好きな人でね。馬喰(博労：馬の売買)したり、子供たちは馬車追い(馬車の操作)したりしてたの。そことも近しくしていたから、その人やっぱり馬喰だから、中野の民雄さんも馬好きな人だったから、やっぱそういうことで知り合っていたんでないの。その三浦キスケさんという人が、仲人。そこに泊まっていたね。

朝六時七時頃に出たね。そして、こんどはルベシベツってあるでしょう。あそこね、漁師してる人いたったの、そこで今度はお昼食べて。オシラベツから山入るでしょう、山下りてきてルベシベツ、また、ルベシベツから今度、山入ってきたの、ビタランケまで。

猿留に着いた時は、もう薄暗くなってたよ。四時ごろだったんでないのね。ず～と歩いてきたの、足はひゃっこいし、行っても行っても山ばかり、どこにいったら、こんなところにも家があるものかと思って、二度とこういふところ歩くもんでねえと思った。おっかない、おっかない、この谷の上にね、一本橋、渡って、おっかなかったよ～。三つも四つもあったよ。馬は山のきわ回って渡ったの、馬主がついて引っ張ってね。人間が一本橋渡ったの。

猿留に着いたら、工藤旅館というところで、わらじ脱いで、昔、わらじ脱ぎってあったのね。そこでお風呂に入って、ご飯たべて、ほから中野の家に行ったでしょ。えへっへっ(笑い)・・・

それから婚礼だったしょ。夜やったんだよ。それだ

けかかって、ようやく着いたでしょう。ほんと疲れてた。だから二度とこういうところ歩かれないと思った。

婚礼は盛大だった、盛大だった。次の日は吹雪でしょう。みんな帰れないから、また泊まったでしょう。で、も～～三日目でみんな帰ったの。もうご迷惑千万、料理はサケのいずしとかね、いっぱいあった。どこだって昔だから同じようなものでしょ。そんなとき(私は)お酒は飲まない、飲まない。そのころお酒なんか飲めないもの。初めの方は世話もなんも、しないよ。

ウルシと薪

それからっていうものね、足はしもやけになる、春になれば、昔ね、猿留は、そのときは車もないしね、山だって水もないから、みんな薪ねがって(薪をお願いして)、山で薪切るでしょ、したら春、硬雪のときに、川の縁にみんな薪を出すのね。春になって、雨が降っていい水が出たら、みな共同で薪流し、その薪流しの弁当持ってって、ただ歩いていったのね、ウルシに負けて、まあ、5年も6年もの間、毎年ウルシに負けて、ほんと泣いたよ。

ご主人の仕事

民雄は、その当時は、ほんとの春、4月頃から始まるんだね、昔はね、コンブ採る船だけだったの、昔は。それから、だんだんやってるうちに、大っきなの、漁場で使う、サンパっていう大きな船ね、コンブの船より大っきいの、二倍ぐらいある大っきな船、サンパっていう、そんなの造ってた。それから、今度、昔ね、発動機をついた船でポンポンっていうのね、はやったの、その当時ね。そんなの作るようになって、それから今度、また、大っきな船造るようになって。そうするうちに、あたったの、父さんが、それからやめた。あたったときは66歳ぐらいかな。

川流し

船の材は、みんな、ほれ、営林署のえらい様が出張してくるでしょ、猿留にな。その人たちが来た時に願う。そして願って、今度、その材を切るときは、山に泊りがけで行って、切って、そして出して、昔はみんな川流し、船の材料も全部、持ってこられないから。だから山で木挽きさんたのんで、山で挽いて、船の材ね、薄くしてさ、そして川流す。

昔、なんでも川流しだったの。馬を使っても道がないしよ。車も馬車も使えない。馬橋(ばそり)は使ったけどもね、山行って馬橋なんかは使わないよ。町に出るときは、馬橋ひっぱっていったけどさ、山行って馬橋なんか使う道路なんてなかった。流れてきた材は、ず～と猿留の町にくるとね、(川が)広く浅くなってるのね、そこにきて上げるわけ、それから家に持ってくるときは馬車に積んで来る。

子育て

子供は、一人。育てたのと二人。お正月に来て、12月に産まれた。うっふっふ・・・12月の末に産まれたんだけど、お舅さんがかわいそうだからって、年明けて正月の三日につけたんだって。12月の18日に産まれて、戸籍の方が1月3日にしたの。女だったの。

家で産んだよ。昔だもの。産婆さんたってね、背がちゃんこくてな、なんにも役にたたない産婆さんさ～、猿留におったの、猿留の人だったの。姑が手伝ったの。

家に姑が二人いたの。おっかさんが娘でね、民さんが養子だったの、おっかさんはリンさん、その母親がまだ生きてったの、かんさん。娘がリンさん、親がかんさん。姑さんが私の親と同じ歳だったの、63歳だった、嫁に来たとき。舅さんの親だよ。

姑は仕事するにも手早いしね、歩くだつてついて歩くのに、ただ普通に歩いたら、(両手を大きく広げて)こんなに遅れるの、走ればこわいから、また休むしよ、また、こんなに(両手を広げて)離れるの、そういう人だった。仕事するっても、草取るっても、手でこやって(両手を熊手のようにして草を取るまねをする)草取り使わないで、「おれの手こまじゃれか～」って、南部衆のことばで、そういうの、手早い。草は今日取ったら明日またおがってる。

子供なんか育てるの、ぜんぜん手にかからなかった。一回おぶる気になったらね、「女の年寄りが二人もいるのに、嫁におんぶされたら世間の人に笑われるから、おぶらなくてもいい。」って、おぶらせないの。そのかわり仕事はも～も～も～子供が手にかかること無いから、手一杯働いた。まあ～馬車馬みたいだった。

娘は目黒の学校終わって、広尾の高等学校へ出て、それから帯広の渡辺女学校に行って、それで終わり、娘は夏江。学校のお金は自分で払うわけなし、姑さんが出してきてた。別に何も心配なかった。娘はぜんぜん手につかないから。



目黒の浜から木材を沖の船に積む
(昭和34年ごろ)

家事

目黒で材を出していた頃は、木挽きさん頼むしょう、大工さん来るしょう、馬車追い頼むでしょう、まあ～まあ～まあ～家族が大勢で、私が嫁になって十人家族だった、それに木挽きさん来るでしょ、馬車追い来るでしょ、大工さん来るでしょ、できるまで泊まって。

昔、コンブ、7月の20日ってなればコンブだったからね、決まったったから、その前に船はいでしまわないと（作ってしまわないと）何杯か約束したものをね。十人の他にそういう人たちが寝泊りして食べる、その世話してた。

水は猿留神社の下に湧水出るの、そこまで飲み水汲みに行って、ガンガン両方に担ぎ棒で運んだの。



目黒神社の湧水（平成19年1月）

井戸は無かったの、一軒か二軒か井戸掘る人あったけど、あと全部そこ使ってたの。お風呂は、昔、家のそばに川流れてたから、川水、昔きれいだったからね、それでお米もといだり、洗濯もゆすいだり、風呂水や使い水はみんなそれ、家の前通ってたの。山からこう来てね。お風呂は鉄砲風呂（風呂桶の下から焚くすえ付けの釜）それから普通の風呂になったしょ。いるときは風呂も焚いたよ。畑するようになって、外の仕事するようになったら、家にいないから。

畑仕事

畑ではいろいろ作っての～なんでも、ごしょう芋（ごしょいも：ジャガイモ）も作ったし、農夫もいやで、浜も何するかわかんないでね、浜に来たでしょ、ほしたら浜だって、そのときね、山にね、三十町歩、三十いくつか、成功してそれもらったの、私が来たときには成功の最中だったの、畑、農夫と同じ、農夫、豆作って、燕麦（エンバク：馬の飼料）作って、小豆も作る、何でも作って、ほて農夫6年やったの、猿留に来てね。畑は猿留の川のず～と上の方、川渡って向こうに土地あるの、三十何町歩、成功してそれもらったの、山と畑と土地。

山にちゃんと家建ててね、もう、おっかさんが綺麗好きだからね、山小屋でも板、びかびか光ってた、磨

いてね。そして、前にね、山から細いちよろちよろした水が流れてきてて、その前広く掘ってね、池みたくして、その傍に風呂桶置いてね、水運んでね、薪は山だからね。それにね、6年農家して、あと小作の人が入ったの、4年か5年して、それからやめて、植林した。畑全部ね、“らくよう”（落葉樹のカラマツ）植えたり、初めはトドマツ植えたり、1回切って出して、2回目はらくよう植えた。

一時期地震で船傷めたでしょ、そのとき大工さん9人も10人も、急いで船造るのでね。

猿留は、津波の被害はそんなになかったよ、造った船は庶野だったね。庶野とか襟裳、岬の方。

コンブ

コンブはやった～やった～コンブでつみつかったよ～、「つみつかったよ～」ってこわかったってこと。

家の前の浜がね、磯でしょ。ね、前から川向の方まで磯なの、その潮引きなれば、ず～と沖まで引くでしょ、だんだん引いていくからね。ほしたら、大っきな磯の上、コンブ上げていくでしょう。それ今度は一人で引張らなきゃならない、浜までね。したらこんな（両手を使ってつくる）かぶ、岩の間に引っかかるしょ、ね。したら無理くり引っぱったら、自分が前に飛んでいくでしょ、怪我するしょ。また降ろして、根っこをはずして。三人乗りのコンブ、はじめ三人乗りだったの、じきに一杯になるでしょ。ほんとにこわかったよ～まあ～まあ～まあ～忘れられない。コンブ採りになれば、“おかまわり”頼むでしょ、猿留の人ね、賄い（まかない）も作ったよ。

生活用品

家では、米、味噌、醤油、樽で買ったったからね。心配なかった。それでもやっぱみんな食べたね。おいも刻んで、蒸かして、干して、そうやって食べたよ、あるとき。

麦も食べたし、なんでも入れた。よそでは豆も食べたったけど、家では豆まで食べなかったね。味噌なんか口切って（ふたを開ける）みたらね、減ってしまつて、これぐらいしか（指で10cm位を示す）なかった、樽に。3年も4年もたつもんだから、買ってからね。

函館に荷物送るの、なんとか店、自分の特約店、送っておいて、ほして欲しいもの米でも味噌でも醤油でも何でも送ってもらったの。昔、大きな船で、汽船で持ってきたしょ、その汽船が来るときに運ぶわけさ。そうすれば、物なんかね、波あるときね、猿留は荒れ浜っていうだけね、名のとおり波が荒いの。だから、川向のところが湾になってるからね、そこが一番波が少ないところなの。

波があるときは本船が沖について、川向に荷物が上がるの、昔、橋もなんもなかったでしょ。昔の人、力

あったんだね。味噌樽でも砂糖樽でも担いで、米でも担いで、背負(しょ)って川越えたんですと。荷物が来れば、川向に揚げて、波があれば、川、背負って越えたんですと。今は楽だよな~昔なんかの話したら、話になんない。今の人なら「死んでしまう。」って言う。

祭り

猿留の祭りは、春は5月の12日、秋はいつだかわかんないよ。春は村の人が何か、たいして力入れないけれど、印ぐらいするのでしょ。

幟(のぼり)たてたり、神社参ったりするんですよ。秋はどうするんだかわからない。あっ、秋は9月の26.27日、28日は後しまいだからね。

そのときは、秋祭りだからみんなが出て、いろいろと世話するしょ、子供相撲するらしいよ。見に行ったことないけども、子供相撲があるらしい。

映画

昔は映画を上映によく来ていてね、うちの造船所でやったの。周って歩く人たち、なんでもあれ、幌満の宮なんだかって、宮沢でもないし、道路縁の、その人の息子が耳聞こえないんだよね、その人がよく持って歩いて、そのまだ若い人で、そういうような人がよく持ってきたのね。

するとこないからうちの造船所で、造船所だっているけども、なんかちゃんとして、きれいにして、あつたかくしてるわけでもないからね、そっちこっちからお月さん見えるような、「月見城」だかなんだか、みんながあだ名つけてね。

何をしてたかわからないね。あんまり見にいかなかった。うちの父さん自分でね、「なにそんなもん見たって、あんなもんだめだだめだ。」って、私出さないの、そして自分でちゃ~ん行って見てるの。

集金

猿留に嫁に来てから幌泉にも何回も行ったことあるよ。道のないときは(幌泉に)来たことないけどさ、道路できてから、よく庶野とか岬とかって。ほら、船はぐ(納める)から集金に、秋ね、集金になるから、よく来たよ。道路ついてたもん、バスに乗ってきた。昭和何年ごろかね、バス通るようになったの、昭和10年以降かもしれないね。そのあたりバス通ったでしょ。

船おろし

船を下ろすのを“すきい”っていうのね、それが「今日はすきい並べた。」とか「すきいなんとか」っていうのね、すれば親方がちゃんとお酒もってね、来るの。

“すきいの台のせ”っていうのね、親方がちゃんとお神酒もってくるしょ。そいではいでるうちに、また、

2回か3回ぐらい来るよね。で、泊りがけで来て、泊まらなかったらね~。泊まって、そして、来るたんびにお神酒もってくるのよ。(「すきい」キール、船底中央の竜骨のこと)

できた船はちゃんと降ろすときに、お神酒もって、ほって、昔は餅まいたもの。餅ね。餅まきだっていうとみんな集まってくるのね。ほって、今度は前から降ろすでしょ、ほたら、旗立てて、何回か回って、帰っていく。親方は乗らないよ、船廻すっていうえば、向こうから5~6人以上来るっしょ、まあ村の人もみんな手伝ってね、餅まきして、みんなでわいわい、餅ひらって。今度は、ほれ、船降ろして、そして三回まわってね。旗立てて帰るの。楽しい思い出だよ。船主は得意さんから旗もらうでしょ、その旗みんな持ってきて、たくさん旗たてて、出たら、三回まわるの、して、帰る。

不動明神

不動明神は、家のばあちゃん(中野リン)が目が悪くて、どこでも歩いたの。ほして、大樹のサイさんっていう、拝み屋さんが、なんでもきくって言って、悪い人や大勢ね、猿留からも泊まりがけで行ってたの。そしたら、家のおっかさんに、おまえには不動さんが守り神だからと言って、建てなさいって言われて、建てたの。



目黒不動明王

なんもよくなんない。それから豊似湖に上がってる白龍神さんね、あれもサイさんの所に行ってる時に、守り神だっていって上げた。あのときに年寄りのおばあちゃんたちたくさんいたからね、うちのばあちゃんと本間マサさんと二人の名前あるしょ、あとは信者一同って書いてある、おばあちゃんたちたくさんいたたの。

そして、春になれば、龍神さんのお祭りしたったの。後ついでね、家の嫁さんの息子は、毎年春は5月の13日、秋は10月の29日に龍神さんに、お供えついて行くの。お神酒もって。家には言い伝えはないと思うよ。お祭りっていうえば、果物もったり、お菓子もったり、

お神酒もって、龍神さんの前でね、お祭りするよ。その時、目黒からも行くし、えりもかどこか知らないけれど、いっぱい来るよ。

戦没者

民雄は戦争に行かない、行かない。体が不良だもの。兵隊にならなかつたらしい。目黒から戦争に行つて戦没者、たくさんいるよ。十何人ぐらいいるよ。忠霊塔をよく見ると11人が12人いるよ。たまたま行つてくるの。お花一輪でもあげて心ある人は拝んでくださいって書いてあるしょ。わたし行つたつて、花何もなしもんね、牧草の花とつてあげて拝んで、今ね、あんた、年数経てば、家族のもんでも忘れてるっしょ。かわいそうにと思つてね。

夫

楽しかつた時代なんてなんにもなし。父さんは飲んべえで、年取るたびに飲んべえ強くなつて、もう、いっつも酔えば喧嘩になるから言わない、心のちいっつもこうだつた（体を小さくした）。

したから飲んべえは大嫌い。自分の家でも飲むし、出てけば店あるし、店でも飲むしべし、誰かさんの家行くなら、一升かかえて行つて飲むし。角さんて店で、酒売つてるでしょ、もっきり飲めるでしょう。きりのいい酒呑みでないからいやだもんね～

電気

電気もなしにも、みんな石油だつた。ランプ、ランプのほや磨いてね、あれ、昔よくほや壊したでしょう。猿留で発電したことあるよ。水車とか作つた、作つた。トラ落しの坂、そこでも一回作つたし、なんだか2回も3回も作つたよ。



ランプ

工藤しづ子さん

私が来た頃、まだ駅通だつたね。工藤さんそこ。工藤しづ子さんは帯広の人、しづ子さんの舅は紋也さん、姑さんはなかなかきちつとした人だつたよ。どこから来たのか知らない。

いも

食べ物になつたとき、イモを刻んで、蒸かして、干して、それを糶（かて）にして食べたんだよ。炊くとき洗つて米と一緒に、ご飯炊いた。戦争当時の食糧難のとき作つた。昔、そのころイモ買いに、やかましくて買えなかつたでしょう、十勝の方からイモ買つてさ、広尾の知つてる人の漁師のね、家に、60俵も買つたでしょう、昼間運ばれないから、そこまで夜、大樹から買つて、そこまで運んで、そして、預かつて、猿留に運んだの。昔、そうだつたの、内緒で運んだの。大樹から運ぶときは行つたよ。猿留に運ぶときは行かない。

しいたけ

山菜は毎年採りに行くよ。フキ、ワラビ、塩してね。いっぱい塩してね。食べる時塩出しして、十勝までワラビ採りに行つたの。

シイタケは家の山に行けば出たからね。1回ね、父さんと二人で行つたら、昔、かんと（漢土）袋にいっぱい採つたの、行つたら木にいっぱい出てるの、すぐいっぴいになって、そんなことあつたよ。毎年採つてくるからね、干すのにもうもう難儀する。お天気よければいいけどね、昔、そんな乾燥機もなしから、なんだかんだ火の上に吊るしたり、天気のいいときは外に出してね、そして乾燥したの。売ることなんか昔なかつたもの、みんな使い物にしたり、自分うちで食べたね。採るのは、毎年採つたからね。やっぱり出る木を覚えてるからね、ほらね。

さかな

家はね、漁師相手だからね、船屋だからね、他所の人が食べれなくても、サケなんかも、食べた、魚。行けば1本とか2本づつ持たせるでしょ、だから、他所の人、なかなかサケなんか買つて食べれなかつたでしょ、普段ね、盆かお正月でなかつたらね。家はそうでないの、ほれ、相手が漁師だから行けば1本とか2本もらってくるからね。魚に不自由はなかつたよ。

チカ、あれ生で干したのとさ、茹でて干したのとあつたの、昔、米三斗入つたのか、二斗入つたのか、大きい袋、あの米の袋に一杯づつ、チカの干したのと煮干ともらつた。わかんないもんだから、そっちにくれたでしょう。後でチカ煮て出汁にしたら、すごくチカの煮干つて出汁出るのね。われ、わかんないもんだから、そっちに、こっちに、ただくれて・・・魚には不自由なかつたよ。

秋になるとね、魚釣りに船で海に出るの、二人か三人組んで、で、カジカ、アブラコ、こんな樽に塩して、三平したり、焼いて食べたり、魚に不自由なかつたね。

ヒツジ

昔、シカとかクマも獲れたらもらって食べたことあるよ。お肉はあんまり食べれなかった。なかなか食べれなかったしよ。牛だとか、なんだとか食べなかったし、昔はね。ニワトリは食べたのね。

ヒツジとかヤギは食べなかった。預かったけど。ヒツジの毛刈って、終戦当時に、羊毛で編んだもの交換したでしょ。ヒツジを預かって、毛を送って、シャツとかももひき、服生地だとか、そんなの買ってワイシャツ作ったりさ、いろいろしたの。

その当時どこでもヒツジ預かったしよ。毛糸はなかなか手に入らないから。何処から求めたのか知らないけど、自分で毛刈れないから刈れる人に刈ってもらって、店に送って、品物を、欲しいものを注文するわけ。それからまた、最初から、これこれって言って、注文するの、いろいろあったからね。

三頭か四頭ぐらいしか飼わないよ、あとやめたからね。何処から来るんだか知らねえども・・・毛は自分で店に送ったもんだよ。荷造りして、どうゆうふうにして送ったのか知らない。(笑い)

ホタル

ホタル見たことは、あるある。ホタルなんかどこでも見れるよ、どこでも見れるよ。家の周りとか、湧き水の所とか、そうだね、山に家があって、泊まって仕事したりするでしょ、だからなんもめずらしくないよ。三十何町歩もらったところ、そこに家が建ってたの、そこにいたの、今はもうないけどさ。

クマ

そこに、もう農家やめてからね、馬小屋も建ってたからね、家のほかにね、その馬小屋。

馬糞のあとだからできると思って、スイカ植えて穫ったこともあるしさ。なにかっていえば、スモモの木やら、ウメの木やら、グスベリーの木やら、グミやらなんでもたくさんあるの、山だからね、昔、植えたから。

それに山に行くでしょう、誰もいなくなっただよ。ここに家がある、ずっと大きな畑ある、その畑の真中にね、昔、キクイモだか、なんだかっていうね、背の高くおがる草があるの。畑の真中でもかたまっておがる場所あるのね、家から離れてるのね(100mぐらい) その中からクマが飛んでったの、びっくりしてね。あんなに遠いところで匂いでわかるものが、何も音しないのにね。飛んでって、ササワらに入っていた。いや～びっくりしたよ。

猿留でもクマに襲われた人いるよ。米谷久三さんっていう人。あのね、5月の5日かむよか(6日)だね。そのころ、まだシイタケも早いころだよ。シイタケ採るって山に入っていったんだって、夜になっても帰

ってこないって、みな探しにいったけどもわかんなかった。次の日もまた朝早くから探した。そしたらね、クマが死人のそばに座ってたって。クマがね人間の血を吸うと酔ったようになって、ふらっとなってるんだってね。そして見つかったの。そのクマ、今度はハンターが行って捕ったでしょ。持ってきて猿留の河原広いでしょ、棒やって立ててみるとものすごく大きなクマだった。猿留に来てから10年ぐらい経ってからのね。5月の初めだよ。



黄金道路

(平成12年)

黄金道路と監獄

黄金道路造ったとき、昔、飯場あったけどね。昔ね、川向のね、浜、監獄ができた。囚人連れて来て、なんもない、窓も無い、こんな窓一つ(手で20cm四方の大きさを作る)。そして、中に、なにか悪いことしたんだか知らないけどね。逃げたって。あそこに道路造るのに、こう、崎に行行って、そして、便所に行くって言って、逃げたって、山の方へ逃げたって。さあ、帰ってきってから、うちの隣だからね、う～ん、親方があんた、たがえて(抱えて)って、海の中突っ込んで、泣いてる、そういうことも見たしさ。ハッハッ。監獄あったの、大きな家建ててね、して、監獄の人たくさん来てたの、その中の一人が働きに行行って逃げたの、晩になったら逃げたけど、連れ帰されて、晩に家に帰ってから、すぐ家の前、海だからね、海の中つけて、泣いてんだ、大っきな声で。

薪わり

家では薪わりはしてないな、船やるので、木っ端出るでしょ、それで1年いっぱい焚けるんだもん、ほとんど薪って焚かないもん。割ることもない。いっぱい小屋に運んでおくでしょ。一年いっぱい木っ端焚いていた。

黒砂糖

甘いものとか砂糖は貴重でした。家では樽で買った。砂糖、昔、黒砂糖ばかりでしょ、白砂糖なんか見たことないぐらい、ね、砂糖は貴重だったでしょう。黒砂糖、樽で買った。なんでも、サツマイモでも干したのなんか、かます（むしろを袋状にしたもの）みがきニシンもかます（に入れ）。焼酎飲むから、昔、焼酎、大っきな箱にね、焼酎入ってたの。米でもなんでも、ほれ、昆布、函館の間屋さんに送っておいて、欲しいもの注文するしょ、船が来るとき、それ積んでくる。そういうのだったの、昔ね。お汁粉食べたり、あんこ作るとき使ったり、子供らガンガンって、毎日黒砂糖おこすのにね。昔は黒砂糖ばかりだったからね、なにするって。そうであったから、食べるものには不自由しなかったけどね。

不自由だったこと

何が不自由だったかね。働くのが一番こわかった。エヘッヘ（笑い）

戦争当時の思い出

戦争当時は、竹槍で練習したこともあったよ。学校でやったね。猿留の人がやったね。幌泉から教えに来ることはなかったよ。終戦を知ったのは、猿留に来てから（山から下りてきてから）だから、そんなときは、疎開小屋にいたし。畑のこっち側の木わらだった、その木わらの中に、家建てたの。そこに疎開してたの、猿留の奥。家族みんなだね。

終戦になって、猿留の家に帰ったけど、おじいちゃんとおばあちゃんが疎開小屋に残ったわけ、そして、7年8年も疎開小屋で暮らしたもんね。そのうちにおばあちゃん死んだでしょ。そして、畑の上段になって、おばあちゃん死んでから、おじいちゃん、上の段に家建てて、今空家になってるけど、そこに入ってたの、今も残ってるよ。佐藤さんのまっすぐの向い。

ほて、そんなときは気付かなかったけどね、家の中の梁、昔だからこんな太い梁、カツラの、その中通った跡、戸にも通った跡がある、敵の飛行機から弾（機銃弾）とんだ。家の中に入ってきた。猿留の家ね。その家は二階も直したからね、改造したから、土台はあるけれども、中は改造したからね、梁に残ってるけど（板などを）貼ってしまっ、何も見えなくなってる。ほくしたらわかるね。しばらく何年も経ってから気付いたの。板戸もね、ずっとこうね、入って抜けていったの、板戸の框（かまち）も通っていった跡がある。天井の梁も通った跡があるのね。しばらくたってから見つけたけどね。

（平成 14 年 11 月 10 日採録、中岡利泰）

北村 満 泰 明治 41 年(1908 年)生れ

歌別の「川ながし」

上歌別の町有林を払い下げてもらって、木を出したんです。今の肉牛牧場の採草地のあたり。ヌモノタイというところ。

木は鋸で切って、まさかりで“うき”（木を倒す側に入れる切込）をけずり、“や”（木を倒す反対側に打ち込むくさび）でしめたりして切ったんです。倒した木を、二尺(60cm)に切って“手ぞり”で川の縁まで、雪の上滑らせて下げたんだ。下り坂になるとそりが速くなって危なかった。

七分、三分のワイヤーをそりにかけてプレーキがわりに使うんです。ワイヤーをかけるのが少し遅れると、スピードが出て大変だったんです。よく手ぞりが、川までプツ飛ぶんでいったけど、怪我をした人はいなかったですよ。

木を切るのは年明けてから、川に流すのは3月下旬から4月でしたね。

雪どけで増水したときに流したんです。水量は今とは比べようもないほどあった。

鋸の目立てが上手な人は、1週間ぐらいで切ってましたが、私は10日位かかったんです。目立てがいいと作業も速い。下手だとまっすぐに切れなくて大変でした。

朝の3時ごろに弁当・道具・わらじを2足ほど腰にぶらさげて、家を出て5時ぐらいに山について作業を始めるんです。中には、木で三角テントみたいな仮小屋を作って、泊まっていた人もいましたね。床はササを敷いた上に松の小枝を敷いて、屋根も松を利用してましたよ。火が付きやすいのでみんな用心してたんですが、仮小屋を燃やした人もいましたよ。

切った材を川に流すと、二尺の木が川のあっちこっちで、石などに引っかかって、「とび」で引っ張り出すのが大変でした。河口（歌別橋の近く）まで流すのに4~5日もかかるんです。この間、水につかりっぱなしだから、足が水ぶくれになってひどかった。二股のところまでくると水量が増えて、後はスムーズに流れましたね。一軒が終わると、次の一軒が流すので材が混ざることにはなかったんです。



町民スケート大会（昭和 50 年代）

“モイワの淵”に材がたまって、深いので、引っ張り出すのが大変でした。石などに材が引っ掛かって、どんどん材がたまって、水をせき止めて、そこを崩してやると勢い良く流れていったもんです。

河口に流れた材は岸にあげて乾燥させるんです。そして、2~3日分を担いで家に持ってきて使うんです。担ぐのは「むしろ」で、今のナップザックの様なものを作って、背中が痛くならないように、工夫していました。

海岸に住んでいた人は、河口から家の前浜まで船で運んでいました。

材はその年の冬を越せるように大切に使いました。苦労したぶん貴重でした。

隙間だらけの家で、囲炉裏の周りは暖かいけど、背中はずばれました。

寝るときは囲炉裏の火は七~八分は水をかけて消して、薪を大切に使ったんです。火が出ないよう用心にもなったんですけど。持ってきた材を「まさかり」で拳ぐらいの太さにしてくべてたんです。一軒で材を十間ほど切り出していましたね。

私、15~16才の時に父親を手伝って作業を始めました。2~3年やったけど、後は手伝わなかった。歌別の人は昭和の初めごろまで「川流し」をやっていましたよ。馬が入ってきて、馬橋ができるようになって「川流し」はなくなったんです。昭和の始めまで「川流し」をしていたんでしょうね。

歌別の山は道有林で、魚付き保安林で木を切ることができなかつたし、それにあまり大きな木がなかったんです。上歌別の木は、一抱えもあるようなものを切つて、細いのは切らなかつた。毎年場所を変えて切つたけども、次第に細い木も切るようになったんでしょうね。役場が切る木を調べていましたよ。

「川流し」で大きなケガをした人はいなかったですね。

頼んで手伝ってもらうことを「手まかり」、自然に、暗黙の了解で手伝ってもらうことを「ゆいっこ」と言っていました。「手まかり」「ゆいっこ」で「川流し」をやっていたんです。協力してね。

その他の話題

ろくに道もない時代は、海岸や山を歩いて岬まで行きました。その時、岬は西風が吹くと黒土が舞ってひどかった。朝暗いうちに歌別を出て、用事をすませて帰ってくるのが夜だった。

昔の私の家には、「空窓」があったんです。天井についていて、雨が降るとロープで締めるんです。煙たいで全部締めるとだめだから、少し開けておくんです。石屋根は桎を敷いて、飛ばないように石を乗せたものです。

骨折した人は津軽まで船に乗って治しに行つた

んですよ。そこは、「カップがついているところ。」と言われ、良く治りましたね。

(平成7年採録、三浦民雄、尾山陽石、中岡利泰)

大平ミツ 明治44年(1911年)生れ

生まれたところは目黒

生まれたところは、目黒。孫じいさんは、「わたなべともゆき」といい、医者だった。

そのじいさんが死んだとき、薬、その頃は漢方薬だったんだわ。それを海に捨てた。そこにカラスが黒山になっていたのが記憶に残っている。

目黒の学校は、今と同じ場所にあり、20~30人いたと思う。運動会はパンツなんてそんなにはかないときだもの。お腰しめて、肌着を着て走って、ころんたら背中までべろんと出たりして。上靴なんてないから、売っててれば買ったんだろうけども。いい人でなければ履けなかつた。選手ぐらひはパンツはいていたかね。

5歳のとき母に死なれ、目黒で三年生までて、そのあと咲梅のおじさん(三橋)のところへきた。

三橋は、襟裳岬の山形の人が函館に嫁に行き、そのついで、咲梅に建網の船頭とかで来ていた。その頃の咲梅は10軒ほど家があり、沼久内さん、内海さん、佐々木さんという家があった。海岸歩いて庶野の学校や裁縫に歩いて通った。コンブ拾って干してさ。一反歩も畑があったか、イモ堀りに行つたりすればシカがいたりして。上のほうに墓所もあった。

おじさんの出稼ぎ

おじさんたちは(お婆さんと)、寿都のニシン場に働きに行き、その間米1俵と10円を預けられていた。一年いっぱいでもいいんだもの。田端(今、竹田かな)のじいさんばあさんと一緒に育てられた。今でも札幌から来たりすると私を呼ぶんですよ。墓に書いているのを私に聞けばわかるって、聞くんですよ。

嫁ぐ

幌泉には23歳のとき、その頃の村長の長岡さんの薦めで嫁いでいた。こないっていうのに再三おじぎしてこっちに世話した。今でも、長岡は親代わりっていうか、そういう付き合いなんだわ。

大平庄吉さんは岐阜で生まれ福井で育て、15歳のとき先代と、先に来ていた浜崎を頼って幌泉に来た。広尾の方でもコンブ採りやっていたけど、そこやめてえりもに来るようになって、びっちりこっちでやるようになった。

魚の加工と販売

浜崎と大平は魚の加工場をやっていた。松前の方からも人を頼んできて、この辺の人を頼んでイカをさい

て、海の中まで入って洗って干す。はせを作って干してスルメにして船で函館に送った。ブリコなどは秋田に送ったり。その頃は電報で品送れといってきた。

函館にはじいさんが行っていて、だんなはこっちにいてやっていた。樺太にも行ってマダラを加工していた。大東亜戦争が始まって帰ってきた。スケソやサケの粕漬をやったりした。昆布も送った。週に1回か、10日に1回か、船が来ていた。沖にいてはしけでそこまで運んでいったもんだ。

夜は引き網でチカを獲り、三平皿に一杯10銭で売りに歩いた。60年間リヤカーを引いて魚を売って歩いた。おにぎり食べながら歩いた。歌別の方までも行った。



すけそ(スケトウダラ)

昭和20年、終戦の年に新しい加工場が火事で焼けた。いまのマルハチのところで、魚粕を炊くのに、下に穴を掘ってそこで火を焚いて、上で粉末粕を縄ざるのようなもの、20なんぼ玉にして干していたのが、のっぴり落ちてきて火がついて火事になり、着物の1枚も残らず焼けてしまった。写真なんか何も残ってない。

みんなは昆布の時だったので、今の西川歯医者の方に家があって、そこにいた。

その頃10何人も一緒に暮らしていた。

家族

7人子供を産み、東京、八王子、札幌、えりもに子供がいる。静内にいる一番下の子供がこの間死んだ。

私ばかりはっちゃきになって働いた。85歳まで魚を売って歩いた。どこまでもリヤカーを押して歩いたもんだ。

楽しかったことはあまりありません。でもね、今まで元気にいたということは、魚を売ったおかげだと思っています。

じいさん(だんな)という人は優しすぎました。そこに座って新聞よんだり、本読んだり、何かを考えていた人でした。

加工場は今のマルハチ・マルサの兄弟一緒にやっていた分かれていったが、その頃は浜崎と大平くらいのものでした。

今の暮らし

この間、带状疱疹で病院にかかったら、おばあちゃんの心臓は20代の心臓だと先生に言われた。バクバクバクバクって、困ったものだったら、先生が、良いんでしようと怒られた。

目が悪いけど耳はいい。政治のこと知りたいし、見たいんで新聞を見るのが好き。

ディサービスに週1回・火曜日に行ってお飯をご馳走になったり、体操したり歌を歌ったり、遊戯をやったりおしゃべりしたり、何でもやります。小物づくりなどしたりしてくる。「ほら歌え。」と言えば、昔の歌が出てくる。「ばあちゃん、今日、お猿のかごや歌わないのか。」と言われる。杖でポンポンてさ、下が固いもんだから相槌うたさる。「いい按配にできたもんだ。」とみんなが言ってくれる。

(平成16年3月6日採録、新松信子・小川とく子)

金沢キク 明治44年(1911年)庶野生れ

子供の頃

川に“さるがに”(ザリガニ)の小さいのがいましてね、石をよけるとたくさんいましたよ。今はいなくなりました。

谷地の水たまりにカエルが卵を産んで、天気続きになったら干せるべさと思ったこと覚えていますよ。でもすっかり変わりました。

男の子達はマムシをつかまえました。浜の吉田さんに持っていったのは兵丹(ひょうたん)パンをもらってきたと。近所の山形さんに行くと瓶に入ったマムシとか皮をむいてある蛇を見ましたよ、薬なんでしょう。

普通、炉は砂利だけど、ここの家ではツブとかの貝殻、変わったものがあり、見ると、スズメの頭だったり、足でしたよ、かすみ網で小鳥を獲ってたから。ワラビの根で澱粉もとってた。

夜に行くんだけれど、いそがに(ハナサキガニ)が山になつてることがあるんですよ、それを獲りに行くんです。波の来るところにたまっているの、逃げるのも速いの、あつという間ですよ。2~3人くらいでよく歩いたですよ。父親が1人、ちゃんと火を燃やして待ってるの。

弟がタコ穴を捜すのにもついて歩きました。楽しみだったですよ。小さくても磯ダコは甘味があって味がちがうですよ。

磯ものを採りに行くときよく頭のないタコが寄ってくるの、新しいのでも頭がないの、トツカリが頭食べるの、『トツカリががちゃがちゃやってる、シケるぞ。』って言いました。トツカリってアザラシことでしょう、なんのことが解らなかつた。今も昔の言葉が出るでしょ、それなんのことって言われます。

『やませの受け皿』の後は時化ると言います。

家の仕事

父親は14歳のころからコンブを採ったと聞きました。コンブは他人に負けない人だったです。コンブ採りになっても、着替えなんかしたことないですよ。

コンブを干して終わったら、すぐ山へ行って、牧草を広げて干して、帰ったらまた舟にコンブがいっぱいになっているでしょ。休んでいられません。たまに茶碗でごはん食べても、水をかけ、たくわんで急いで、舟がどこに上がるか見ながら食べました。『ほら、早く食わなきゃ、表のコンブが光ってるぞ、早く、早く。』と急がされました。どこにでも上げる父親でしたから。時間がいたわしくてね。

磯が遠いので干す人は1人いればいいの、3人くらいが運んできました。

藁草履(わらぞうり)は70足くらい作っておくんですよ。昆布の時だけ履くのに。

庶野の磯は尖っているの、姉は一日に藁草履を3足も切らしたりしましたよ。私は背が低いのでこれくらいまで(胸のあたり)まで海に入りましたよ。

父親と兄が扁桃腺で寝たとき、山に馬を取りに行ったこともあるの。兄の嫁さんが山子(やまご)の弁当のようなおきなおにぎり作ってくれたの。しかたなく行ったの。塩をやると舐めに來るので、その時、首に縄をかけるの。椎茸があつて採ってたなら、蛇に3回遭ったので、馬を引っ張って帰りましたの。そんなこともありました。

馬小屋が3つあり20頭くらいはいたんでしょ。朝、牧場に出して、夕方小屋に入れるの、牧草は全部大きな鎌で刈って大仕事、機械でないから。

何十本も「におう(“にお”のこと)」を作っておくんです、冬用に。



にお(昭和40年代の農作業)

冬の仕事に男は米俵をたたいて、藁草履を作るの、籠作りも。

秋に苦別から篠竹を取ってきて、今は無いそうですが、篠竹は細くて節の間隔が長い、海藻を入れたり馬の草入れにするんですよ。

- ・ 春の日に気のない親方に使われるな
- ・ 秋の日に気のない人を使うな

親がよく言っていました。

遊び

今はお手玉という、「あやこ」やりましたよ。学校の“さく”でやりました。昔は目の大きいのは美人でなかったから、「あやこ」をやったら目が大きくなるからダメといいました。

昔の美人は『髪はからすの濡れ羽色、富士額(ふじびたい)、色白、眉は三日月、目細、鼻高、おちょぼ口』そんな話を聞いたことがあるの、だからやるんではないと。

近所に男の子がいるから相手してやれば、棒を削ってくぎ刺し、竹割りというの、立てたりひっくり返したりするもの一緒にやりました。おはじきは姉としました。

姉はタラの頭にギザギザのが二つ入っているでしょ、骨なんですよ、そんなので遊んだとか言っていましたよ。

タラ釣り、酢ダコの製造とかがあったから、頭やざっぱは粕で干すから、そんなのを拾ってくるんでないの。遊び道具っていったて、何もなかったですよ。

男の子はタコの製造場が干してる茹ダコのトンビカラスを盗って、食べては叱られていました。タコに色を付けてるから、盗ったとこが白くてすぐ判るの。

お祭り

父親が相撲が好きで、何回かお宮、神社の前でやっている相撲を見に行きましたよ。

それと、今は美島の向こう側の昆布干し場、そこで草競馬をするんですよ。そこへも行きましたね。今は昆布の干場になってるけれどルーランの方でもやりましたよ。競馬場を作るのに石拾いをさせられました。

浦河の方から来たらしいアイヌの女の人、メノコっていうでしょ、その人は鞍だけでなく、あぶみにも足を縛っていましたよ。一等にはなりませんでしたがね。山からつれてきた馬はあまり走らなくて、あっちさ、こっちさ行くの、そんなことあったんですよ。

学校

家からだいぶ離れていました。時間にして片道40分くらい。

冬は下駄に雪がついてころころして歩けなくなるでしょう「雪つり」とか。柱のようなところで下駄の雪を落としたの。

着物を着てたでしょう。角巻きは大人ので大きいし、上に何を着たのか覚えていません。綿入れだったんでしょう。

秋田から来た背の高いスマートな先生がいました。朝一杯ひっかけてくるんでないの、男は徴兵検査がある、素っ裸で四つんばいになって肛門まで見られると話をしました。生徒は笑いもしないで黙って聞いてました。昔の生徒はおとなしかったですよ。

運動会は身体が弱かったから走ることはしません。

歌別の神社へ

幌泉に来たことはなかったけど、歌別までは行きました。道路の上の方に進藤さんて神社があったんです。白い髭のはやした人でね。

私が身体が弱いもんだから、そこで祈祷みたいなことをするので、お祭りだからお礼参りに行かねばだめだからと言って、叔母についてきて祈祷してもらって、赤飯をもらったのは覚えているけど、どうやって来たのか、帰ったのか判らないの。

広尾へ

子供の頃は行きませんが、大人になってから広尾にも行きました。石坂にいとこがいて、そこへ行きました。庶野から広尾の駅までは歩いて広尾からは自動車です。

広尾まではずっと海岸ばかりです。冬にも一度行きました。すぐ崖で雪が深くて歩けないから、ずっと海辺を歩いたですよ。だいが後からですが、ピタランケのところは、浜から砂が飛んで来て、バスが動けなくなって、歩いて庶野に帰ったこともあります。(参考・・・広尾線の開通は昭和7年、黄金道路のバス路線開通は昭和21年)

海難事故

昭和か大正か忘れましたが、5月25日だけは覚えています。

砂利も飛ぶようなすごいやませ(東風)でね、舟が空っぽで寄ったの。舟は船頭が1人、櫓は片方に2人、もう片方に2人でどうしても5人はいるんでしょ。5人死んだんでしょ。

3月の初めにも、そこに舟が見えてるの。そしたら吉田さんの親父さんが、上にある地藏さんのところで火を焚いたの、そこに入るな番屋前に行けっていう合図に煙上げたのに、波が来て吉田の舟と四十栄の舟が2杯、何かにつかまって沖に出た者は番屋前から出た舟に助けられて、3人くらい助かったけど、あとはだめだったの。

急に波がでてきたの、ルーランってところはそうなんです。波が何枚も折ってくるの。

ホタル

ホタルはいました。雑木のあるところで、流れ川はないけれど、石が積んであって、そこから水が湧いてくるの。畑であったり、牧草地であったり、今は昆布浜にもなってるどころ。(現在の小泉さんの近辺でしょうか)

ルーランは浜だし、ヤチガシラ(谷地頭)とかいいましたよ。少し行けば国道に出て、そこに“あねこ橋”もありました。

夕方になったら、風のない何かどんよりした夕方になると、コウモリ、小さいけれどコウモリがいっぱいいました。あんまりめんこくない顔をしていますね。

それにツバメが飛ぶでしょ、『あっ、雨ツバメだ』と言ってね、「そんなときは虫が飛ぶんだ」とか言うでしょう。ホタルは手の中でつぶれないように持ってね、帰りましたよ。

ミミズクもフクロウもいました。

(平成15年9月27日採録：草野泰子)

小山内義一郎 明治45年(1912年)生れ

トセツ大明神

庶野に和人が何時頃来たかは定かでないようですが、美島地区(以前はトセツ)の高台に富世武大明神が祭られています。この神さまは慶応二丙寅歳(1866)願主請負人杉浦嘉七豊明、支配人紋蔵、惣番人中と書かれています。



トセツ大明神

昔よりその土地に住んでおられる佐々木広志さん方に行き、色々お話しを聞いてきました。佐々木さんのおじさんは、明治9年の庶野生まれだそうです。

そのおじさんのお父さんからの聞いた話として、この神様は、本州より北前船に積まれて来て、直接トセツに上げられて現地に奉られたそうです。その様なことで、佐々木さんのご先祖はその時代からこの地に定住されていた様です。

では、なぜにこの地に奉られたかという、定説はないようでしたので、私達の推測では、いくら大きな北前船といえども、無動力船、冬の海、しかも難所といわれる襟裳岬を越えて本州に向かうのは、大変であったろうにと思います。

その季節風の強い時でも、トセツ地区は庶野の裏山の陰に位置しているの、比較的海もおだやかな上、襟裳岬にも近く、何回となくこの地を通った船乗達は、この辺りで停泊して風待ちをしたのではないのでしょうか。

そういうことから、船乗り、または、その関係者が航海の安全を祈願して奉ったものと思われます。

庶野の海岸は岩礁地帯が多く、魚を獲っても、買う人もいないし、昆布等、主に海藻類で生活をしていました。

明治の中頃になると段々と人も集まって来て、部落も形成されると、沖に漁に出る人もいたようでした。毎日舟を陸に巻き上げる。それも満潮時を見計らった作業、大変苦勞だったようです。この作業は昭和10年位まで、船入潤ができるまで続きました。

マダラ釣り

その当時は、マダラ釣りから始まったようでしたが、獲ってきたタラは、船主と乗組員の家族の作業で開き、作り、乾燥して出荷するのですが、当地の風が幸して、良い製品ができたと言われております。タラ以外の魚は、みな雑魚として、魚粕作りをしていたようです。

仕込み制度

その頃になると、商人が来て、商店を開くようになり、呉服単物から、酒、タバコ、食糧品まで店に並べるものでしたから、現金がなくても必要なものは借りる。期限が来ても返済できない。結局海藻等で返し、返しというより、持って行かれたというのが、本当でしょう。そのようにして、仕込み制度ができたと思われる。

初めから金のないのがわかっていても、店を開くのは、彼らの計画的であったかもしれません。

私共も兄弟が多く、親父一人の働きでしたので、そのような生活は永く続きました。しかし、そんな仕込み親方達も函館の海産物、委託問屋達には随分と搾取されていたようです。

当地より送る海産物はみな、この問屋に送られて、買ってもらう。また問屋より送られてくる魚具や生活物資等は協義しての値決めは一切なく、一方的、問屋から送られてくる仕切り文書で整理されていたようです。

そんな折、昭和の初め頃と聞いていましたが、安藤孝俊という人、この方は、福島県庁から道庁に出向で来られた方だそうでしたが、北海道の漁村や漁民の生活を見て、組合運動に入られたそうです。

ワラジ履きで北海道沿岸を周られ、漁民には、自らの力で協同運動結集して、貧乏追放に立上れということと、委託問屋等に対しては、漁村と漁民に対し正当な評価と理解を寄せてほしいと訴えられたそうです。

庶野漁組

大正4年、庶野猿留漁業組合として、設立認可されていますが、事業は行わず、長い間、漁業権の管理の

み行っていたようです。

昭和5~6年頃になり、安藤さん方の運動もあり、また、そんな時勢にも、向かっていたことでもあったのだと思いますが、漁組ではギンナンソウやフノリの集荷として共同販売を行うようになり、段々と組合の機能も本来の姿に動き出しました。

そうすると、函館の委託問屋の連中は大勢で押し掛けて、浜の者を集めて、色々な懐柔運動をしたようでしたが、時の流れには勝てなかったようです。

私共も、一日も早く仕込み制度の関係を絶ちたいと思い、その仕込み親方とは何回となく話し合いをしました。が、何しろ20数年間も取り引きをしたのに、ただの一度も精算もなかったことでもあり、どうにも話し合いはできず、最後は、向こうから、「お前等勝手にせえ。」の一言で、けんか別れのような、後味の悪い別れ方をしましたが、何かようやく、解放された気分でした。しかし、父は、昔固気の人でしたから、随分と恩を感じていたようでした。

庶野の魚

前にタラ釣りの話しをしましたが、タコの空釣り漁業も当地の中心的な漁業です。この漁法は、大正5~6年頃、様似の業者によって伝えられたようでした。

当時の庶野は出漁日数が極端に少なかったのです（1ヶ月に8~10日位）。餌のいらぬ釣り縄を、タコのいるような底に張っておく。長い日数で留め置きができる。タコの生息している場所は岩礁と砂場で調和がとれている等、船が出漁できなくても、沖で縄が働いてくれるので、凧になると出漁して、縄を揚げ替えて漁をしてくる。このタコ空釣り漁は同じ漁法で、70年以上、現在も続いています。

昭和4~5年頃になると、動力船の時代に入り行動範囲も広くなり、沖合いに行きメヌキをするようになり、新漁場でしたので、水深を確実に把握すると一回の漁で船倉に入りきれず、甲板に山積みして帰ってきました。しかし、その魚も地元では売れず、船に積んだまま浦河まで行き、売ったものです。そのメヌキも日高の船、広尾の船、それに八戸辺りの大形底引船により、幾年もたたぬ間に取り尽くされてしまいました。

オヒョウもたくさん釣れました。この魚は深海より、産卵に30~40m位の底にくとと言われていましたが、大きいのは豊一枚位、重さ50~60kgのものもたくさん釣れました。函館より日魯会社の冷蔵船が買い付けに入り、私共も1日に40尾も50尾も釣り揚げました。

コニシンも毎年のように大漁でした。これは定置網で獲るのですが、6月頃になるとコニシンの群れで海の色が茶褐色になり、その群れが押し寄せ、網に入ると部落中、男も女も借り出され、男は沖揚げ、または釜炊き（魚粕を作る作業）。女は浜いっぱいムシロを敷いて、魚粕を乾燥する作業。



魚粕かま（郷土資料館蔵）

なんせ時化のこないうち、天気の良いうちの作業なので、網元は、働いてる人達には、たくさん配当すると言っていました。作業が終わると、それ程の賃金はもらえなかったようです。それでも現金収入のない時代であったので、みんな一生懸命、働いたようです。

庶野ではありませんが、昭和9年頃、はっきりわかりませんが、南部の山根、えりも本町の沖合で大謀網でマグロが大漁で、港の中も岸壁もマグロの置き場がなかった位であり、手伝いに行くと大マグロをもらって来たというくらいでしたので、町の記録にも残っていると思います。

その様に回遊魚も底魚もたくさん獲れたが、庶野では、特定の魚だけしか売れず、残ったものは乗組員の賄い用か、魚粕作り位でした。その様な時代でしたので、当地に住んでいる漁業者以外の人達も、魚は金を出して買って食べるものではなく、もらって食べるものと思っていなかったようです。

ホッキ貝も百人浜の沖でたくさんとれて、缶詰工場がきて、幾年もの間操業していました。

ウニも食べる位なら干潮時には、足首もぬらさずに採れたが、買屋が入って金になると聞くと、潜水夫を入れて採りまくり、資源が無くなってから、形式的な制限をしたところで後の祭りです。

その後、本町のウニ種苗施設より、ウニの種苗を譲り受けて放流していますが、一度乱獲によって絶えてしまったものを、元の漁場にするには、並大抵の努力ではできないと思います。それ以降、10年位、現在(平成7年)まで当地では、ウニの採取は行っていません。

黄金道路

庶野で漁業をおこなっていて、一番の立ち遅れは、海岸の道路がなかったことだと思います。十勝には帯広はじめ、広い農村など消費地がありながら、鮮魚にして、一匹も持って行くことができませんでした。

黄金道路と名付けられた方は、昭和7年頃の北海道庁長官の佐上信一さんと聞いています。当時で随分お金がかかったので、この名前が付けられたと聞いています。

その後も、造っては壊れるの繰り返しでした。特に、昭和40年1月9日の大時化（一九災害）では、海に入れておいた漁具は流失、全滅。黄金道路も徒歩でも歩けない位、壊れてしまいました。



初期の黄金道路跡（平成19年1月）

その後は新しい技術も取り入れて、現在の様な道路ができあがりました。

庶野の昔の様子

明治45年（大正元年1912）に、庶野に村医として迎えられた大槻先生という方の息子さんの庶野について書かれたものが、斎藤春雄さん（故人）方にあると聞いて、斎藤さん方へ行き、そのお話を聞いたり、その書かれたものを見させてもらいました。その書かれた方は、当時中学生で、斎藤さんのお父さんのお友達であったようです。当時の庶野の住居や交通のことが書いてありました。

その中で一番先に、庶野村は、よくこんな所と書いています。良寛和尚が、島流れにされたところもかくやと思われる所である。点在する30~40戸の漁家から成立っている。全然集落をなさない、さみしい漁村である。村医として迎えられた家は、クマザザの屋根にクマザザの壁というなんの造作もない、全くの小屋であった。床の間は置き板をした上に、ムシロかゴザを敷いてあったように記憶している。

また、住んでいる家には、風呂もなく、2~3丁離れた木賃宿（宿泊料金のかわりに米や薪の物品で支払う宿）までもらいに行った。そして、猿留村（目黒）の村医も兼ねているので、1週間に1回、2日間の予定で診察に行った。庶野・猿留間の道は、北海道中、第一の険路、富山県の親知らず子知らずの比ではなく、一里半内外（約6km前後）にわたる、仰げば絶壁直下の海岸、あるいは、岩石と岩石の間を潮の引いた退潮の時に走るようにして通るのである。ことに冬になると石の上が凍っていて、腹ばいになって通った危険難波の地で、当時50才を過ぎた父には、ずいぶん辛かったと思う、と書いてありました。

馬

私の物心ついた頃は、郵便局があり、通送さんは、郵便局から送っていました。そんなに道のない海岸を毎日の様に郵便を背負って、目黒まで通う通送さんと呼ばれている人達がいました。昔は駅通というのがありまして、そこには、駅通には駅通牧場があり、国の大きな土地を管理し、馬をたくさん飼養、宿泊等の施設もありました。この駅通の作られた目的はわかりませんが、国の何等かの方針によって作られたと思っています。

戦後、この土地は、その業務を行っていた人に払い下げになったと聞いています。

庶野の各家庭でも馬をたくさん飼っていました。多い所では40~50頭位もいたと思います。先日上島さんもお話をしていた様に、軍用馬に買い上げてもらうのが、一つの目的であったのではないのでしょうか。当時の金で200円、300円程で、買い上げされたと聞いております。また、庭先で売買がおこなわれていたようです。本町では馬市場もおこなわれていたようです。漁家の副業としては、大変良かったと思えました。クマの被害や崖からの転落など事故も多かったようです。

また、放し飼いのため、一般の人の畑が荒らされ、大変でした。自分の土地でありながら、自分の畑に柵をめぐらして、馬の侵入を防がねばならず、それでも、食い荒らされて談判に行くと、逆に、お前らの柵の作り方が悪いからと叱られたなど、今で言うとちょっと笑い話の様ですが、昔は力の差でその様になったのでしょうか。



軍馬（昭和10年代）

昔の幌泉

幌泉は、天然の良港として栄えていたところと聞いています。北前船が舵を入れたまま、岸边まで入って来て、荷役のできる場所は、近隣にはなかったようです。海路だけが、大量の荷を運ぶ唯一の交通機関であったのでしょうか。

明治当初は、幌泉に支庁や裁判所、その他の公共施設が置かれていたと聞いています。

海の交通

私の物心ついた頃は、庶野にも蒸気機関の300トン位の貨物船が西庶野方面に2隻位、庶野に2隻位は常時、運航していました。函館から来る時は漁具や食糧などを、函館に帰る時は魚類や昆布等を積んで行きました。また、各部落ごとに廻漕店というのがありまして、舳船を待つ、積荷揚荷の取扱等を行っている家がありました。また、病人や用事のある人達もこの船を利用して、函館方面に行き来していました。この船は、函館、釧路、根室方面に運航していたようです。

遭難

襟裳岬周辺海域は、昔より海難事故の多い所で、特に、大正から昭和の初めには外国航路の大型船に多く発生しています。

私の知っているだけでも、大正4~5年頃、灯油を満載したオランダ船がドンドン岩付近に、座礁。この船は積荷の灯油を海に捨てて、離礁。

大正7年、目黒に新生丸が座礁。この船も積荷を捨てて、離礁しています。

昭和2年、アメリカ産の製材を積んだ美島丸がトセップ岬に上がり、破損沈没。

昭和6年、東洋にクレオートを積んだ船が座礁沈没して、付近一帯の昆布など海藻類やウニ等に大きな被害を与えています。

その他、新潟水産試験場の調査船が、ドンドン岩付近。旅の航海船や地元漁船の全損事故や転落事故等、当地だけでも100人以上の人が海の犠牲になっていると思われまます。

昔は、生命保険もなく、労災の保険制度もない時代でしたので、後に残された家族は大変な苦勞をされたようです。

助け合い

それでも、昔は生活に困っていても、周りが同じ貧乏人たちなので、子供心にも、劣等感もなく、みんな仲良く助けあったものです。

たとえば、大家族でも風呂のない家が、風呂のある家から入りに来るように言われると、その度ごとに家族みんなでもらい風呂に行きました。

また、正月用の餅つきも、臼と杵もない家では、毎年決まって、道具のある家に行き、手伝いを受けて、餅をつきました。その当時は、部落の若者達は杵を肩に餅つきの家を回り、手伝いに歩いたものです。

その他、冬に大雪が降ると、私共の住んでいる小屋のような家は、雪に埋まり、裏山のとっぺんを見ると大波の様な雪で、いつ、雪崩がおこるかわらないので、真夜中でも、安全なところに住んでいる家に助けを求めて行きました。

みなさん、お互いに生活に困っていても、心からの

助け合いは、今、思えば、ほのぼのとしたものを感じます。

庶野の学校

庶野の小学校に私が1年生入学したのは、大正7年でした。教室は、2教室で、1年から3年まで(1学年20名くらい)古い教室で屋根には石が上げてあり、雨が降ると雨漏りがひどく、子供達は逃げ回っていました。教室の真ん中に太い柱があり、真後ろにいと先生の方がよく見えませんでした。先生は校長先生と代用教員先生と2人だけでした。

新校舎は、大正12年にできたと思います。私の5年生の時の校長先生は、今でいう、単身赴任でした。いつも留守がちで、あまり教室にいることはなかったようでした。6年生の時の校長先生も単身赴任で大の酒好きで、朝から赤い顔をしていました。

また、学校のそばを流れている、シトマン川に橋はなく、歩み板を渡して歩いていました。雨が降って川の水が増水して板が流れると、西庶野方面からの子供達は通学できず、幾日も休みが続きました。橋ができたのは、昭和3年頃ではなかったでしょうか。

先日、学校通信を見ましたら、中学校があるとはいえ、校長先生以下教職員19名とかありましたので、学校教育も随分変わったものと思っています。(庶野小中学校は平成18年4月から庶野小学校となった。)

陸上競技会

昭和の初め頃より本町においておこなわれた7部落対抗の青年陸上競技大会は、盛んにおこなわれたものです。特に昭和4~5年頃は、岬と庶野の優勝旗争奪、岬では足腰の立つものは、部落全員応援に行くというし、庶野でも馬に乗って行く者、漁船は出漁を取りやめて部落民を乗せて、応援に行きました。それは、賑やかで、楽しみでもあった。大会も昭和6年に勃発した満州事変により、軍事教練に変わってしまいました。

庶野の桜

庶野の桜は、エゾヤマザクラというのだそうです。私の知っている一番きれいな年代は、大正年間から昭和の初めの頃ではなかったかと思います。

全部で桜の木は、自生で3000本以上といわれ、中に三大桜といわれる特に有名な木は、扇桜に檜桜。この木は、檜の大木の枝の折れた所から生えたものでした。昭和10年頃の大風の時に倒れてしまいました。

それに、夫婦桜。この木は、大人一人では、両手を広げてまわし切れない程の大木の幹に、違う桜の木がめり込んで、幹の上部で一本の木になり、何か男女の営みのように見えるので、誰かこの木に名前をつけたか、元祖夫婦桜と書いた名札が付けられていました。

昔から決まって、この花見に来るのは、幌泉小学校の上級生と高等小学校の子供達でした。歩行で、日帰りでしたので、花見も大変でしたでしょう。

また、部落では、花の咲かないうちから売店が店開きをすると、花が散って葉桜になり、明かりがなくても夜桜見物などといって、一ヶ月以上もの間、花見が続いていました。なんの楽しみもない時代でしたので、部落の若い者達の発散の場所でもあったと思います。



花見(昭和10年代)

庶野桜の木の生えてる所は、ほとんど民有地でしたので、戦時中は畑を作るため切り倒され、薪か、焼いて木炭になってしまいました。

大切に保存されていても、樹齢70~80年と言われてましたので、今頃はどうなっていたかわかりません。十数年前より、田中清勝さんたちが桜保存会を結成し、町有地に種々の桜の木を移植していましたが、土地も狭く、昔の面影を残しただけでも大変御苦労なことと思っています。

豊似岳にも桜の木があり、えりも石楠花のように、長い年月と強風にさらされてできあがったのでしょうか。幹のまわりが30cmもあるのは、背丈は1mにはならず、愛好者達は、昔はあまりやかましくなかった頃に、豊似岳まで採りに行き、庭木盆栽として楽しんでいたようです。花は白い小さな花で根室方面にある千島桜の花に似ているようです。

伝説

伝説としては、数年前、町広報でも報じられましたが、ドンドン岩と豊似湖には、水路があり、干潮、満潮の差があるということなんだろうが、昔たまたま、湖に行った人は雨降りの後に増水していたのを見て、満潮と思い、また、好天続きで減水の時は、干潮と思われたのではないでしょう。

また、水深も昔は底なしなどとも言われていましたが、誰かが、丸太でイカダを作り、湖の真中辺に行って計ったら、24尋とか26尋とかと聞いておりましたので、メートルでは36mか40m位ではないかと思われる。

昔は、豊似湖には、サンショウウオが生息していま

したが、ニジマスの放流によって、サンショウウオの幼生がニジマスに喰い荒らされ絶えてしまったのではないかと聞いています。そのニジマスも今では、一匹もいないのではないかとされています。餌不足のようです。

ドンドン岩は、時化の前兆に大きな音が出ると言われていますが、あの岩には、沖に向かって大きな空洞があり、ある程度の干潮時に空洞に空気があり、そこに大波が入り、空気が圧縮されて、波の引く際にあふれ出て、空洞の外に出る瞬間に爆発のような音響と共に、水煙が高いところまで、立ち上がるのだと思います。大満潮の時や大時化で、空洞が水の中ですと、あまり音は出ないと思います。

その他、寛政十年(1798)、近藤重蔵が当地方を探検中、従者が馬と共に、断崖から転落死して、それから豊似湖は馬蹄の形に変わったと伝えられています。昔より底なしの湖とか、主がいるとか、神秘の湖として多くの神様が祭られています。

慶応元年(1865)に祭られた美津山大神(妙見神)、目黒の人方が奉った白龍神。庶野の信仰家の奉られた奥山伴僧坊なども奉られています。

豊似湖の水を飲むと病気が治るといふ言い伝えがありまして、一升ビンを背負って、湖に水を汲みに行くのをよく見かけました。

当時は、不治の病と言われた、肺結核にかかる人、特に若い人に多く、私の知っている人でも、仙台の大学に行っていた先輩、函館中学を出て、幌泉役場に勤めた同級生、八雲中を出て、道庁に入った友達、軍隊に私達と一緒に入隊した4人の内2人。家庭を持って子供達もでき、喜んでいた友達。その他、兄弟4人の内の3人、3人兄弟の内2人、一家全滅のような家もありました。感染するといわれ、誰も近寄ることもできませんでした。軍隊でも亡国病と言われていました。

戦後、抗生物質のストレプトマイシンとかの特効薬ができてから、この病気も治るようになったと聞いています。この様に、不治の病といわれた病人も、その家族も迷信とは思っていても、神頼みの気持ちで、豊似湖の水を飲んだり、飲ませたりしたのではないのでしょうか。

その他、大正5年頃に、悪性の風邪も流行し、特にスペイン風邪とか鉄砲風邪とか(当れば必ず死ぬ)など、当時は、あまり予防措置もとられなかったのでしょうか、大勢の人が亡くなったと聞いています。

薪切り

私達の一番の苦勞は、何ととっても薪切りでした。漁夫が疋夫のまねをしたところで、苦勞ばかり、能率は上がり、一年分の薪を確保するのに50日も60日も山通いでした。売っているところはあっても、買う力がなかったのです。灯油を焚くようになったのは、

昭和43~44年頃ではなかったではないでしょうか。

おわりに

昭和45年頃より、庶野は、黄金道路も漁港も良くなり、魚もコンブも順調に水揚げがあり、価格もよいところまで行き、庶野に住んでいて、良かったと思ったこともありました。

最近、魚は急に激減し、価格も低迷しています。今後は、組合も漁民も大変な時に向かっていると思います。今までの様に、ただ獲ればよいとのことではなく、漁業者自身が考えて、乱獲を防ぎ、資源を大切に生活の安定を図らなければならないと思います。

(平成7年6月採録、上島良次、中岡利泰)

= 歌別の昔ばなし =

はじめに

この「歌別の昔ばなし」は、昭和63(1988)年2月7日に歌別生活館において開催された「歌別の昔を語る会」を収録したビデオテープから作成したものです。

歌別高齢者教室から以下の7人の方に参加していただきました。

石黒キヤ、佐々木タマ、平野フミ、村中ミワ、坪サヨ、高松八三郎、高松要正(敬称略)

助言者 歌別小学校校長 佐藤健一

司会 えりも町教育委員会社会教育課長 喜多昌
記録 えりも町教育委員会社会教育係長 東龍一

A 平野フミ：私は、大正12年の4月28日に歌別に嫁にきました。その当時からみると、ちょうど51年目にあたりますけども、素晴らしく、なんでも発達して、すごく暮らしやすくなったので、自分でも振り返ってみて驚いています。

B 村中ミワ：私が嫁に来た時、昭和2年の年、なんにも家のまわりにはなくて、小屋で生活したようなものですから、今なら誰もが想像できない生活をしてきました。

喜多：村中さん、歌別で生まれて、歌別でずっと育ったということで、後でいろいろな話を聞きたいと思います。

C 佐々木タマ：歌別に来て67~8年たつ、大正5~6年位の4月30日嫁に来た。道路がなくてみんな浜を歩いていて、馬に乗って歩いていた。私が嫁に来る時は、幌満は、道路がなくて馬に乗って嫁に来た。幌満は橋もないし、川尻を馬で渡って来た。大変だなこん

なとこ来て、と思った。

D 石黒キヤ：私は、明治 35 年生まれでさ、17 才で歌別に東洋の方から嫁に来たの。今年の 9 月で 70 年になります。

E 坪サヨ：私は、歌別で生まれて、歌別で嫁になった。歌別といっても端から端のようなもので、私は昭和 18 年に嫁に来たのですが、東歌別の所はほとんど、崖の上には家なくて、全部浜の方だったね。嫁に行った坪家には冬になったら、コンブ終わったら、ほとんど配達さんだけ、浜を通ってくるから、ほとんど配達さんだけだったね。

F 高松八三郎：私は歌別で生まれました。86 才になりました。今、昔の、数えて 88 です。昔の小学校は今の生活館のところにありました。(神山さんの下ね。) 飲み水はみんな歌別の川から汲んでいました。私が小さい頃、母をぼって歩いて(母の後をついて歩いて)泣いていたら、先生がいて、「おいで、おいで。」と言う、行けば、小さい黒砂糖をくれた。黒砂糖が欲しかったんだね。毎度後を追って歩いた。

G 高松要正：自分だって歌別の生まれだわ。おれら辺りは、昔の生活はまだまだ不便だった。学校時代のことを考えると、海岸沿いを 3 年生まで歩いて歌別へ、4 年生から今のえりも小学校に通いました。道路がなかったから砂盛、ここの大島さんの上の方、コロップの川がねえ、1 本橋、その 1 本橋渡ってね、学校までは 30 分以上かかった。おれんちから。まっすぐ行けばいいの。川で魚を捕るとか、ちょっと雨降った後は、川水出て、一本橋から落ちてカバンを流したり、そういう経験があります。



コンブ漁(船外機のない時代、昭和 30 年代後半以前)

D :ここの学校建てる時、材料を採りに上座の方、歌露の方行ったの。材料を採ってきて、この学校作ったの。

校長：私が前に来た時、昭和 29 年ですからちょうど 34 年になります。今の学校は、古い学校でしたし、橋は木でした。水道がなくて歌別の川の水を汲んで飲み水にしたし、風呂の水にもした。まだ国道が上でなくて、下を通って、まだバスが通ってましたから、高松さんの軒先をすれすれに通った。それと、歌別の川の水がもっとたくさんあって、(水道水を取るようになって少なくなった。)そこで子供たちと泳いだりしていた。今は川の水は使わなくなった。歌別の川の水はいい水で、歯が丈夫になると言われていた。

PTA 会長、当時、亡くなった三浦栄吉さんで、高松さんのじいさん(高松勇栄さん)が元気な頃で、自治会費とか、部落会費とか、学校の PTA 会費とか、あの当時で階級を 13~14 に分けていました。総会でもって誰をどの等級にするか、誰の家は病人がいて金がかかったから、等級を下げよう。誰の家は働き手が一人増えてコンブ余計に採ったから。

いっつもそんなことやってて、決まると、それに何がけをすると神社寄付だとか、PTA 会費とか、なかなかうまい方法だなと思ったんだけど、どの等級に当てはめるのか、決めるのが大変だなと思った。

あと、よく子供たちと山へ行ってコクワやブドウなどを採った。海なんかにも行って自由にウニを採らせたり、誰も文句を言う人もいなかった。フノリも採ったりしていた。

家内なんかも、ウニやフノリを採って漁組に出していた。いいときなんか自分の給料よりよかった。あの頃、鑑札というのを買ったんですね。私は 700 円だったと思うのですが家内は 900 円だったと言っていた。いまだにわからないんですけど、漁組に聞いても「わかんねえ」って。

高松さんの前にウニの加工所がありました。それと、缶詰工場があった。今回、来たらなくなっていた。

御縁がございましたのか、もう亡くなりましたけど、山田崇という子がおりまして、それのお嫁さんをお世話することになって。今のナミちゃんを浦河の西舎の牧場で、お父さんいたもんですから、そこへもらいに行っ、当時ですから、馬では来ませんでしたけど、トラックに荷物と一緒に、助手席に花嫁を乗せて、それから、荷物を後ろに乗せて、結婚式に参加する向こうの親戚の人達も乗せて来て、トラック一台でおさまった。公民館もなかったし、もちろん生活館もなかったから、みな当時家でした。岩間さんの家でやった。

学校は、当時は複式で、子供はけっこういたんですけども、私が来た時は、今の小助川 PTA 会長だとかが 6 年生でした。当時、私も複式持った時、2 年生と 5 年生でした。

一つの教室に 60 人持ちました。今ちょうど 67 人生徒がいるんですが、それでも 5 学級です。昔の運動会なんかは砂が飛んだりして、むしろで小屋を作ってい

たけど、それでも風で砂が飛んで、昼ご飯を食べてるときに、砂がかかってゴマ塩みたくなくなった。今の子どもたちにその話をしても実感としてつかめない。どこの話だろうって。

米が穫れない地域ですから昼になると、子供達は一齐に家に帰って、見てると、だるまストーブにイモやカボチャ、塩辛がありましてね、それを食べるとすぐに学校に戻ってきた。上歌別の子がわずかに弁当を持ってきていた。

喜多：学校の話がいろいろ出ていましたけれど、明治35年に吉田熊蔵氏より歌別村5番地に木造平屋30坪を買入れて、分教場として尋常科4年まで収容する。そのころは、児童30人だった。小学校は、今の生活館の駐車場にあったわけですね。大正13年に歌別村256番地に移ったということですね。佐々木さん、村中さん、高松さんが生活館の所の学校に通った。（この文章にある生活館の位置は、歌別橋左岸中歌別バス停の所にあったが、2002年小学校跡地に移設された。）

B：4年生まで歌別の学校にいて、5年生から幌泉小学校に行った。それまで、先生は1人だけだった。川村先生という人だった。橋は、板の橋で一本橋だった。雨でも降って流れれば、学校を休まなければならなかった。

F：丸太2本を組んだ橋だった。小さい子ははって渡った。

喜多：今のスケートリンクの方には、道路がありましたか？

F：道路というか、今の山の馬街道みたいな道だった。そのころは、草屋が多かった。低い小屋で、戸口はむしろだった。

G：死んだ医者洞口さんは、馬でずっと歩いていました。

B：病人でも急にできれば、馬で通ってきた。

G：その後、オートバイで来た。

C：最初は、馬で迎えにいった。馬持ってけば、夜中でも来てくれた。あの方はいい人だった。

校長：お医者さんは馬を飼っていたのですか？

C：重病入ればよそから馬借りて迎えに行っていた。その後、洞口さんは自分でオートバイを買って来

てくれていた。



洞口医師（昭和40年代前後か）

F：その頃は浜にばかり家があったでしょう。家を建てるときは裏に坂道を作った。津波になったら逃げられるようにね。

喜多：車が通る道路ができたのは、いつ頃なんですか？校長先生がいた頃はどうでしたか？

校長：私のいた頃はもうバスが通っていました。

喜多：平野さんのおばあちゃんが来た頃には道路がありましたよね？

A：はいありました。大正12年ですからね。

喜多：大正12年頃には道路があった。

B：今みたくコンクリートでなく、バラスを敷いていた。

喜多：平野さんのおばあちゃんが、お嫁さんに来た頃は車できた。石黒さんがお嫁さん来た頃は馬で来た。大正12年頃にはある程度の道路ができていた。今の高松さんの前、浜をまわっていた。

喜多：バスはいつ頃通ったのですか？

A：いつだったかね～。ハイヤー来たってね。町さ見に行った。えりもまで。灯台の下、昔、けっこうな坂だった所まで見に行った。

？：何かあると馬で来ていた。運動会にも馬車で行った。

A：私が来たときに、昔、味噌でも米でも一俵とか

一樽とか、町に行って背負って買ってきた。

校長：岬や東洋の人は船で買いに行っていたのですか？

C：船でまわす人もいました。私達が来た当時は船でまわしていた。

E：一年中食べるものをいっぺんに買うから、馬車とか使った。

C：押し入れに積んでおいた。

G：かねさや西川さんで買っていた。

喜多：歌別にその頃は店などはなかったのですか？

B：高松さん一軒だけだった。遅くに建った。コンブ採りをしていたから。

A：海産物など全部船で函館に送っていた。それで全部味噌や米を送り返してくれていた。昆布積むのも船、魚獲って粕にして積むのも船。港でなく船で渡していた。

G：3艘、船があった。それで函館と歌別で取引をしていた。

E：今日は時化ていないから、昆布積むと言ったら。

G：よく食料なんかは、高松さんの店に来ると明日何丸が入るから、それで戻ったら船が来て、人夫や近くの人が手伝って倉に運んだもんだった。そういうあわれな生活をしていた。

喜多：町史なんかによると歌別は昆布場所であって、そこに函館の方から船が来て、歌別はすごく栄えた地区だと書いていた。

B：私の昔は函館の海産問屋と昆布の取引をして、それと引き換えに米や味噌、あと自分たちの必要なものを送ってもらっていた。

喜多：函館から歌別まで行き来していた。

G：東山丸というのは一番大きいほうの船だった。日高丸五と六があった。

喜多：その頃港というものはどこにもなかったですね。

G：はい、どこにもありません。風がいいとちょっと磯船をだして、“さんば”(三半：三半船)のような船で漕いで、鯿(はしけ)もあった。

喜多：いつ頃まで続いたのです？

B：戦争前だね。

喜多：港がある程度できてからは、そういうことはなくなりました。

G：だいたい、ここ昆布を車で送ったというのは、いつ頃でしたっけ。

B：いつ頃だろうね。

G：おれらも、兵隊いったあたりが昭和16年だから、そのずっと前だろうな。ああゆう車で運んだとしたら最近みたいだな。

校長：その、船で沖合いに止まってるところに昆布を出したり、帰りに米積んで来た頃で、米はいくら位だったんですか？

G：おれ記憶あるのは、10円という記憶があるな。

D：一俵25円だって言ってたけど、ヤミだってね。

B：25円というのは欧州戦争のときだべさね。

C：私達ね、来た頃ったら、もち米で一俵8円位で、米で7円位じゃなかったべか。

B：そんなに安かったの。10円はず〜と後。

校長：そしたら、昆布はどうだったの？

C：昆布ね。

F：その頃、昆布は仕込み制ね。いいかげんに勘定したんですよ。

C：もとの昆布は8貫目(30kg)だもんね。4貫二つあわせてた。

B：それも、みんなひざでね。機械もなくてさ、ひざであわせてやっていた。

A：わたし来た頃は、機械はありましたよ。

D : 2 ~ 3 円もしたろうか? 高松さん。

F : その頃昆布は、上、中、下、と分けられていた。

C : その頃2 円くらいでなかったか?

喜多 : 8 貫目で、米と比べれば昆布はどのくらい安かったんですか。

G : 相当安かったしょ。米と比べれば。

C : 終戦後ね、ヤミ屋が米売りに来て、沖の船行って1 等昆布7 段と米一俵だったね。

C : それだらねあまりにも米が高いんだけど、生きるためには仕方がないから、高いたって買わなきゃいけないからと言っていた。うちでこそ、買わなかった。うちで三石に土地あったから。

喜多 : 今、昆布の話がでたけど、今ほとんど長さも決まって、機械でしめますよね。

B : 当時は、手やひざかぶでまるけてね。

A : 私来た当時は、わら縄であたりまえに、今と同じように尺も決まっていた。

B : 4~5 等だったら昆布湿して、昆布で縛ったものだ。

喜多 : 今、20kg ですよね。

C : もとは、4 貫目だから。

喜多 : 今、20kg の前は30kg だった。ダンボール掛けるようになってから20kg になった。

喜多 : その前が8 貫目。

G : 8 貫目ったら kg にしたらなんぼになる。

B : 30kg だね

校長 : そのころ、今と比べたらコンブはたくさんあったかい?

G : コンブかい、たくさんあったね。

B : ねじりに、なったら、日暮れるまで採らせるんだから。

G : 採りつくせねえんだ。

B : 秋になったら、10 月になったら、夜干するの。

G : 海さ陽落ちる時、旗おろすんだ。

喜多 : そんなに、採れたんですか。

B : それでも、採れきれねえんだもの。

A : 今みたいに、1 日で干し上げなきゃならない、とかいうんじゃない。白くなくてもなんでもかまわなかった。

G : よくあれ、小島さんあたり、おれ子供心に覚えてるけど、みんな草刈り場さ背負った(しよった)の、生で結んで。

C : 浜さ、干されねえっから。

G : 白いもなんも、要は乾燥すればいいんだ。

喜多 : それで等級とか。

B : それでも、いい昆布は1 等2 等だった。

喜多 : 粉ふいてもですか?

B : 粉ふいても。

C : 採って拾う人だったら。



(昭和30年代前半以前)

A : 今、時間制限されているけど、夜寝ないで拾う人もいた。

C : 拾えば、1日に3杯も、4杯も拾うもんだ。

B : 船も不足だったから。今、60何杯いるしょ。昔は30杯位しかいかなかったから。今、採る人は倍いる。

喜多 : 昔は、昆布採って、あと1年暮らせるだけ。

B : 寝ても暮らしてもいけねんだわ。越年(越冬)にたぐ(焚く)薪切らねばねえしょ。そして、冬のうちに山さ小屋かけて薪切ったぎって、それを今度、雪のあるうちにソリで便利のいいとこまで運ぶの。そして、雨降れば川流し。女もなんもね。わらじ腰さ付けて、“もっぺ”(もんぺ)あるわけでないし、その当時ね。“すっぱさび”とって、やって、そして木流した。上歌別から3日かかった。

G : スポンだってねかったしょ。

C : わらじ腰さ2足か3足つけて、そして、みんなトンビかじってね。

B : 川さ運んで、船まで運んで、船で家まで持ってきて、上さ上げるんだ。

喜多 : あと、コンブのほかには漁したというのは？

E : 海藻だね。

G : ギンナン、フノリ、コンブ、これで1年位暮らしてたな。

喜多 : 昔の歌別の暮らしというのは、春先になると海藻、夏はコンブで、冬になると自分で薪切って、そういう生活をしていた。

校長 : 当時、ハタハタなんて獲らなかつたのですか？

G : ずっと後。

校長 : 来なかつたのですか？

E : 来たんでなかつたの。私、ブリッコ拾ったもの。

喜多 : そしたら、当時、網だとかなかつたんですか？

G : そうというのは、手にはいんねえって。ハタハタ獲れた頃って何年頃だべ、終戦その頃でね~か？

C : その前は、刺し網で若干かかったくらいだ。

喜多 : 今、みなさんの話しを聞いていると、魚を獲るっていうのは少なかつたんですね。

G : 少なかつたね。

A : その当時は、秋から冬のまかないに、ニシンとかハタハタでも獲れれば、たくさん糠塩にしておいて、冬の間から春まで食べた。

E : 野菜、イモ、カボチャ蒔いて穫るでしょう。みんな5~6反蒔いてたしょ、それ冬の間食べた。

B : デンプンだって、みんな自分で作った。

喜多 : ほとんど、自給自足だったね。

E : 買うっていったら、肉ぐらいでないの。

A : ほとんど昔は、肉買うの、正月ぐらいだよ。

校長 : その頃、楽しみっていうのは何でしたか？

B : なに楽しみっていうかね。

E : 正月かな。

A : なんかの時には白い御飯炊くの。テンプラ揚げるとか、新しい魚食べるとか、普段と違う御馳走が楽しみだった。

G : 今みたいに、踊るとか、歌うとかでなくて、食べるのが楽しみだった。

A : 毎日、山の中だから、春になればイモでもできれば、毎日、たびたびイモ掘ってきては、おつゆ炊いてね。

E : 昼は必ずね、たいていどこでもイモでしょ。



ぶりこ(ハタハタの卵)塊

A : 塩にして食べるって、他のほうでも言うけど、必ずお昼にはイモ炊いて食べると聞いてたけど、それはいいですよ、私達のときは。

B : どの家でも決まっているんだもん。

G : 習慣なんだわ。昼忙しくイモ炊けねえば、晩に必ず炊く、なんでも一日一回イモ食べるんだ。

校長 : そしたら、食べる楽しみとね、今ならテレビ、カラオケだとかあるけども、じゃその当時老人クラブだとかないでしょうし、じゃあ何してたのですか？

A : お正月は私達育ったところは、私の父親たち必ずカルタ大会やりましたよね。

喜多 : 今の百人一首。

A : しょっちゅう私の家には、お正月、青年の人が集まってきて、自分がとらなくても、さわぐの見てるのが非常に楽しい感じであったよ。

G : おれは、子供の頃、正月っていえばいろはカルタだとか、男の子でも女の子でも遊ぶたら。今よりも雪あったよ。

喜多 : 雪は多かったんですか？

G : すごく多かった。その当時、凧あげしたり、独楽(こま)やるとか、あとパッチというのが、娯楽だべな、子供の頃は。それとソリだな。

B : あと、正月に「たまっこ」もらってね。

校長 : 必要な物一回にまとめて買うし、着るものなんかどうしました。

B : 着るものは、必要な時に店さ行って買ってくる。

E : でも、ずいぶん“継”つけて着さしたよ。昔なら。

校長 : 背負って(しょって)歩いて売りに来る人いましたか？

B : あったね。

G : おれだって6年生ぐらいまで着物着てたな。その当時の親達、何やるってば“刺し子”だかなんっていうの、本当にああいうのって、不経済だなと思うけ

ど、でも丈夫だったな。

C : 暇あれば昔の年寄り刺子ね、おなごでも暇あれば針仕事だもんね。今、暇あればテレビ見て寝ることだべさ。

校長 : 今、夜なべの話でたけど、ランプでしょう。

B : そうそう、ランプでやったんだよ。

喜多 : ランプはいつ頃まで？

C : いつ頃までだべね。電気ついたので、う~んと。うちのタネコが昭和9年生まれだから、2つの時。たった1円がついた。2円だよ。2円で付けてくれた。少し風が吹くと消えた。線取り替えてから消えなくなった。昭和10年だ。

喜多 : よく停電したと、もう風吹いてきたら、今晩も停電するなと思ったら、ろうそく出してきてたと。



燭台 (郷土資料館蔵)

C : 石油とランプは常備していた。

喜多 : 石油は、今ガソリンスタンドとかいっぱい本町にあるけれども、その当時は石油は、どこから買ったのですか？

G : やっぱり、高松さんで買った。

喜多 : 高松さんに売ってたんですか？

C : 一缶3円1斗入って、大島さんたち、みんな(電気)付けても付けなかった。あとで付けてお金かかった。村中さんところも。

G : まだしたども、おれら子供の時代貧乏だったから、1升ビン持って、何回買いにいったかわかんね~。

校長：米やなんかと一緒にね、お酒だとか置いとくわけではないの？

喜多：お酒は自分たちで造った人もいるという話も聞いたけど。

D：デンプンでね。造って飲んで回って歩いている人もいた。

校長：その記憶あるのは、高松さんにコップをおいてさ「もっきり」ってね。

喜多：お酒を直接コップに入れて1杯なんぼってね。

B：そうだ

喜多：Fさんあたりでは、もっきり経験はないのですか？

D：高松さんとお金預けて、飲んで、残ったそのお金また預けていた。「もっきり」だったら安かったべさ。

G：今だったら昼間から、酔っぱらって歩くなんかみたことね～な。

A：私達小学校の時、道路の端にすごくひげのはやした人達が、そっちにも寝てる、こっちにも寝ててね、おっかなくて遠回りして歩いたもんですよ。

校長：今だったら、お医者さん近くにいるけれど、その当時は、富山の薬売りですか。

B：そうだね、富山さんから随分買ったね。いよいよ歩けなくなったら医者さ行くけど。

校長：今からみたら、なかなか医者に行かなかったですよ。

B：そうそう、いかなかったね。どこか具合悪くなれば富山の薬でね、でもそんなに使わなかったですよ。

G：病気もそんなになかったな。

B：そうだね。

校長：あんまり、血压なんて気にしなかったしょ。

C：今なら、めずらしくね～わ。

G：あったのかね、気にしなかったのかね。

C：あんまり、肉食い過ぎるからだ。

A：佐々木さんのところで肉あたり前に、昔みたいにしなくなったしょ。肉別に煮たしょ。

C：昔なんて、かってちがう。昔のね、私家（わたしんち）の死んだ「長介じいさん」だったら、炭ぶつとばしてしまった。七輪で炊いて、その炭もなんも使わねえんだ。

E：みんな、肉は小屋で炊いたの。

校長：肉は、家で炊いたらダメだったんですか。

E：肉はだめなの、家さ入れたらダメだって。

A：肉を食べる時は、別の小屋の隅の方で七輪で炊いて、その炭も全部外さなげてしまうの。

喜多：その当時、食べる肉といふとなんだったの？

B：やっぱり豚、牛肉、馬。

G：馬が多かったんでねえか。

喜多：ほとんど自分たちがとってきて。

G：いや、よそで死んだ肉だとかさ。買って食べるっていうことはなかった。

A：お正月用にブタを養っていた。自分でつぶすこともできた。

G：俺だったら、犬の肉最高食べたな。そしてね、俺ら、なお小便たれてたもんだから、16位までたれたもんだから、寝小便の有名な男だったから、隣のTさん、小便で有名なんだわ。赤犬の肉、小便たれにいいってずいぶん食ったな。今でも犬の味はわかってるけど、今の人、食べね～しな、食べたらまた、逮捕されるかと思って考えるけど。ハハハ・・・

D：今なら犬の食べる人なんてね～わ。

G：この～、冬だら肉は犬、馬肉だったら、めったに、どっかで、山で死んだとかさ、そういう肉もらって食べたけどさ、牛肉は食べたことなかった。

B：雪降ったらスベって死んだりして、自分達一軒

で食べないで、近所にも分けたんだ。

C : 戦争に負けたっけ、魚食べていいってね。

喜多 : さきほどから、私、気になってたけど、みなさん、今、風呂がほとんど自家(じぶんち)にあるけど、当時風呂なんかはどうしたんですか？

B : 粕炊いた釜、それをすっかり洗ってね。

校長 : 五右衛門釜みたいのですか？

B : そんだ、それで風呂焚いたの。

E : 下さ板ひいてね。



幌泉灯台下での海水浴(昭和30年代)

B : よく家だって何軒もねかったから、焚いたってば、入りに来いってね。

喜多 : それは、自分の家の中だったんですか？

B : 外だったの。

喜多 : 外だったんですか。むしろかなんかで囲って、そして焚いたら、自分の家だけだったらもったいないから、近所も呼んだんですか。

C : それで、フキも炊くしね。すっかり洗って。

喜多 : 風呂も焚いたし、フキも炊いたりして、味噌も炊いたね。

G : 今なら、本当に余分なものばかり買って困ってるんだ。

C : 木の風呂ある家なんて数えるだけだった。Aさん家にあつたべさ。

A : 家にあつた。そのかわりすごく大きいんだわ。

木も結構厚い木でね。枠で作ってあって、四角い風呂でね。よく水をガンガンでかついで入れてね、11回ぐらい運んで歩いたんだわ。

喜多 : 水は、水道もないから、どっかからかついで持ってきた。

A : 今日、風呂炊こうと思えば、朝少し早目に起きて、朝ごはん前に風呂の水汲みに行ったもんだ。

G : ほんとうに、風呂の水汲むの大変だった。

校長 : 釜は付いてたんですか？

A : ええ、鉄砲釜ついてたの。焚くのは薪で焚いたの。

E : それから、だんだんとポンプでね。ポンプはやってね。

喜多 : ようするに、井戸が付くようになったのはいつ頃ですか？

B : 20~21年頃だね。家でポンプつけたの。

喜多 : それまで、飲むとかいうのは、沢水使ってたんですか？

C : いや、浜の手の方、中段に下がれば湧き水出てね、そこから汲んだんです。昔、“ちょうけい”にアルミでふたしてて、しっかり、ぴっちりまかなってね、水汲んであがると、風吹くとガバガバに氷ってしまう。

G : 佐々木さんとはポンプ付けるの早い方だったね。

C : 早い、早い。うちなら昆布場に初めて付けた。

G : どこの家だって、湧き水を利用して、飲めなかったら洗い物するのにゆすいだり、飲み水は井戸から運んでたな。

喜多 : そのころ、風呂の水だとか、僕らも記憶あるけど自分うちには、共同井戸があつてね。そこで水持ってきて自分うちの「かめ」に入れてね。

B : つるべ井戸でね。

喜多 : ぼくは、つるべ井戸、あまり記憶ないけど、みなさんどうでしたか？

B : わしらの時だら、湧き水だったから、つるべ井戸ねかったよ。

A : あそこにあったしょ。長谷川さんの三叉路近く。

校長 : わたし来た頃には、金沢さんの所にあったね。

C : あそこ遅くまで、つるべ井戸だったもんね。

D : うちで赤痢になった時、井戸の水汲んだらだめだって言われて、縄はられてしまったよ。

校長 : 汲ませないっていうんですか。

D : うつるから汲ませないって、まあ、えらいめにあったことあった。

C : あれ、終戦後でねえか。

G : 21年頃でねえか、赤痢はやったの。あれの時、おれのとこの兄き、役場さ移された。

校長 : 当時その、五右衛門風呂とかに入るとかに入る順番なんか決まっていたんですか？おやじさんが先に入るとか。

E : 私の家ではあったもんね。やっぱり、じいちゃん、一番先でね。私、入るときなんか、本当に風呂の水ちょべっとしかなかったもんだわ。

D : うちで今なんか、孫から先に入ってる。それから、わしでね。

校長 : 嫁さん、一番最後に寝るとはなかったの。

A : 私、来た時、座るところもね。

E : 姑さん先に寝ないと、寝れなかったとかね。それつらいなと思ったね、今でも忘れねえわ。

A : なんぼ眠くても、針仕事やって居眠りしながらやってましたよ。それでも、やっぱりね、みんな寝てからじゃないと、安心して床に入れないから、居眠りしてはおこられてましたよ。

E : 今、あれだけど、晩御飯食べたらテーブルでみんな勉強したもんね。そんな、部屋とか机とかなかったね。そして、うちのじいちゃん、すごくなんでもわかる人で、「わかんなかったらおれさ聞け」ってね。まず漢字のわかる人だったね。「とくべえ」さん。本

当に知らない字はなかった。助かったなあ、うちの子供達。

喜多 : 本当に今だったら、みんな一人づつ子供部屋持ってたね。

E : 全部並んで勉強してね。すごく大きなテーブルで家族多かったから、嫁にきた時、私入れて7人だったから、それから、増えて、増えてね。



ちゃぶ台(卓袱台)(郷土資料館蔵)

校長 : 一番多い時で何人位いたの？

E : 13人位だわ。

喜多 : 昔の家族構成ってというのは、一軒で7~8人というのが常識でね、多いところは10~13人位ですもんね。

A : 私、嫁に来た時、目の見えないばあさんいたから、その人本当に丁重にあつかうもんだからね。朝起きたら、まかなわせてやって、そして「よこざ」の真ん中に座布団2枚重ねてひいて座らせて、座るったら一番先に炉口さぐって、それで手のとどくかぎりさぐるの。そうゆうふうにするの。

D : 私、嫁に来た時、14人だった。したっけ、みんな出てしまっって、今、3人になった。

E : やっぱり、風呂入るところから、座る順番まで全部決まっていたもんね。

喜多 : おやじの席決まっって、兄弟でもだいたい上から順々にね。

A : それは、今でもだいたいね。

校長 : 平野さんのおばあちゃんだったかな。お正月の元日に若水汲みに行くって、役目が決まっってると言っ

てましたね。今だったら、昔のそういうしきたりがなくなってきたますものね。

E : なくなるみたいね。今の息子たちやらねーもの。若水なんてしないよ、家でなんか。

B : 今したって水道の水だもの。水道の水だってやるよ。若水汲んで神さまば拜むよ。

A : そして、その若水でお雑煮でも、なんでも作るの。

D : 家でも、まだじいさん生きてるときだったらやったけど、今なら誰もやる人いないね。

A : 七草の粥炊いてね、必ず馬屋の裏に行つてね、清水がいつも湧いてね、その岸にセリがあったの。そのセリを探ってきた。

B : それでも、Aさんたち、昔、若水汲む理由知ってるでしょ。うちの姑さんがね、「年の初めの若男、水を汲まんと、こがね汲む」って言ってたんだよ、そういう話聞いたよ。

A : 若水は、私の育ったところでもあったし、ここでもあったしね。

喜多 : 年寄りを大事にしたっていうことだね。

B : 絶対服従だったね。私らの時代はね、そういうもんするもんだとってね、もう親の時代からそう聞かされてるから、そうしねばねえものとしてきたども、今ならそんなこと考えねえくなった。

G : それでもやっぱり、今、考えれば、これが本当に日本人ならば、これっていうことあるでしょう。おれらの時代がそういう時代でも、今よく考えるけど、やっぱり昔の軍隊のあった日本、そういうものでも、おいらも苦労したけど、おいらの息子に何分の一でもあればという気がする。

C : 今のテレビじゃあ、子供たちは良くなんね〜わ。

喜多 : 今、歌別の学校でウサギなんか飼ってるけど、昔の子供たちってどうだったんですか。

G : 昔は多かったよ。

E : ニワトリとか、ヤギ、綿羊とかね。みんなの家にね。

喜多 : その世話は、みんな子供たちがやるの。

E : 乳搾るとか、餌やるとかみんな子供たちだったね、家(うち)の場合は。

G : おれ歌別の学校で、ウサギ飼っているっての最近聞いた。それが家の孫がさ、日曜日なのに、ウサギの餌やるからって言って、それでわかったさ。今ウサギ置いている家(うち)ってないしょ。昔だったらけっこうあったもんだ。

校長 : 学校で増えすぎて困ったから、生徒のじいさんがウサギの肉うまいからもらってこいって、でも生徒らがかわいそうだから、ダメだって言ってね。

B : 本当にね、自分で手かければかわいいもんね。

喜多 : 昔はウサギを養って食べていた。子供たちは嫌がっていたが。ブタなんか、修学旅行行く時、売ったりもした。

校長 : もと、ニワトリつぶすのなんか上手でね。だいたい、今の息子の嫁ですけどね、アキアジ一匹送っても作れないんですよ。出刃なんかないから、どうやって切るなんか、わかんない。切り身で買って育ったんですからね。今の人たちって魚はつくれない。刺身はつくれない。そういう自分で、手作りで作るって、伝わっていかないな。

E : 今、子供にやらせないもんね。

校長 : だいたい、イモの皮むけない。

E : うちの孫もそう。だから家(うち)さ来たらやらせるの。カレーライス作れて、全部肉も、イモも、ニンジンも材料切らせて、作らせるの、本当にへたくそだよ。

C : 親、使わさせねえからさ。

E : ぼうき(幕)なんか、ぜんぜん使えないんだよ。

G : 学校で、今ぼうきなんか使わないのか?

校長 : 使いますよ。

C : 今、ぞうきんも使うかい?

校長 : 使いますよ。掃除機もありますけどね。今の子供のね、お弁当なんか見ると、みんないいもの持っ

てきてるものね。

G : いや～本当だ。だいたい家(うち)の孫、魚食べねえ。魚物いっさい弁当に入れねえんだ、おれらだったら糠漬け入れて匂いしてな～。

喜多 : 漬物は、今の子供に匂いがやだって、昔はあれがほんとに保存食でね。

E : 本当に、何樽も漬けたよね。

喜多 : 必要性があったんだね。



漬物の準備(昭和30～40年代か)

校長 : 冷蔵庫、冷凍庫ないし、貯えておいたら、塩漬けしかないものね。弁当作ったら、もとは大変だったでしょ。

喜多 : お昼になってサイレンが鳴ると、一斉に家まで走って、そしてカボチャとイモと食べて。そして、学校に走って戻ったですものね。たまに弁当作るときは、本当に苦労したと思うけど。

D : おらえ(俺ら家)の子ども、ご飯の上さ、“さんぺい”(三平汁)かけて持って歩いてら。

A : 私、自分のとこの仕事すましておいて、何日が暇もらって、よそにたのまれて出面に行くわけ、お弁当もって。一日たいがい70銭でね。おまけに仕事をまで(まめ)にしてくれるからって、5銭ぐらい増してもらって。そのお弁当持って行くのに、おらずに梅漬けの樽、一樽買って。まず1年2回か3回、昔のカラフトマス、糠で、赤くなったのね、それ1本買ってもらえば、10日も20日もね、弁当のおかずを持って行ってね、しょっぱいもんだから、わんづか持って行ってね。梅漬けと、最高のごちそうでね。あと自分うちで、味噌造ってたから、造る時に野菜たくさん入れ

てね、ニンジンとかゴボウとかね、味噌出すたびに、なんぼか出してきて、それ弁当のおかずにしてたんですよ。それ決まってたんですよ。今なら豪華な弁当作るんだけど。

G : おれも、あれだな。小学校の頃、ここで岩間さんとの番屋、ここで建網やってた頃、アキアジあった、今みたいに獲れなかったけど、いくらか獲れたわけだから、岩間雄二、おれらと同じクラスでしょう。あの当時、番屋さ寄るの、学校行く時、大きな炉口に、大きな切り身で焼いていて、寄れば必ず一串もらったもんだ。それが楽しみでね、寄ったもんだ。

喜多 : 炉縁は、まだあるの?

C : いまでも、串で魚焼いて食べてるよ。

G : 茶の間にあるのかい?

C : いや、台所にあるの。ガスで焼いて食べるのうまくな～わ。

喜多 : もう一つ聞きたいんだけど、最近家の中も暖たかくなりましたけど、寝る時寒くて、僕らも湯たんぼ使ってたけど、話によると、石を焼いたといいますね。そのころの様子をちょっと教えてくれませんか。

B : 石、みんなストーブの上さあげるの。3つも4つも焼いて、そして包む時、水かけてさ包んで、焼けないように。うちの子供たち、尻焼いたこともあるんだよ。

C : あと、豆炭はやってね。

喜多 : 豆炭がはやったの戦後だったもんな。

A : それから電気あんかだもんな。

C : したどもね、あんまりあれ長く使ったら、焼けて底んとこ落っこちるって言うしょ。

G : 今の衣類だとか、化繊とか入っているから昔と違うんだ。昔ならなんぼボロの布(きれ)でくるんでも、めったに焼けていかねえんだ、そんなに。今はそういう生地が違う。あれだけ熱つい石だから必ず落ちる。

校長 : 朝まで熱ついの?

C : 朝まで熱っついよ。

A : あんまり急に暖つたためないで、自然に暖つたためおけば、お湯かけても、「ジュ」っていわなくても暖ったかいですよ。

B : やっぱり、ねえばねえって、それぞれに工夫したもんですよ。

喜多 : そうですね。

C : 昔だったら家も寒かった。

校長 : 寒いでしょう。

C : もとだったら、裸で寝て丹前一枚で、今では、シャツ着て、寝巻き着て、それでも肩さ風ついて寒いものね。

喜多 : 昔よく、お正月になると障子張りしてましたよね。

B : 障子張りは、必ずやったもんね。一年に一回だから。

喜多 : 今の子供ら経験ないと、思うけど。

B : 今、そんなのねえもんね。

G : いや、今の子供でなくても、昭和 23 年のおれの兄たちもねえわ。

校長 : 全部貼り替えなくても、切り貼りしてね。

喜多 : 今年は、いいと思ったら切り貼りしたり、猫の出入り口作ったり。

A : あの、私の育った家は、本当の昔の家で、屋根は草屋根で周りが土の壁で、別に内の方は紙貼ってあったからあれだけど、台所の方は、自然に壁が崩れて落ちて、時々外のほうが見えて、少しでも風吹けば雪



薬袋 (郷土資料館蔵)

でも入ってね。結局ふすまが部屋の仕切り 2 枚あっただけで。とにかくお正月になると、母がよく、富山の薬を持ってきてもらおうと、大事にしまっておいたり、なんか雑誌の表紙でもいいの、あればさ、大事にしまっておいてねえ、それを出してきて貼って、すごく新しくなる。あれ見るとお正月が来たなって思うよ。

校長 : 今、釜でご飯炊く家なんてないべね。

B : 今だらないしょ。

校長 : 電気釜以外では、御飯炊けないっていう若い人いっぱいいると思うけど。

喜多 : 昔、飯盒を使ってね。今の小学生にはキャンプへ行くと飯盒を、使ってご飯を炊かせる経験をさせてるんですよ。

G : いや、飯盒のご飯ってうまいよ。

校長 : 今の子供、あんまり上手に炊けないよ。

喜多 : そうでしょ、水加減にしてもね。

E : とにかくあんまり仕事しないもんね。させないのかな。

B : させないんでなくて、昔みたく仕事がないのさ。

喜多 : 掃除するたって、掃除機でやればいいしね。

E : 今、板の間でないしょ。板ふきなんてないもんね。

喜多 : 昔、板の間っていうのは必ず一間位あってね、掃除やったり、薪入れたりね。子供たちどうのこうのって言うけど、子供たちやる仕事がないんだよね。

G : おれらそうださ、学校から帰ってくれば、米といで、水汲んで、晩の支度っていうの、みんなおれやったな。

喜多 : 必ず学校から帰ってくれば、水汲み、薪割りをやらされましたよ。

A : 孫なら、外の水道から、ホースで窓から水入れるのもたいぎで、昔のかついだ話聞かせたりして。

校長 : 今、小学校の 3 年生・4 年生にこんな話聞かせると、「侍のいた頃か。」って聞かれるんだわ。わかん

ないんだよね。

喜多：今、現実に自分の家に住んでいるおじいちゃん・おばあちゃんたちがそういうことしてきたっていうことが、不思議でしょうがないんだろうね。

G：おれら、本町の学校にいたときだったら、みんな畑持ってたから、第一、第二、第三って区分けして、畑みんな一反分あれして、学校で便所のあれ(糞尿)、みんな配ったりしたりしてね。あれ、今、警察の裏の沢が畑だったの。

校長：今、ほんの少しだけれども、大島さんの土地借りて作らせてるけど、子供たちは、草取りいやだって、手が汚くなってね。大島さんのかあさん、(糞尿の入った缶を吊るした天秤棒)かついでコロップの上から降りてくるんだわ。したら、子供たち不思議がって見てね、あれでいい野菜ができるんだって言ったら、あんな汚いことヤダってね。

E：子供たち、担いで歩いていけば、見に来るんだわ。めずらしそうにね。

校長：担がせていいんだが、フラフラしてね、力がなないんだわ。

A：今、こやし使わなくなったけど、昔は、町の真ん中、春にはみんな担いで歩いてね。

校長：けっこう長い距離歩いてね。大島さんのかあさん、あそこから学校の裏まで、今でも担いできてるよ。

B：今なら、大人だって担がねえって、肥料だら簡単でしょ。

E：うちの孫だち、なんか珍しいものみたいに見に行ってくるかってね、珍しいんだべね。それを、肥料にするったらね。

喜多：おじいちゃん、おばあちゃんいるとこだったら、イモ蒔きやっているとと思うけど、なるべく休みを利用して、子供たちにあわせて手伝いさせてみるとか、結構必要でないかな。うちの子供らは、イモだとか、カボチャが好きで、いつも連休の前だとか、一家全員でかけて行って、あえてやらしたんですよ。春休みだとか連休の前は、「今日は全部イモ蒔きだ。」とかしてね。

B：今、手袋だとかなんかいっぱいあるからね。

喜多：親が気づけながら、子供たちにやらせないばね。

校長：畑の仕事だとか、掃除だとかやらせるとよくわかるもんね。

E：そうでしょうね。うちでも中学生の孫たち、息子いなくても、牛みてやってるしょ。だから、小屋片付けるんだわ。親いなくてもちゃんとやってるわ。

校長：今の子は、働くったらコンブのときだけで、子供らに言わせれば、給料もらえるからってね。

A：それが、給料制にするからそうなるんだよね。

G：はたりが、そういうのだからだ。

喜多：昔はね、自分のうちの仕事手伝ってたってね。

A：私らの学校時代にもありましたように、私と同じくらいの友達でも、帰ってきたら畑の草取りで筋骨本取れば、何銭もらえとかってね。やっぱり、昔からその家々でね。

E：やっぱり、そういう癖つけたらだめだわ。

A：その報酬を目的でないとやらないってね。

校長：お金を度外視して働くかってね。でもね、昔からの知恵でいいことは伝えてやりたいと思うんだけど、だんだん薄れてきてね。

喜多：あとなんか、気のついたことでないですか。昔はこうだったよとか、歌別の川にしても、僕の記憶にあるのはもっと、幅が広がったような気がするんだけど、歌別の川がずいぶん狭くなった。

C：狭くなったよ、水道水に使ってるから。

校長：昔は泳いだ。深くてね。



歌別川さけ遡上(平成18年9月)

喜多：今はサケが上ってるけど、昔も上ってたんですか？

C：昔はねえよねえ。

校長：きっと孵化してから。

喜多：昔は、ずいぶん魚食べてるけど、アキアジなんかは、貴重だったからおいしかったのが、今食べてもたいしておいしくない。このあたりどうなんですか。

B：それなら本当だね、昔はおいしかったよ。今あっちこっちで、孵化してるでしょ。

喜多：食べれなかったからおいしかったのか。現実に孵化事業してるから、おいしくないのかね。

B：昔だら、海から獲ったアキアジ、ピカピカ光ってたでしょ。今なら海から獲っても、秋遅くなれば、体黒くなるってね。

校長：どうでしょうね、おばあちゃんたち、孫にぜひ伝えてやりたいこと、残してやりたいこと、だんだんなくなっていく。あんまり便利すぎる世の中だね。ところで、今の子座れないでしょ、お座りできないし、歩くのいやがるしね。

B：今、便利なもんだから、親が送っていったり、迎えに行ったりするから、歩く気になんないんだべね。

E：確かに、行儀は悪いな～って見てるな。ほとんど、座ってないね。

A：女の子は、座る稽古しなきゃだめだよっていうけど。

B：今、みんなイスさ座るからねえ、下さ座ることないから。

E：やっぱり、わたしらごはん食べる時、きちっと座ないと、怒られたよ。きちっとしてても注意された。今なら黙ってるもんね。

校長：黙ってるし、テレビ見ながらごはん食べてるし。

B：親もそうだから、子供もそうなんじゃねえの。

A：本当にね、座ることなくなってね。ごはん食べる時も、みんな、今、イスだから、座ることがあんまりなくてね。

喜多：いつから、そういうふうになったのですか。今言うように孫がいて、その親がだめだから、子供もそうだ。その親を育てたのは、おじいちゃん、おばあちゃん達だよ。いつから手ゆるめて、育てたんだろうね。戦争終わってからかね。

校長：民主主義って、都合のいい言葉で、何かあるとそんなのだから、民主主義ってね。

喜多：子供たちに甘くなって、その子供がまた甘くなって。

校長：確かに、自分たちの時はできなかったから、せめて子供たちの時は、そういう思いは、させたくなくてね。

B：そういうのもあるね。

A：やっぱり、ひとつその身につけて、時と場合の使い分けしてほしいな～と思うけどね。

校長：今の子供たちのなかで、平野さんの子供たちはきちっとしつけられていると思うけど。

喜多：確かに、今の親たちは、戦争後でわびしい生活をしてきたから、「せめて自分の子供には。」って、そういう意識はあるよね。たとえば、勉強しても勉強する部屋がなくて、もう少しやれば、もう少しできたのにな～と思って。子供には部屋をあてがって、あてがってもらった子供たちは、勉強やってるかと思えばそうでもなくてね。

A：わしの父親は、17才の秋に初めて「いろは」の「い」の字から、夜学で教えてもらってね。昔、出雲から来た人でね。私の父親17才の頃というんだから、かなりのものだけど。師範学校に行っていて、卒業したのかわからないけど、それだけの学識のある人がいて、そして、その人がそういうことを、考えてくれて、秋になってから冬の間、2ヵ月の間、希望者を集めて夜学を開いて教えてくれたんだわ。17才の時に初めて「いろは」の「い」の字から習って、あとそろばんは、「八算」(そろばんの一桁の割り算)までと、それだけ覚えていれば、まずさしあたって自分の用事位たせるんだからってね。「あの人のおかげ、あの人のおかげ。」とよく言っていましたよ。

お正月前になると、私が、お歳暮持っていった記憶があるんだけど、それでやはり自分も、まずそれだけ習らっただけで、自分の名前書けるぐらい、用事がたせるぐらいになって、「あの人のおかげだ。」としょっちゅう言っていましたからね。

私の母は、学校行かない人だったけど、読み書きは少しできてたんですね。嫁にきた時、1年分の「婦人世界」のお金払ってたもんだから、家にまわしてもらって、雑誌はきたんだけど、そんなもの見てたら、なまけものだとかね。はたりほとりのあれで、ぜんぜん読むこともなかったから、まず表紙だけちょっと見てただけだね。昔、石油のガンガン二つ入った木の箱あるでしょ。あの箱にきちっと一つ詰まって、新しいそのまんまの「婦人世界」があったんですね。そして、時々ひっぱり出してきて、読んだんだけど、まずそういうの読んだりしてたから、なんぼか知識あったから、はたりの人のこと聞いてたら、随分遅れてるなと思ったんだけど。私が6年卒業したときに、女では私一人高等科にやってもらったんですね。今になってみれば、私はありがたかったなあと思った。

その頃、寄宿舎もなかったし、男の生徒は、みんな自転車で蒲河の学校通ってたし、私はあの頃は、女の人自転車乗るということなかったし、荻伏に寄宿舎があったから、寄宿舎に入って、荻伏の学校に通ったんですよ。

喜多：それで、だいぶ時間が少なくなってきたんですけど、みなさん、子供育てる時、自分の子供はこうやって育てた、こういう子供になってほしいなと思って育ててきたと思うんですけど、どうですか、皆さん。

どういう子供に育てたいと思って、今の親たちは親たちで、孫達にこういう子供に育てほしいなと考えてると思うんですけど、どういう子供になってほしいなと思いませんか？

A：そういうこと、考える余裕がなかったね。

G：子供の将来考えるということねかったと思うな。そういう考え持てなかった。

B：働いて食べるだけで、精一杯だったからね。その日、その日が。

？：子供育てて、こうとかは、なかったの。子供育てて、こういうふうにするとかねかったよ。

喜多：ただ子供によく注意したと思うんだけど、どういう注意してたんですか。

D：悪いことすんでないよ。

喜多：「悪いことすんでないよ」と、あとどういう言葉で、

A：私、小さい時から母親に、礼儀を正しくするん

だよって言われてきたんですけど、そういうの随分厳しくというわけではないんだけど、当たり前で、しょっちゅう注意されてきたから、自分でもまず普通で考えられる常識は、みんな身につけてほしいなと思って、子供たちに聞いても、聞かなくても、いつか言われたことを、どこかで思い出してもらいたいですけどね。

喜多：今のお母さんたち、どっちかという子供たちに、あのようにならなければならないとか、子供たちに盛んに言ってると思うんですけど、けっこう口やかましく言ってるんだけど、その通り育てないよね。けども、昔のお母さんたち、それこそ口にあんまりしなかったけど、礼儀正しくせよと、悪いことだけするなよってしか言ってこなかった。子供たちもそのように育てたよね。

A：やっぱりそう思って、自分でもなるべくそういうふうと考えてやるのが、それを見て育つんだよね。

喜多：だからやっぱり本当に、昔のおじいちゃん、おばあちゃん方は言葉少なかったけど、あとは行動で示したということでないかなと思うんだけど。それは自分の子供に引き継がれた。

E：私の場合は、2才ぐらいの時、数えて4才の時、おばさんに育てられたから、20才になるまで、育てたおばさんの方について、20才になって初めて産まれた親に来たもんで、あんまり一緒にいなかったしよ。23才になって嫁に来たから、その2年間、人に頭下げられて、ま～しょっちゅう言われたもんだわ。それをね、今の娘に伝えてるんだわ。誰でもいいから頭下げられてね。よそから聞いたことを言っただけ、聞かれても言っただけ、これは母親に言われたなあ～。

喜多：自分の子供育てる時に、たとえば人に迷惑かけんなよとか、悪いことすんなよ、礼儀正しくせよ、これだけしか言っていないで育ててきた人。頭下げるんだよとかね、それが意外と身につけていくんだよね。

E：なんかね。

喜多：そういうことから言えば、言わなかったけど行動で示した。

D：家(うち)の子供7人いるけど、よそからなんだかんだ言われたことなかったよ。

喜多：この間講演で、NHKの鈴木健二さんは商売やっている家の息子さんでね、そしたら、その時の学校

の先生が、おまえは商売している家なんだから、人様に頭を下げるんだよって言われてね、お客が頭を下げたら、それ以上頭を下げなさいと学校の先生に言われて育ったんですよ。

それでは、この辺で終わりにしたいと思います。これからまた何かありましたら、よろしく願いいたします。

故工藤紋弥氏への弔辞

故 工藤紋弥氏の御逝去をいたみ、謹んで哀悼のこたばを捧げます。

諸行無常は世のならいとは申せ、昨年 11 月健康を害し療養につとめ、ご家族の手厚い看護の甲斐もなく、又、再起を祈る部落民の念願もむなしく、今ここに大元老を失ったことは、痛恨のきわみであり、惜別の情を禁じ得ません。

あなたは明治 13 年、十勝、大津に生をうけ、幌泉小学校卒業後、当部落に居をかまえ、直ちに部落開拓に精魂を傾けたのです。

当時目黒は、これという交通機関もなく、文字通り陸の孤島でした。

この地を旅行する人々の不便や不安を排除する一つの交通機関として、又、郵便輸送の唯一の機関として、駅通事業に精励されました。

この間あなたは 29 才の若さで、目黒郵便局第四代目局長として、明治 42 年 12 月より昭和 24 年 9 月までの 40 年間、国民の奉仕者として、誠心誠意郵政業務に専念されたのです。



猿留郵便局（明治時代）

こうした公務多忙の折にもかかわらず、昭和の初期に、幌泉村議会議員として二期の長きに亘り、村政のために努力され、苦勞されたその業績は、部落民の等しく認めるところであり、心から敬意を表すところでもあります。

急を要する村議会に出席するため、責任感の強いあなたは、関根議員と共に馬にまたがり、道なき山道をつっ走った姿は、今尚私たちの脳裏にはっきりと焼き

ついており、責任一筋に生き抜いた頑健なあなたの横顔が彷彿として浮かんで参ります。

又、食糧事情の悪かった戦時中は町内会連合会長として、生活物資の配給に、世論の集約や盛り上げの為に寝食を忘れ、私生活をも顧みず、会長自ら先頭に立ってその任に当たりました。

尚、部落の文化的な面についても、青年団長、学務委員等をつとめ、青少年教育のために献身的な努力を重ねたのです。あなたが学務委員当時手がけた学校林が、あなたなき今尚、濃緑に色どられ、すくすくと伸びている、そして今後も尚まっすぐに巨大な樹木として限りなく伸び続けるであろうこの事象こそ、あなたの偉業を象徴する一つでもあるのです。

その他数多いあなたの遺業については、枚挙するにいとまありません。

明治、大正、昭和と激動する半世紀に亘る多彩な業績を回顧する時、それはまさに奮闘の歴史であり、努力の生涯でありました。

『休み所おじいさん、即、頑固なおじいさん』という印象は大人である私たちだけではなく、幼い子どもの心にまで強く刻み込まれていました。これは天性の頑健な心身を物語ると共に、あなたの瞳は、終生部落民全体にそそがれていたことの立記でもあると思います。

あなたは本当に健康そのものでした。82 才の高齢になっても馬に乗って歩いたあの姿は、何人といえども 82 才とは思えなかったでしょう。

然し如何に頑健な身心の持主であってもやはり、寄る年なみには勝つことが出来得なかったという事実を私たちは、只、『世のならい』というあきらめのこたばで処理していいものでしょうか。

89 才の生涯は確かに苦しい努力の連続であったでしょう。

然し、その反面、明治、大正、昭和と生き抜き、人間として天寿を完うしたあなたの人生は、楽しさに満ち溢れた生甲斐のある人生であったということ、私たちはよく知っています。

部落開拓の先駆者として、部落の偉大な指導者として、私たちの大先輩をして、もはやあなたの教えを乞うことはできません。

然し、あなたの死は、今、多くの人々の心に、静かに感動を呼び起こし、生前のあなたの気骨は、大きな教訓として今、私たちに伝受され、発展する目黒の歴史の中に、いつまでも流れ続けるでしょう。

ここに偉大な先人の功績を讃え、生前の面影をしのび、部落民一同と共に心から御冥福をお祈り致します。

どうぞ安らかに御昇天あらんことをお祈り申し上げ弔辞と致します。

昭和 43 年 8 月 12 日

目黒部落自治会長 中野民雄

田丸 武 義 大正3年(1914年)生れ

移住と戦争

瀬棚に生まれ、昭和12年におじさんだった東洋の伊吹さんを頼ってえりもに来た。兵隊検査終わって23歳のときだった。その後、東洋の坂岸にいて、五昭宝丸に乗って働いていたときに、南部家の菊地藤次郎さんの娘と一緒にになった。

一番の姉もって(長女が産まれて)50日目に戦争に行った。旭川から北支に行って、中支に蒋介石を追って行き、そこで終戦になった。作戦中は、軍医について負傷した人を担架で下げ、同年兵は撃たれたけど、軍医と一緒にだったから助かった。

終戦後は河南省にいて、同年兵と2人で70人の炊事をやっていた。21年に戻ってきた。星3つだった。

菊地さんの船「艶丸」は戦地にいったときに艦砲射撃にあった。

コンブと山仕事

コンブの権利は、進が生まれた頃に分けてもらって採り始めた。

28~29歳の頃に三枚岳に材料運びの仕事をした。春先に5人か6人で何ヶ月もかかってやった。運んだのは板だった。角だと重いから、タルキ材を4本組み合わせて柱にした。

山の材料運ぶのには、もう道がついていた。道は良かったよ。上歌別の岡さんなどが牛を放していたし、川沿いに上って行ったと思う。町から運んでいったと思うが記憶がないなあー。

山の上に2軒か3軒の建物があって、その材料も運んだ。12尺の幅8寸の板を1枚担いで行った。漢土袋(かんと袋:麻布袋)に入れた釘とかも運んだ。

小屋作ってから、レーダーの材料も運んでいたと思う。下までは何で運んでいったのかなー。よく覚えていない。

三枚岳には、クマの気配はなかったし、ブドウやコクワなんかはなかったな。ハイマツがいっぱいあった。下のほうはシラカバ、カシワが多かった。一枚岳の方に行くと、コケモモ・ガンコウランなどはあったが、花はあまりなかった。桜は大きいのがあったけど、上さ伸びれなくて枝が横にはっていた。桜はいっぱいあったよ。3本持ってきて、1本は今も生きている。シヤクナゲもあったよ。

おにぎり持って1回登って帰った。水も軍隊で使っていたような水筒に詰めて持っていった。元の役場の前にいた石川さんの兄さんが行ったと思うが、後は誰々行ったか記憶にない。

コンブ採って暇はないから、その後は登っていないな。

趣味と下駄

趣味はコンブと盆栽だ。花屋をやるか、下駄屋をやるかな~と思ったこともあった。

その頃はぞうりを履いていて、下駄はなかったから。桐の下駄、ゴザついた下駄などあまりなかったから売れたよ。桐の下駄というと、盆と正月だったね。

花も好きで、菊を育てたね。老人クラブの作品展に出したり、今もここ(特養やまと苑)の花の水やりをやっている。兄弟は妹と2人になった。子どもはみんな元気で様似・野深・北見紋別にもいるよ。たまに来るよ。

(平成17年12月採録、小川とくこ)

水野 繁 一 大正3年(1914年)生れ

少年時代

私の父茂吉は明治21年生まれで、山形県・庄内地方の出身です。母はえりも町生まれです。

私が生まれたのは字大和で「南部家」と言われていました。国道沿いの元中居旅館の辺りです。

幌泉尋常高等小学校の高等科を卒業しました。学校は1年生に入学したときは、役場の前の小さな校舎でしたが、2年生になってから、新浜の新校舎へ移転しています。高等科には、近浦や東洋方面から歩いて通学する生徒もいたのです。庶野やえりも岬からは、本町に下宿して通学していた生徒もいました。



幌泉中学校(昭和30年代)

高等科の修学旅行で始めて船に乗って函館に行きました。解で沖に停泊中の定期船まで行って乗り移るのです。船は浦河などに寄港して客や荷物を積み込みました。函館では1週間ほど滞在して市内のあちこちを見学して歩いたものです。

高等科の同級生では、大沢小太郎さんや、亡くなった浜崎一郎さん、吉田さんらです。

こどもの頃の南部家は人家も少なく、中居さん、菊地さん、高橋さんらが住んでいました。

子供の頃の遊びはよく覚えていませんが、沢町と南部家の子供達が一緒に何かで交流した記憶がありません。

家業

父茂吉は水野家に婿養子に入っています。水野の家業は馬の飼育と運搬で、昭和の初期までは馬車が通れるような道がなかったので、荷物運びは、もっぱら馬の背にくくり付ける「だん付け」という方法でした。運搬の依頼があると、あちこち出掛けていきました。

遠くは、えりも岬方面からも駄コンブを背に付けた馬を7頭数珠繋ぎにして歩いたこともあります。当時は、だん付けの馬7頭が「ひと鉢」と呼ばれて、運送の単位だったのです。荷物は一旦、本町に数件あった回漕店に運び入れ、回漕店は定期便が来ると、それを積み込んで函館方面に出荷したのです。

黄金道路工事に従事

昭和の初めには、高等科を卒業して間もなく、東洋方面の道路工事で浜から砂利を運んだこともあります。本町から庶野まで完成していた道路を通して、黄金道路の工事に馬車をもっていき、数年間、飯場に寝泊まりしながら、海岸からの砂や砂利運びに従事したこともあります。当時の道路工事現場には、借金を抱えたり、騙されて売られてきた「たこ」と呼ばれる人達や、刑務所からの強制労働の囚人がほとんどで、監督の厳しい監視を受けながら働いていました。(黄金道路は昭和9年秋に竣工)



黄金道路 (平成 19 年 1 月)

馬車追い家業

当時の運搬業でもあった馬車追いの仕事は、その後も東洋方面での道路工事を始め、漁港から水産加工場へスケソウやイワシ運びなど、いろいろな方面でトラックが普及する昭和30年代後半まで続きました。道路がぬかるんでトラックが通れないときも馬車の出番がありました。忙しいときは、上の娘に子守をさせて夫婦で仕事に出掛けたものです。上の子は下の子

をおぶって登校したこともあります。

水野のそばの井戸は16人が権利を持っていて、私とその代表をつとめていて、南部家の人達は、それを生活用水として使用していました。

酪農業に転換

馬車の時代が終わってからは、酪農業に転換しました。乳牛7頭ほどを飼育して搾乳し、輸送缶に入れて国道沿いに出しておくくと集乳車が集めていったのです。その頃、南部家では久保田作造さんが「明治牛乳」を本町を中心に配達していました。前浜で曳き網漁もやっていた、南部家の人達が網曳きをよく手伝ったものです。

終戦は樺太で

私は昭和14年に一度召集されて支那事変に参加しましたが、腸チフスにかかったので召集を解除され帰還しました。翌15年に結婚して、16年には長女が誕生しています。

18年には、えりもから小山内さんとともに補充兵として再び召集され樺太(サハリン)へ派遣されました。召集令状が来たときは、戦況が日増に厳しく感じていたので、今度は生きて帰れないのではないかという気持ちでいっぱいでした。

その年には、ソ連との国境に近い気屯で道路建設の作業に従事しましたが、秋に原隊にかえってからは、もっぱら将校の官舎当番をやらされ、一般の兵隊よりも良質の食べ物に恵まれていました。銃を撃つ訓練はしたことはありません。

20年8月15日の敗戦は、樺太国境から少し離れている陸軍駐屯地の上敷香町で迎えました。戦線に出なかったため、国境を突破してきたソ連兵と交戦することはなかったのです。敗戦と同時に、陸軍から補充兵全員がその場で召集解除されたので一民間人になりました。

それからは、北海道へ帰還するために樺太を汽車で南下して大泊に到着したが、ソ連軍の全島占領で引揚げが中止されてしまい、ちょっとの差で引き揚げ船に乗り損ねたのです。

同じ中隊の仲間が北海道へ密航できる所があるのでの噂を聞いてきたので、再び汽車で引き返して、オホーツク海に面した野田という町で脱出の機会を伺いながら漁師に雇ってもらいました。

結局は終戦から2年間、宇田さんという人のところで働きました。樺太では、ニシン、タラバガニ、マスなどが大漁でした。昭和22年の8月、宇田さん一家とともに真岡から引き揚げ船で函館に上陸しました。宇田さんの奥さんがその後しばらく経ってから、私をたずねてえりもへ来られました。

(平成16年3月25日採録、草野泰子)

工藤しづ子 大正3(1914年)生れ

はじめに

私が、目黒に来たのは昭和10年です。3代目に嫁ぎました。

4代目は、私の長男、工藤松也です。牧場を営んでいるんですよ。孫が俊弥です。主人の父が工藤紋弥、2代目です。主人は南部衆なもんですからね。金太郎さんが、初代、南部の八戸から来ました。

紋弥さんが、第四代郵便局長です。局長さんで、定年退職までいて、ここで亡くなりましたからね。

野辺地金太郎っていうの。どうして、工藤になったのかな～でも、学校の本とか軍隊手帳は、野辺地紋弥だったんですよ。どうして、工藤になったかというのは聞かなかったんですけどね。母方が工藤でなかったかと思うんです。

紋弥が子供のとき目黒に来たんですよ。野辺地と行ったり来たりしてたという話を聞いています。

えりものどっかに、休み所っていう所があるんだってね、歌別との間に、そこに金太郎はいたみたいですよ。そこんとこ詳しく私わかりません。

神様が龍神様だったんですよ。え～だから漁師だったかもしれない。金太郎が「おれの目の黒いうちは漁師をやってくれ。」って、紋弥に言っていました。漁師のことはやめようっていうて、龍神さんもやめたみたいですよ。

駅通旅館

駅通旅館を始めたのは、紋弥か、金太郎かわかんないですけど、その頃は初めて駅通ができたのかな。

初代	野辺地金太郎
2代目	工藤紋弥
3代目	工藤秀一
4代目	工藤松也
5代目	工藤俊弥

黄金道路開通式

私は、21のとき帯広から来たんですよ。やっとこ交通が始まった頃ですよ。黄金道路は、昭和9年10月に開通したんですよ。黄金道路ができたばかりのとき、学校で開通式を盛大にやったもんです。私嫁に来た次の年かな、なんかお餅配ったようでしたよ。昔はいろいろと多難だったもんですから、戦中戦後ですから、すごく苦労しました。

私達は食べるものがなくて、だからね、なんか……。

嫁に来る

主人の父は、漁師ではなくて、郵便局だったもので

すから、私も局員の嫁に来たつもりだったんですよ。昔だから見合いもしないで。局の人とばっかり思っていたの。

全然とところが、紋弥が局長でしたけど。駅通だったもんですから、主人は駅通の仕事してたんですよ。馬に乗ってね、荷物運びなんかして、事務なんかしてなかったんですよ。郵便局に嫁に行くんだから、事務服ぐらい作っていけて、母親が事務服作ってくれたんですよ。そんなもんいっぺんも着ない、女中みたいでしたよ。主人は兄弟10人の長男ですもの。すご～い苦労したんですよ。

広尾まで汽車で来て、そこからハイヤーで黄金道路通って嫁にきました。嫁入り荷物はトラックだったんでしょうか。馬車か、トラックぐらい走ってたかね。その後だからね、オート三輪でできたの。

私が目黒に来て何年もたってから、車が多くなり流行ってきたの。三輪車の前は、オートバイが流行ってね、それから三輪車になって。その時まだ駅通をやっている、主人はそこの通送の仕事をしてました。通送の仕事というのは馬ばかり使っていたんですよ。

嫁に来るときは、だまされて来たんだか、自分が馬鹿なんだかね。本当のことがわかんなかったんだか。ハイハイって親の言うとおりになって、見たこともない人のとこ嫁にきて、ま～本当に凄く苦労しました。

私タイピストなもんだからね、試験受けに行ったり、なんだかんだって東京で勤めてね、2年位たってね。帯広で就職するつもりだったけど、就職しないで嫁にくれられたんですよ。

結婚式とか披露宴とかは、ここの家の中で、親子や親族だけ呼んでやりました。50～70人のお客さんあって、お膳出しても、その当時だから料理っていうのはね、昔は大体決まったもんなの。

この辺はとくに魚があるから、豊一枚分のオヒョウが獲れたの、そして漁場から若いもんと、さおで担いでくるの、そのオヒョウ切って“切り込み”にしてね、刺身にした残り、身がすごく厚いの。そういう料理、やっぱり時代だね、アキアジだって50銭ぐらいだったかな。

これからは、交通が良くなるっていうんで、親もその気になってくれたんでないの。私こんなところに家あるって知らなかったもの、えりもだなんて、地図の上で浦河しか知らなかったもんですよ。

畑の開墾

戦前戦後と食べるものがなくて、もう本当に荒れ地を耕して、イモを蒔いたんですよ。“たかじ”(たかじょう:地下足袋)を履いて、毎日山に通ったもんですよ。だから、イモの30俵も40俵も穫ったんですよ。それひと冬で食べたんだからね。

そんな時代です。この辺、配給ないですから、麦蒔

いたり、ソバ蒔いたり、開墾してました。

食べるのに困って、本当に着るものもなく、綿羊飼って、糸とって、自分で紡いで、服編んで着せるんです。本当に夜もろくろく寝られなかったです。私も4人子供いますけど、朝から晩まで働いて、だから手なんか太くなってね、たかじょうを履いてスコップ持って、トガクワ持ってね、毎日のように山に通ったんです、天気さえ良かったら。

食べるものがなくて、本当にその時、夢中だったものですから、恐ろしいものなにもないです。本当に食べるものほしさに、米は蒔けないからって、麦蒔いたりイモ蒔いたり、大事に大事に育てました。カボチャを100個も穫って、冬に備えたり、そんなことやっばり10年以上続きましたね。

20年経ちまして、畑を一町開墾したんですよね。そしたら20年たって畑がいらなくなったんですね。お米買えるようになったから。

開墾だから大変でした。初めカボチャの穴掘るんですよ。木切って、それからだんだんカボチャを広くして、イモ蒔いたり、山の隅にササ刈って馬に喰わせたりね。まず、本当に今では、わからないようなせつなさでした。でも、その時は若かったし、夢中だからできたんですよ。20年たって畑もいらなくなったし、戦争も終わったし。

逋送の仕事（山道）

逋送の仕事、主人はあんまりやってなかったです。逋送ばかりだったから、庶野から逋送で来て、目黒から音調津まで、毎日ですから。馬に乗って、でも夏はよかったですけど、冬が大変でした。スコップ持って雪を、海岸の方を歩いていました。大正時代の頃、山道がありまして、山道を馬で歩いたんですよ。

そうするとね、いっぺん後ろ側に引かれるんですよ、へんだな~と思って、馬がフンフンって言うと思って、行ったら熊が木の上から見てたっていうの。馬がね、先に気付くわけですよ。

山道っていうのは、広尾に向かう山道です。今は、誰も通ってないですけど、道ぐらいはあるんですよ。目黒から音調津は、北海道の中でも一番初めに開かれた山道なんです。その次の年に目黒から幌泉までと、幌泉から様似までの山道ができたんです。

黄金道路

大時化があって、車流された人もいたんですよ。波が上がって、通りそびれて、車を道路に置いて、次の日来たらなかったようですよ。その当時車もっていかれたら、泣くに泣けないでしょう。

私が来たときは道路が開通していたから、わりあいよかったの、便利もよかったし。日高バスの運転手さんが、うちに泊まっていったの。目黒始発だったの、

だから浦河も簡単に行けたし、広尾からもね、十勝バスっていうのが、来てたんです。本町の菅沼さんのおばあちゃん、亡くなったもんね、妹がバスガイドさんだった。

開通してから、だいぶたってから開通式をやったの。道路が、だいたい整ってから。それから開通しても、毎年工事だもの。

未だ工事してるけど。黄金道路1m位高くなったの。そして、今度“波がえし”がついたの、それで、「だいたい、いいだろう。」って、「完成」って言ったっけ、また大きな波きて壊れたの。

人夫さんは、主に、えりも方面から来ていたと思います。工事やる時帯広から、タコ部屋がきたの。この前（川の向こう）に、タコの収容所ができたの。足に枷（かせ）付いた人も働いてました。

帯広からたくさんタコが来てました。私の知り合いの藤原さんが請負師をしてました。藤原さんが一人でタコ部屋にいて、他の人は入れないの、収容所では、春と秋に健康診断を、受けなきゃいけないみたいで、検査する人が札幌から来てたんです。

何十年ぶりかに、目黒に来たくて来たくて、当時検査してた人の息子がお医者で、帯広に来る時に乗せてきてもらったってこともありました。

その人は、ここに何日も泊まって収容所の人の健康診断をしたの。2年間ぐらい、来てましたね。

その収容所は、2年位ありましたかね。請負師やっていた帯広の藤原仁一朗さんも亡くなったし、その人の妹、私と学校、同じだったんですよ。

人口

その時の目黒は、人口は多かったですよ。長男が学校あがった時は、クラスに20人以上いたんですよ。私4人の子供いたけれども、みんな20人クラスでしたよ。今なら全部で20人いないですからね。

馬

材木はたいした量、目黒の山から出たもんなの。それを馬で出したもんだから、だからすごく馬が盛んでね、10人位馬使う人いて。それに、軍馬も育てました。軍馬補充とかいうのがありました、軍馬を出したこともあったんですよ。紋弥は騎兵隊で日露戦争に行って、二百三高地行ってるんですよ。

電信

紋弥の嫁さんのお父さんが電信士でした。ツートンのことだけど。目黒でも、電信の仕事は郵便局でやってたんです。電線で信号を送っていました。

造材

道有林から材をたくさん出したから、今はほんの少ししかないの。毎年何千石って出してたから。目黒に大きな船来て、積み取り船に乗せて出していました。中瀬があって、そこで本船に積んでました。

私が嫁いで、10年ぐらい。本当に大きな丸太がどんどん出てね。

夏はコンブとって、冬になると山に入って。馬乗りが10人以上いて、冬は“ちんちょう引き”、“よじ引き”とか言って、自力で目黒の河口まで持ってきていました。

た。目黒には、大きな木工場あったの。赤石さんでやってました。



木材の積み出し（昭和34年ごろ）

それに造船場が3軒もあったの。広尾やえりもの船も全部ここで作ったの。大樹とかにも出していました。磯舟ばかり。岡部さん、中野さん、川越さんもそうだった。岡部さんは本町の大和へ移りました。

コンブ漁

昔から漁師は、コンブが主でした。今ほどコンブは重要視されてなかったから、安かったですよ。今、高級品になってるでしょ。特に薬とか、値段が高くなってね。でも、この前、昆布ロードっていうのテレビで見たけどね。東京通らないんだもんね、大阪の方先だもんね。大阪から、九州の方に行ってるもんね。

よくこの辺に“富山の薬”来てたんです。今でも来てます。たいがい3人位。その人達が薬を売って、昆布買って帰ったといひます。北前船が北海道に来てね、この辺で船つけて流通させてた、その辺の流れだと思うけどね。

函館の学校

ここは、交通の便が船だからね、工藤正（紋弥の弟）なんかは、函館の学校、みんな学校は函館。こっこの交通がないため、函館の方に船に乗っていった。

船の流通

昔は子供が風邪ひいても、道路がないから船で行ったの、広尾まで行ったら船でいったの。今は便利だからね。

味噌も醤油も全部函館。いろんな人が行ったり来たりしたもんだ。たとえば薬屋さんにしても、道路のない時は船で来てました。

詳しいこと私らは知らないけど。たずさわってないから。米なんかは全部、10月頃になったら函館からどんと荷物が入るの。米も石油も味噌も醤油も砂糖も全部函館から来るの。

本格的な冬になる前に、そういう船が来て買いだめしとくわけ。問屋さんにどっと昆布やっというて、昆布のかわりに物がくるのか、私は分からないけど、うちは昆布ないからお金でね、越年米に10俵位たのんでね。味噌の一樽でも、二樽でも、とったもんですよ。

紋弥は駅通の通送してたから、現金収入があったんです。主人は駅通旅館や局の通送の小使なんかをしてみました。でも親の仕事にたずさわっているから、本当の小使、千円くれるか、五百円くれるか知らないけども、小遣くれていたんでないの。私は知らないけど、私はもらったためしないから。主人は小遣稼いでいて、わたしはこの旅館で炊事してたんです。そんなもの一日働いても、私には小遣くれないもの、着るものも履くものもなく本当に苦労しました。

綿羊

それで春になったら山に入って、畑作って、開墾しながらカボチャ植えたり、イモ植えたりしました。もちろん戦前だからあわれなもんだった。その当時、綿羊飼ってたんですよ。着るものないから、綿羊飼って、糸紡いで、晩によなべで、繰って、今でも自分で作った糸あるもの。綿洋の機械は帯広の方に売ってたんです。何人かで組んで買ったりして、たいして高いこともなかったからね。自分ではさんで、洗って、糸干して、紡いで、染めて。刈った羊毛は、すごい油ぎ



紡毛機と糸車（郷土資料館蔵）

ってるじゃないですか。それを石鹼で洗って、まっすぐにして。染めはね、染め粉が売ってたの。

戦後もしてましたよ。最近だよ、作らなくてもよくなったの。子供達のはないけれども、自分で取った毛で作った綿洋の毛のズボンやズボン下は今でも持っています。作ったのは主に冬用でした。

ニシン場

ニシン場があつてね、漁場でニシンが獲れたもんだからね。その頃ニシンがあがつてね、2つも漁場がありました。安い値段で買えるんだから、魚には不自由しないから、魚料理には、困らなかった。フグなんか捕れてね。金太郎なんか、フグ自分で料理して、自分だけしか食べないの、誰にもたべさせないの。

ニシンでも数の子が入ってなかった。だけどニシンの味だもんね、肥料にするニシンだったんだってね。魚粕をたくさん作ってたんです。ニシンはとれたとれた、広尾までびっちり、魚粕ばかり炊いて、粕詰作って、普通の俵でなく大っきな俵だったの、一本ようやくかつぐってくらい、米1俵入ってる俵よりも大きいんだ。昔の米俵よりもまだまだ大きい。

この辺でもあっちこっちで、魚粕炊いたんです。春、粕炊いたもんだから、すごい油の匂いでね。その油を海さ流してしまったもんだからね。油は絞るから、絞った油は魚油で出荷しなかったのかな。流れてたね、だらだらと。

ニシン炊く大きな鍋を風呂桶にして、私らも風呂に入ったことあるもの。魚粕炊いた釜洗って、それで風呂湧かすんです。洗ったら、魚粕は、ばかばかとれちゃうしさ、鉄だけ残るから、簡単に風呂になるんです。風呂ない家もあったし、私達は旅館だったから、そんなことしなかったけどね。何軒もニシン釜を風呂に使ってました。みんなニシンのもっこ担ぎに行ったもんだもの、ニシン干したり、粕干し、若い人みんな出面に行ってたもの。

(平成5年10月18日採録、中岡利泰)



目黒遠景(昭和43年ごろ)

池田千代野

大正4年(1915年)生れ

家族

父はで熊沢末吉、母親はタマでサッコツ(大和)で生まれ7人姉弟の5番目です。

祖父は南部の殿様に使われていた人だったそうですが、父親が10歳の時亡くなり、祖母は父末吉を連れ函館の七飯に来たけれど、幌泉が魚も沢山とれ、様似より、浦河より先に開けているからというので、幌泉に来て、再婚したと聞きました。

子供のころ

川でカジカとか、ゴダツペ(辞典にはウキゴリとあるが、えりもでは何か不明)とか、魚をすくうのが面白くて、日の暮れるのを忘れて遊んでよく怒られてた。ざるを持って行ってすくうの、今は川の水もなくなってきているけ、昔は大きな川だったよ。ウニなんかも採り放題。

今の山形さんの店のあるところは、すごい砂盛り山で、いちごがたくさん採れたから、夏は毎日採りに行ったよ。

子供は川で遊び、海で遊び、山にも行って遊んだ。すぐ裏が山だったからブドウを採ったり。

大きな木にブドウがないと不思議に思っていたら、近くのばあさん達がブドウや山菜を採って、箱に入れ、街に売りにくるんだもね。大人の取り残しを採りに、友達とよく山へ遊びに行ってた。



ヤマブドウ(三浦忠雄氏撮影)

横浜のそのちゃんが友達でね、髪をむしりあってケンカしても、また3日もすれば一緒に遊んだの。頼まれた子供の守をしなければならないから、他の子供とは遊べないの。

冬の遊びは、川が一面に氷るので、そこにソリを持って行って滑った、横浜さんのところが坂だったので、そこでもソリ滑りをしたね。

学校・通学

学校までは歩いて通った。下駄はいて通った、“サイバン下駄”で途中で鼻緒が切れれば、三尺(三尺帯、へこ帯)の端っこを裂いて立て替えた。

冬、姉たちは“つまご”を履いたって言ってたけど、私は靴の流行がけで、父親がどこかへ注文して買った靴だった。流行った靴は生ゴムみたいで、あっためないとやっこくならないの、そういう靴だったの。

マタヌマと言って南部家からちょっと出たところ、そこにタンポポ、スミレがたくさん咲く山があったの。タンポポやスミレに蜂が付いてれば、下駄をひっくり返してたたいて取るの、大きい蜜が入って甘かった、そんなことをしたね。

笛舞の生徒は、高等科になれば幌泉まで歩いて来たの、冬になれば幌泉に泊って、夏になれば、歩いて一緒に通ったね。女性でも冬、歩き通した人もいた、男性はほとんど歩いて通ったよ。

学校帰りは、灯台の山道を歩いて、“におう”(にお：エゾニュー)や“だいす”(オオイタドリ)を食べながら帰った。魚が獲れたから大きなキンキンやメヌキでも粕を炊いたものだから、灯台山の下であねさん達が魚粕を干してるの、湯気が上がってうまそうだったわ、そんな所を通って歩いたよ。

高等科のころは笛舞から通っているスミエちゃん、サッコツのそのちゃんといつも一緒に大和の加藤さんの辺りにハマナスがいっぱいあってそれを採りながら帰ったの。

ある時、初めて馬車が入って来て、沢町の川、今は車が走っているところ、アベヤキ川から馬車で石を運んで来て、石垣がその時できたの。

その馬車に乗りたくて頼んだら乗せてくれた。ところが家の近くへ行っても下ろしてくれなくて、次々と馬車から飛び降りて袴を裂いてしまったの。石垣を見るとその時のこと思い出している。

14~15歳の時だと思う、飛行機が落ちたことがあるの、浜にいたら飛行機が「がぁー」と頭の上を通過して、そしたら間もなく飛行機が落ちたと言うので見に行ったら、その時の飛行機って、丸太ん棒に羽根を付けたような簡単なものだった。飛行機なんて見たことがないからお祭りのように毎日見に行く人、いっぱいだった。

学校を終えてから

母親が父親に怒られながら働いているのを見て、可哀相だったね、だから学校を出て、母親の手伝いをしようと思った。

家はコンブ採りと畑作り、大豆、小豆、ささげ、とうきび、じゃがいも、なんでも作った。大豆は豆腐屋さん売り、味噌、納豆は自家製、秋、始末が終われば村の人が皆集まり豆腐を作るの。

自分で豆腐をたくさん食べた他に、近しい人に豆腐をあげる。母親はひまなく働く人なの。

母親にさせられないと思って、畑も起こした、手にまめができてね。

クレオソートの災害

17歳の春(昭和6年)東洋の寺井さんの前に船が座礁してクレオソートが流れ、魚なんかも臭かった。東洋の浜は死んだガンゼが山の様に盛り上がったと、クレオソートで雑草が無くなり、それからは本町の方もコンブが採れるようになって、浜の人の生活が楽になったの。

奉公

18歳の時、親が親戚の人と勝手に決め、うんもすんもなく、函館の餅屋さんに奉公したことがある。そこで良かったのは朝早く起きなくてもいいこと、ポイラーがあるので蒸気の音を聞いて起きればいい、餅の形が崩れないように2~3人であおいで冷ますのがゆるくなかった。

5銭のお供え、10銭のお供え、20銭のお供えなんかがあったの。お彼岸にはお客がたくさん並んでた。一番末っ子が函館の水産学校に入るようになって、家に誰もいなくなるからと呼び戻されたの。函館には1年4ヶ月いて、函館からは船で帰ってきた。

辛かった思い出

終戦後が食糧難で大変だった。東洋とか岬はあまり畑を作ってなかったから、ジャガイモでも作ってれば違ったけど。

うちの人が様似に買い出しに行ったとき、帰りのバスがなくなり、仕方なくジャガイモを背負って、東洋まで歩いてきたことがあった。カニだけで一食の時もあって、今ではカニは食べたくもないね。

昭和11年、22歳で結婚してここ東洋に来たんだけど、昭和30年に火事でなにもかも焼いてしまった。雨の日で東風(やませ)が吹いてコンブは採ってなかった。一番下の子が3歳でおぶっていたし、コンブ小屋から遠いので見に行かなかったけど、よその家も焼いて迷惑かけた、あれが一番辛かった。

冬至の日に建てた家に引っ越したけど、畳も買えなかったから、むしろを何枚も重ねて、その上にゴザを敷いていた。辛抱して辛抱して頑張ったよ。

昭和47~48年ごろ、シャクナゲの人気が出てね、以前に牛を放してもいいからと、町から払い下げの土地5反歩と個人から買った土地2町歩にシャクナゲとツツジがいっぱいあって、十勝や札幌から毎日、毎日大勢の人が来て買って行きました。

それで一息つきましたね。

(平成17年11月採録：草野泰子)

大内 フミエ 大正4年(1915年)生れ

少女時代のこと(大正から昭和の初め)

私の生家、久保田の先代は本町で鍛冶屋を営んでいて、結構繁盛していたとのこと。父・作造はハイカラなところがあって、町内で一番初めに自転車を買って乗ったと自慢していたのを覚えています。町の広報紙にその記事が出たのを読んだこともあります。

私は、父が現在のアキ理髪店の所で床屋を営んでいた大正4年に生まれました。家の後ろは風呂屋さんでした。風呂屋は後に、渡辺保範さんが経営していました。家の隣はカネキ林旅館で、子供心に大きな立派な家でした。戦後はその場所が伊津野医院になりました。

私は本町で育ちましたので、ときどき松川座で芝居を見ることができました。劇場はその頃「芝居小屋」と呼んでいて、現在の小関肇さん宅あたりにあって、寺田孝吉さんという方が「松川楼」という割烹料理屋と両方を経営していました。



松川座(時代不明)

芝居や活動写真(映画)が街に来ると男の子たちは幟を持って街回りの宣伝に付いて歩き、ただで芝居や活動写真を見せてもらったなどと自慢していたものです。劇場は戦後に経営者が替わり、昭和30年代に名前も新映館になり、村井さんという人が経営していました。

松川楼と並んで「カネ吉」「マル三」「又万」などという料亭や料理屋もあり、芸者や仲居さんも大勢おりました。その付近を通ると、昼でも三味線や太鼓の音が賑やかに聞こえたものです。他に「清花楼」という遊廓もありました。

江差追分に「落ちる涙が幌泉」と唄われ、昔は海路の寄港地として繁栄していた幌泉が偲ばれます。その頃、沢町へ行くといえば花柳界に遊びに行くことを意味していたのです。清花楼はその後「牡丹」という名の料理屋に変わりました。

私が子供の頃の遊びは、お手玉やおはじきなどで、男の子は冬は幌泉川の氷の上で下駄スケートで遊んでいました。



下駄スケート
(郷土資料館蔵)

子供の頃、本町で一番裕福な暮らしぶりだったのは、守田さん宅(札幌えりも会の初代会長の実家)のようでした。現在の徳光自転車店前の駐車場になっている所に大きな屋敷があって、私の同級生もいたので、ときどき遊びに行きました。学校帰りに寄ると、美味しいお菓子を出してくれるのが楽しみでした。

その頃、一般の家庭では、両親を「おどっちゃ」「おっかちゃ」、祖父母を「じじ」「ばば」と呼んでいたのが普通でしたが、守田さんの子どもたちは「おとうさん」「おかあさん」と呼んでいたのが印象的で、お金持ちの家はさすがに言葉遣いまでも違うものか、と思ったりしていました。

私は幌泉尋常高等小学校に入学しましたが、校舎は本町の役場前から新浜に移転改築したばかりの新校舎でした。校舎は現在の新校舎の所で高台になっていました。その校舎は、昭和30年代半ばまで使用されていました。当時の裏通りはまだ家がほとんど無い寂しい道で、現在の警察官駐在所の所は深い沢になっていて、細い道が沢に蛇行してついていました。

小学校では紀元節や明治節などの四大節の儀式があって、その日は羽織・袴姿に正装して登校する生徒もいたのですが、子供が多い家は経済的に窮乏していたので正装の余裕がありませんでした。私の家もそうでした。

高等科2年の昭和4年には、修学旅行で函館に行きました。まだ本町の港は建設中だったので、沖に停泊している函館航路の定期船まで、浜から小さな舢舨(はしけ)で行って乗り移ったのです。船で一昼夜かけて着いた函館は大きな市街でしたが、駒ヶ岳が大噴火(昭和4年)の直後でしたので、市内にも軽石や火山灰が降った名残がありました。

娘時代

私は昭和5年春、高等科2年を卒業してすぐ、大内守三幌泉郵便局長(後の舅)の推薦で女性の入所が認められた札幌の通信講習所を受験し、合格して官費で在学することができました。受験前には、局員だった栗山亀一さんから厳しい特訓を受けたのを覚えています。

昭和3年に本町市街地に電話が普及して、小松ハツ

工さんと光明寺住職・尾山見清さんの妹さんの二人が最初に電話交換手をしていたのを見て、郵便局勤務を希望していただけに、札幌での1年間は一生懸命勉強し、さらに、憧れの都会生活も満喫できました。小樽高女を中退して講習所に入所した人もいたり、みんな向学心に燃えていました。お陰で全道各地の郵便局に14人の友人もできました。

私が札幌在住中の昭和6年には、東洋・歌露の海岸にクレオソートを積載した「干珠丸」が座礁する事故がありました。

郵便局勤務

郵便局での電信業務は、「・ ・ ・ ・ -」のモールス符号を使って電報の送受信を行っていましたが、私もそれに従事していました。戦前は大きな事件が起こると、東京の新聞社からモールス符号で記事が送られてきて、それを文字にして電報として犬山新聞店に届け、新聞店ではそれを大書きにし、号外として店の前に貼りだすのです。符号を一字も聞き漏らすまいと必死でした。昭和11年の「二・二六事件」の受信は私が担当でした。それは長い長い記事でした。

幌泉大火

昭和10年、幌泉市街大火の夜は私が当直でした。かめや旅館とニコニコ旅館の間から発生した火の手は夜空を真っ赤に焦がし、下街からの火の粉が局舎に降りかかってきましたが、職場を離れられず恐ろしい思いをしました。局舎に隣接していた大内局長の家の屋根に火が付いたとき、上司の栗山亀一さんが鉄瓶を持って火の粉を消すために屋根に駆け上ったのを覚えています。今まさに、延焼しかかっていた家の主人が、火災保険を掛けに郵便局に駆け込んできました。真夜中なので、中継の浦河郵便局の応答が遅く呼び出しに手間取りましたが、私が電信を打ち終えるまで、じっと窓口立って確認されていたのです。

局舎が延焼の危険があるということで、郵便行囊（郵便袋）を役場前に避難させましたが、そのうちの一つ



幌泉大火（昭和10年）

が火の粉を被り、栗山さんが必死で消し止めたので焼失を免れました。近所の林務署駐在所では屋外へ避難させた書類が焼失したと聞きました。

南部家（大和）に住んでいた外勤局員小杉さんのお父さんが郵便局に駆けつけて、私に危険なので逃げるよう勧めてくれましたが、栗山亀一さんに職場を離れるなど叱られたことを覚えています。大火の後、全国からの大量のお見舞電報を受け、目の回る忙しさでした。どれだけ受信したか覚えていませんが、平日は15~16通平均でしたので、その数十倍もの量だったと思います。当時は電話があまり普及していませんでしたので、電報が通信手段の主役でした。

深夜に電報が入ると、当直の外勤局員は直ちに配達に出ましたが、笛舞・近浦などの遠方は翌日の配達になりました。受信するとどんな場所にも、どんな時間にも直ちに届けなければならない料金の高い「別使」という電報もあり、当直の外勤局員は荒天の闇夜でも歩いて遠方へ出かけたものです。

郵便局に入ったばかりの若い外勤局員に父親が心配のあまり、夜道に同伴して配達に歩いたこともあり、戦時中は男性の人手不足のため、女性の郵便配達員も採用されていました。

私は、郵便局外勤中に大内局長の息子だった主人と結婚して、そのまま勤務を続けてきましたので、町内では共働きのはしりだったのでしょう。当時の特定郵便局は通信省の請負のような存在で、半官半民でした。また局長も世襲制でしたので、親子代々局長になっていた局もありました。

幌泉空襲

終戦の年、昭和20年の7月14日と15日の2日間、幌泉が米軍艦載機に空襲されましたが、1日目の朝は、子供を連れて観音山に避難しましたが、2日目は大法寺の裏に掘ってあった町内会の防空壕に避難しました。その壕はU字形で両方から出入りできるように造られていたようです。

空襲の最中は大内守三局長と寺島さんの娘さんが電話交換手として交換台を守ってくれましたが、のちにそのことで表彰を受けました。私は子供たちを守るのが精一杯で職場を離れて避難しました。空襲が去ったあと、港内では焼夷弾を落とされた漁船が燃えていたのが見えました。

戦後の仕事

戦後は全通という労働組合に加入して、ストライキにも参加させられたものです。大きな災害も経験しました。昭和41年3月下旬、いわゆる“しも風”による暴風雨で町内の電気・電話線がズタズタになり、緊急無線車が郵便局前で3日間ほど駐留して通信を確保しました。

昭和 45 年には、えりも電報電話局が開局して自動電話が普及し、数人が報話局へ移籍しましたが、私はそれを最後に退職しました。

戦後の町の様子

終戦のときは、毎日の緊張と不安から開放され、なぜかほっとしました。しかし、その後、米軍が幌泉に進駐してくると聞いて別の不安がでてきました。姉の家族が東京への米軍の進駐に不安を感じて、幌泉に疎開してきたのです。

進駐軍が駐屯すると、若い女性も入ってきて、町の人は米軍と関係ある特定の女性を指して「オンリー」と呼んだものです。米軍が引き揚げる昭和 34 年頃までは、米軍専用のクラブのような店もあって、駐屯地らしい市街の雰囲気がありました。



街を歩く進駐軍（昭和 20 年代：神社へ向かう道）

その後は、昭和 35 年頃には国道も舗装され、カネサや農協の店がスーパー方式に変わり、観光客も増え、車も増えて市街地の様子もどんどん変わってゆきました。

（平成 16 年 2 月 9 日採録、神子島清八）

岩川ヨシ 大正 5 年(1916 年)生れ

子供時代

庶野のルーランで生まれ、父親は山形県、母親は庶野生まれで、豆腐屋をしてた。庶野には一軒だけの豆腐屋で菅原豆腐店だった。豆腐と揚げを作って売ってた。小越まで売りに行くこともあった。兄弟は 7 人、男 1 人に女 6 人でした。

遊びはあやこ、竹割りもあった、国とりばかりやったね、べったらこい石でね。

学校は山のふちにあった（現在の警察駐在署のあたり）。川に橋はかかっているけど、雨がうんと降れば川水が増えて学校が休みになったね。運動会の場所は高いところであって、そこまで登って行った。

楽しかったこと？忘れてしまったね。

5 年生の時、小越の阿部喜代治さんの家に行って使

われ、ずっとそこで働いていた。コンブとかミミ（ギナンソウ）拾いの浜仕事を手伝った。家に帰れるのは正月だけで、小越には歩いて行った、浜を渡って。川がたくさんあった。お正月も歩いて庶野に帰った、帰るのが楽しみだったよ。

仕事

小越に来てからずっと春から秋まではコンブの丘まわり、冬には裁縫を習った。裁縫の先生は村の人だった。

朝は早くから、夜遅くまでコンブ拾いをした。今のうちに時間が決まっていかなければね。働いてばかりだった。コンブ拾いに大下の方にまですっと歩いて行った、いっぱいになったらそこで干すんだ。誰も間違えて人のものを持って行くことはなかった。ミミ拾いもした。胴長なんてないから濡れて寒かったね。

燃料の薪は苦別まで行って、自分で切って、運ぶのは金丸さんに運んでもらうの、あそこが一番上の姉が行ってるから。切ったのは馬に台をつけて運んでもらった。小越までの道は砂が飛んで飛んですごかったね。焼き場のところから下（しも）がすごかった。

一度、ニシンが群来ったことがあった。陸に突き上げたんだ、崎の方で。嫁に来る前だから 20 歳くらいの頃かな、舟に汲んで油駒へ揚げた。油駒には建網をしている人がいたから。

岬の人は働きものだ。夜も昼もなくびっしり働いた。辛かったこと？夜昼なく仕事をするからいつも眠かったことだね

結婚

人の世話で歌別の岩川に嫁に来た。小越からは歌別の小坂さんの馬車に乗って来て、祝言は夜だったね。その時初めて顔を見た。人に使われて働く事ばかりだったから、今みたいに会うことはなかった。それから 6 人の子供を育てながらコンブの仕事をしてきた。

戦争の時は父さんが満州に出征したから、空襲の時、子供二人を連れて隣の人と沢の防空壕に逃げた。

赤痢が流行ったとき、兄のほうがかかって歌別小学校に隔離されたことがあった。兄が身体が弱かったので心配だった、よく幌泉の洞口病院へ通ったもんだよ。そのころは幌泉に行くバスは一日 3 回くらいあった。

2 年前、85 歳の夏までずっとコンブの仕事をしてました。

（平成 16 年 3 月 5 日採録、山科静子・草野泰子）

曾田 ツユコ 大正5年(1916年)生れ

召集令状がくる

昭和13年3月、曾田進と結婚して、木材業を始めるため、浦河ちのみのずっと奥へ入って、家を建てることになってね、当時、そこには何もなかったよ。

あとは畳を入れるだけになって、主人が街まで出かけたとき、知らない人が自転車で家に来ましてね、何の用かなって思っていたら、家に入ってきて「進さんに召集令状が来ましたよ、保険に入りませんか。」と言われて、「ああそうですか、主人もきっと喜んでますでしょ。」って、その当時はそういう返事をしなきゃならない時代だったですよ。いやだとか何とか言えなかったの、そう言いました。

私は本当にびっくり、びっくり返りそうになり、その人が帰ってから泣けるだけ泣きましたね。

そのあと主人が頭を丸刈りにして帰ってきました。途中で召集令状を受け取っていたんだね。電話で知って親が心配して浦河の駅からちのみの奥まで歩いて来ましたよ。

主人の親の家が札幌だったので、そこで兄弟など親戚が集まって、千人針とか国旗に寄せ書きしたものを用意して、1週間か10日くらいで出征しましたね。結婚して1ヶ月目でした。

まだ、仮小屋だったので、新しい家には入らないで行きました。私も札幌に引き上げましたの。

札幌で見送って、旭川の部隊に配属になって、そこに3ヶ月いて、自動車の運転を習って、そのあと中国、南京へ行くようになった。

そのとき、別れに集まった人から「泣いたら帰って来れない。」と言われて、涙をこらえて、こらえていたんだよ。それから3年中国へ行ってた。

私はその間、札幌の主人の実家、三石の兄のところや、平取の親のところへ、行ったり来たりしていました。その時、薬種商の勉強をしないかと誘われ、札幌の五番館近くの講習所へ2年通ったの。試験があるという時に主人が帰ってきました。昭和15年の春でしたね。

幌泉へ来る

主人は材木業の仕事をしよと思ったけれど、私が薬種商の試験にも受かったの、薬屋をしよかということになったの。私の兄弟がみなその仕事をしていましたから。

薬屋をすることになり、それではどこでとなり「今、幌泉という景気のいいところがある。」と聞き、主人と父親が幌泉を見に来たの、その頃、マグロが獲れて、浜は大きなマグロがずらっと並んでいて、腹を割いたマグロで血の海になっていたとか。

その日のうちに、すぐ家を借りる約束をして帰りました。今の広島美容室のところ、石井大工さんの借家で、11月に今の人が出るからというので、昭和15年10月に幌泉に来ました。

その頃、札幌へ行くには、朝、浦河までバスで行き、汽車に乗り、夕方6時でなければ着かなかった時代でしたね。

薬屋開業

ガラスのケースと白い戸棚と、古道具屋で見つけた引き出しのついた戸棚を、札幌から持ってきて開業したの。名前は曾田勉強堂として開業しました。

その頃、幌泉には和田赤心堂さん、広島さんという薬屋さんがあったの。和田さんは今の場所、広島さんは竹内さん(餅屋)のところ。

開業したての頃は、知っている人もいないし、心細くて、来なければよかったという気持ちで、親に心配をかけていました。

薬の他に小間物、赤ちゃんのおしめカバーなどを置いていました。

当時は問屋も函館で仕入れ、品は船で届きました。港に船が着くと、女性の担ぎ屋さんがいて、荷物を届けてくれました。

飲み水

水は小林さんの裏まで汲みに行き、天秤棒でかつぎましたよ。その後、裏に井戸を掘りました。

二度目の召集令状と幌泉空襲

昭和16年に長女が生まれ、18年に次女が生まれ40日経った頃、父さんに二度目の召集令状がきたんだよ。

令状がきたときはうれしくなかったね。一度もこない人もいるのに、親戚の中でも二度きたのは私のところだけ、仕方がないと思うしかなかった。

この時は釧路に配属になったからよかったの、終戦



マグロの大漁(昭和14年ごろ:幌泉港)

の少し前、「樺太に行く話があるから内緒で会いに来て。」という連絡が入って、母親と長女、次女の4人で釧路まで行ったの。

札幌へ出て、それから釧路まで、長旅でしたね。

旅館に行ったら長女が「父さん、どうしてここにいるの」と言っていたよ。

帰り、三石まで来て泊まった時、幌泉が空襲にあったことを聞き、びっくりしましたね。

家に帰ったら、家のガラス戸が全部なくて、板戸が張ってあった。消防団の人が、誰かがしてくれたんでしょ。中に入ったらガラスケースはめっちゃめえちゃ、二階の箆笥は全部倒れていて、入れない状態だった。

裏に防空壕を作っていたけれど、そこに入っていたら死んでいたかもしれないね。

阿江のおばさんが来て、片付けるのを手伝ってくれた。

そんな状態でも、生きなければならぬ、生きていくという強い気持ちがあるから、頑張ったんだね。戦争だから何の補償もないのが当たり前ね。

薬屋開業

まもなく終戦になり、2日位で軍服を着て突然主人が帰ってきたの。どれだけ嬉しかったか。主人は帰ってきましたけれど、亡くなった人も。まだ帰らない人もいたので、私はすまない気がしましたよ。

戦後、主人も薬種商の免許を取り、店は朝6時から夜10時まで開けていた。売れても、売れなくても。

問屋さんは見本を背負ってバスで来るの、よく家に泊めました。銀行もなく、現金取引だったから、まだ100円札のない時代で、支払いは全部10円札だから、かさばってね、旅館だと心配だから。その当時、村長さんの給料は60円と聞きました。

休みはお正月元旦だけで、他に休みなかったけど、主人が1週間に一度は休もうと言って、休みを作った人だったよ。主人は公職をたくさん持っていて、留守が多くてね。昭和59年3月25日69歳で突然亡くなり、辛かったですね。

(平成18年3月14日草野泰子採録)



昭和13年ごろの建前

石川 秀一 大正5年(1916年)生れ

石川 フミ 大正9年(1920年)生れ

同級生

栗山助役と同級生、同級生でも7年あがりだったから、大正6年生まれでなかったかな。笛舞の堤留吉も同級生、えりもの高等科へ行ったときの。歩いて、毎日、行って、晩に帰ってきて。歩くに1時間は、子供であったから。今みたいに道路は直線でないし、ちょいちょいカーブあったからな。キロ数にしたら今より多いべさ、ね~。

カネサ町長(吉田勘之助町長)も同級生なんだよ。あの人は、商業学校かどこさか、行ったけどもね。すぐ上の学校さ行ったから。最後まで高等科でなかったからな。

祖先

俺の親父は、漁師、コンブ採ったり、定置さ乗ったりやってきたから。石川重徳というのが先祖になるんだけども、そのことは及川初江がよく知っているけども、石川重徳は榎本武揚について歩いた。

おらほの親父は、本当からいえば、南部から来たんだ。母親が石川の先祖とつながりがあるわけさ。親父は婿よ。南部から働きに来てて、ここさ落ちついたんだべさ、な~。

我々は母親の血統で石川名のっている。親父は本当は坂下。親父は最後まで坂下であったも、母親の私生児みたいになって石川で続いてきてるからな。

(秀一さんは)ず~っとコンブ。建網さ行ったり、コンブ採ったりしかできなかった。

兵役

ちょうど兵隊に2年間、旭川さ行って、函館さ行って、支那、今の広州、昔の関東、陸軍。函館の銃砲行って、旭川の銃砲行って、昭和13年に函館の銃砲に召集になって、広州に1年半ばかり行ってきた。15年の12月30日に帰ってきた。帰ってきて16年から大東亜戦争始まったべさ、だから俺が帰ってきて、12月30日に家にきて、16年の2月に今度は弟が現役で行って。北支さ行って、満州行って、フィリピンさ行って、レイテ作戦で戦死しました。

(秀一さんは)呼び戻されることはなかった。

襟裳の長岡部隊

襟裳の長岡部隊っていう防衛召集に、襟裳岬さ、ず~と終戦まで、3ヶ月だ、2ヶ月だ、10日だって、召集かった。岬で煮炊きして、百何十人もいたったからね。長岡部隊は陸軍、坂東隊中隊一個中隊が常備いた。昔の「えりも荘」建ってあったところに当り前に

兵舎があって、駐屯してた。

長岡部隊は幌泉の人だけで構成されていた。目黒から近浦までで一個中隊、長岡さんの息子は陸軍大尉であった。あの人は中隊長で隊長。岬の生嶋軍曹、吉田さん（終戦後自衛隊に入ったと思うけど）

初めは岬の小学校さ、1週間、10日って、あっこでもって、寝泊りして、いてやったしね。

それから、長岡部隊が東洋のヤキベツに兵舎移るわけさ、そして、坂東隊の兵舎さ、えりもの兵隊たちが寝泊りして、そこにず〜っと。ヤキベツの奥に入っていく沢の奥に兵舎を建てた。坂東隊の兵舎さ長岡部隊が入ったんだからな。

塹壕掘り

長岡部隊は、苫別から岬までの塹壕を掘ったわけさ。掘って両側に土を盛り上げて高さ 1m50cm ほどに。今の自衛隊から百人浜へ下がっていくところに防空壕がトーチカのようなものがあったんですよ。塹壕通ってそこまで行って。

百人浜にアメリカ軍が上陸するっていうことだったからね。我々そっちこっち、岬の灯台あたりも陣地を構築したり、びっちり演習したからね。敵が来るというのに対抗する工作したり。襟裳岬には海軍の部隊はいなかったけど、通信部がいたかもしれない。兵隊がたくさんいたのは陸軍。

長岡部隊では炊事してたから、軍隊と同じで当り前のものを食べさせてた。おかずなんてたくさんあるわけじゃなかったからな。それでも、お汁とご飯と、終戦近くだったから食糧がかなり不足してあったからな、家にいたみたいに腹一杯食べられなかった。盛つきりだから、茶碗に1杯だけだからね。こっちも掘って、ほら、土方だから、ゆるくないもんだから、腹へるんだよ。足りねえんだもの。スコップとつるはしで、ず〜っと掘っていくんだから。岬から歩いて行って、歩いて帰ってきた。



塹壕あと（えりも岬：平成 19 年 1 月撮影）

終戦

終戦の時はびっくりしたな。今日、午後から天皇の話があるっていうのは、それまでわからなかったからな。やっぱり、解散するときは、服とか一揃えもらってさ、解散したんだ。天皇陛下から今日の午後大切な話があるからと通知が入って、そのときに、聞いて、負けたんだな。もっとも、負けるのわかったった。な〜。あれだけ物が足りなくて、どうして、鉄砲だって一人さ一丁づつ当たたんねえからな、みんなもう。

えりも空襲

（7月14日と15日の空襲の時）ちょうど歌露にいてさ、みんな、もう逃げてしまっただけさ、ここ家から、撤収せいでいうあれがあったもんだから、山のところさ、穴掘って雨よけるだけの屋根かけて、みんな、あの当時、ほとんど家にいないな、終戦当時の。みんな山さ逃げた。

フミ：山で暮らしてた。見てるうちに、グラマンとか、波状攻撃でもって。

おら軍隊でいって飛行機でやるのなんてびっちり見てきてるから、実践ばかりず〜っとやってるから、おれ達行っただけは支那事変だから、大東亜戦争でなかったから、日本が勝てば良かったからな、支那の飛行機は飛ばなくて、日本の飛行機ばかりが飛んで、爆弾落としてやるのなんか見てきてるから。

グラマン、同じ飛行機でねえんだよ。したから、おれたちそこにいて見てれば、行ってそのけつすぐ来るから、日本の飛行機が追って来てるんだかな〜って見てあったわけさ〜、わかんねかったな、アメリカの飛行機が、同じ型でないから。なにせ日本の飛行機なんて1機も来ないべさ。

そう言っても、こう言っても、急降下して爆弾落とすの見えるわけだよ。黒いのが。ば〜って、襟裳岬の灯台あたりさやるやつも、黙って見てる、帰っていくと次が来て、入れ替わり立ち代りだもんだもん。木の陰から黙って見てる、ちょうど7月だから、かしわぎ（カシワ）の葉っぱがあって、なんも隠れて見てるんだもん。

フミ：うっかり歩いたら、撃たれたから。

佐藤のばばたち歩いているときに撃たれて（怪我はなかった）。弾は今でも、あれだべさな〜あったんだよ、落ちたやつが。歌露も撃たれた。東洋の学校あたりも、撃たれて板に穴あいてあった。家が燃えたりはしなかったね。

結婚当時

フミ：結婚したのは昭和 17 年ごろでないのか。生まれは幌満、学校さあがる時だから、昔で8つだものね、そのときエンドモに来た。その頃車もまだなくて、馬車で来たのさ、幌満から。丘の上には馬車の通る道

はあったの。ろくな道路でなかったども、沢周ってあったよ。

婚礼は我が家でやった。公民館とかなかったから。今の家でなくて、下、浜にあった家、終戦後、上にあがった。ちゃんと婚礼服着たよ。

仲人はいたよ。池田源太郎、今でいえば自治会長。神主はいなかった。本当の両家と隣近所で15~16人もいたんだべかな。下の浜の家だども。戦争当時だべさ。ご馳走は、当時は冷蔵庫もあるわけでねえから、2月に結婚式したから、生魚といってもスケソぐらいだべさな~。

時化

時化れば、台風なみの波くれれば、家まで波入ってくるとこに寝たつた。今みたいにオールなかったしな。フミ：わし、家(うち)にいたあたりは、パンパンと、波に打たれたもの。雨戸閉めて、しまっても、昔はひどかったもの、浜だからね。

仕事

フミ：(秀一さんが長岡部隊に行っている時は)コンブ拾いしたり、ミミ拾いしたり、海藻だとかかくね。働くに歩いたり、だんだん1年ましに働くとこがあって、道路の出面に行ったり、いろんな仕事はやっぱりあったよ。

海藻採り

海藻は、ギンナンソウに、フノリと、アカバ、そんなもんだべさ。アカバも乾燥させて出荷、ギンナンソウも同じさ、ギンナンソウよりも早く丘さつくもんだから、ず~と沖につかない、丘さばっかだから、1日か2日採ればアカバというのは、ただアカバというのはギンナンソウの長いようなもんだからな。似てるからな。糊の原料だべさ、今でもギンナンソウは壁の糊さに使ってるでしょ。いい値段したもんだもの、コンブ拾わねえでギンナンソウ拾ったもんだもの。コンブよけてギンナンソウだけ拾ったもの。



あかば(アカバギンナンソウ)

薪

近くの定置以外は、歩いたことない。冬は薪切りさ、町に願って焚く薪を1月から2~3月の歌別あたりの山さ行って、通うたらゆるくないから、山さ小屋建てて、一人ではなく、団体で5人なり7人で、そこへ飯持ってって炊いて、山で薪切って。今の追分峠、旧肉牛牧場のあたりまで行って切ってきた。泊がけでねかったら、通いじゃできなかった。ここらの山は、道有林とかで簡単には切らせなかったから、ここらは牧野に改良するといので、まだまだここらにも木あったんだども、牧場増やすって、牧場にするために薪切らせたこともある。部落の人が全部出て、して、ねばこんなに山見えなかった、野原になる前は木あったもんだもの。薪切ったものはもらったからな。石山は昔からはげた。

フミ：薪切ったの背負(しょい)出すのにね、こんな坂登って、毎年背負(しょ)ったもんだね。上まで、車の来るとこまで。

薪はトラック頼んで運んでもらった。車歩くようになってからはね。車の前は馬車頼んだり。国道出るとこまで背負(しょ)ったり、なんだりして、そこから知り合いのトラックを頼んで、配ったりしてね。今でいう薪一間といえ、昔高さ5尺幅6尺が一間、今なら5・5で一間。今の一間はわれわれの半分だもんな。一冬に10間ぐらいは用意した。

戦争当時はトラックなんかなかったから、主にソリで引張って、歌別まで降ろして、歌別から船で運んだりした。また背負(しょ)って家の前に配ったりした。川流しもしたことある。雨降りの水増えた時って、流したことある。

フミ：ウタロップの川ず~と伝わって流してきたり。ソリで出したりして、道道まで出すわけさ。そこから、馬車なり車なりで。

軍馬

馬も牛も飼ったことはない。馬使ってコンブやったことねえな。寺井さんところが馬持ってたけども、馬車馬持ってることはなかったものね。牛は寺井重太郎さんのところ、今の寺井重蔵さんの先祖なんかは、牛なんか何十頭もおいてやったども。あっこでは馬車馬はなかったな~。馬はおいてたども、戦争当時は軍馬がいい値段したもんだから、軍馬目的でやってた人は、今みたいに競馬なんてなかったから。馬車馬もそんなにいたったわけでもなし。

学校

フミ：エンドモから油駒の尋常小学校へ通ってました。今のヤギベツ。

おれ達も6年生までは油駒、高等科から幌泉。2年間。たいてい幌泉の高等科2年あったべさ、おれ達の

時代から、だんだん行くようになったわな。それまでは何人かしか行ってなかった。高等科へ入る試験はなかったな。高等科は義務教育ではなかったんだわ。6年までは義務教育であったも。

6年卒業するときに日高支庁長（茶谷幸一）から視箱もらった。今でもあるよ。6年生頃までは優秀だったから。田口小亮先生は我々の親父の代からいた人だ。その人がず〜と我々6年卒業して、まだまだやってたべさ。奥さんと2人でやってた。おれたち4年生になったときに初めて山口先生という男の先生1人入れて、奥さんと交代した。それから逐次増えてきたから、先生も2人から3人になったべさ。一番多いときで小学生100人以上いたからね。毎日学校に行ってた。当り前の帳面あったよ。

仕込み親方

このあたりの仕込み親方は寺井重太郎。コンブ検査したものを船に積んで歌露のすぐ沖に来ている大きい船に積むわけさ。五したか丸、六したか丸とか、いまでいう300トンぐらいの汽船だったね。だんだん1000トンクラスの発動機の大っきいやつがきて、それに積んで。すぐ磯の沖まで入ってくるから。そのときは出荷だけ。仕込み親方から主に米でも味噌でも買ってた。寺井さんは店はなかったな。戦争になって配給制度になって、なくなった。みなに配給して稼げなくなったからな。

配給になる前は、寺井さん、吉田カネサから仕入れてたこともあったし。こっち（歌露）まで手伸ばしてね、コンブをもらったりして取引したんだから。組合もあるから、当時はヤミもなかったから、終戦後からだべ、コンブでもヤミはやったのは。

配給と畑づくり

イモ・カボチャも個人でもって自分の畑で作ったもの。自由に食べてた。戦争になってだんだん、遅くなってから、イモでもなんでも作ってたって、供出だって1軒の家で1反歩撒いてれば、5俵だせとか、7俵だせとか、ってね、は〜強制的に出させられたものだ。自分で食べるには自由で良かったけどもな。だからわれわれは畑でイモでも蒔いてるから、配給制度になっても、本当からいえば、自給自足のようなかっこうだから、配給だけで間に合った。な〜なんかかかんとかな。贅沢に、今みたいに、食べれなかったけども、食い物はイモでもカボチャでも蒔いて、とっておけるからな、1年いっぱいな、同じなんでも、ここらは、農家は特別だけど、そんなに食い物には、自分で蒔いてるだけ苦労しなかったんでないべかね。

魚は自由にほれ、自分で、からっぽやみさえやんねかったら、時期の魚は獲れてあったからな。そんなものには制限なかったからな。ここらへんは、農家みた

いに米の飯は十分でなかったかもしらねえども、腹減らしてかしゃがねえことはなかったわな。

あとダイコンでも、かいべつ（キャベツ）でも、蒔いてあったから。豆蒔いたり。その当時はイモ蒔いて、イモなかったら生活できねかったべさ。配給だけの米ではとっても。

風対策

風は昔も今も強い。今、ホレ！、今でも板囲いしてるとも、昔はこういう板囲いする余裕なかったもの。板買うたって、板持ってくるからあるもんだから。どんぐい（イタドリ）刈って、どんぐいでもって囲いたのさ。まあ、昔から風の当たんねえところは、囲いもなかったけども。われわれ、昔から囲い、ここらにいれば囲いしなければもたなかった。持ってきたどんぐいを5本なり、3本づつつけて、紐でしめて、柱立てたのさ。“ながら”（木の長い横棒）って言って、どんぐい立てて、手前から縛って。10月ごろから11月には、初めて土しあれば、柱立てるたって、立てられなくなるからね。



どんぐいの防風垣（歌露：平成18年1月撮影）

柱は何年ももってるな。だども「ながら」っていうのも、どんぐいっていうのは、やっぱり1年ぎりみたいなもんだ。縄が今みたいにいいものがなかったから、ちゅうけん縄、藁でもって編んだものしかなかったから、1年経てばくさっちゃう。切れてしまう。逆な風くれば、は〜、たけが伸びてしまう。だから1年ごとに囲いやったもんだ、毎年。カヤでもヨシでも高さ3尺でも4尺でもあるでしょ、あれでやればね、風を通さなくてピンとなるかわりに、垣（柱）にこたえるわけさ。どんぐいであれば、ある程度、なんぼか隙間あるから、風もなんぼか通すから、わりあいに楽だべさ。カヤなんかでやっててピンとやっちまえば、直接、もうハ〜、地風ひとつだから。そういうカヤでやってる人もあったども、たいいていどんぐいだね。

アザラシ

昔、アザラシも食べた、食べた。うるさくなる前は、みんなたいて獲ってたもんだ。ここら（歌露）さ来て、ちょいちょい丘にも上がったりしてるし、磯にもいたし。棒でぶったいて獲って、トッカリの肉って喰ったもんだ。味噌で炊いて。赤身ね。白身はだめ。戦争当時から終戦後だっつてず〜っと食べた。ゼニガタもなんとかもなかった。皮張って、ちょっきかなんかにしたった人もあったよな。なめしたって、商売になめさせなかったら、ガバガバしてどうもなんねえ。トッカリの脂なんて食べた人ないな。脂に出したりもやったことないな。肉はいいとこだけとって、あとはぶっとばす。

昔、トド、ぶっ叩いて獲った人もいる。このごろトドもこなくなったからな。この辺の磯にトド上がったこともちょいちょいあったんだども。鉄砲でもって獲ったことあるよ。戦後だね。トドならうまいわな。

ホタル

フミ：この辺でホタルは見たことないね。

（平成 18 年 1 月 20 日採録、中岡俊子・中岡利泰）



ゼニガタアザラシ（襟裳岬：平成元年撮影）



初代襟裳岬灯台・襟裳岬岩礁・百人浜

寺谷マズ子 大正6年(1917年)生れ

家族のこと

南部家の今の小杉光男さんのあたりで、生まれました。親の苗字は太田良吉・モモヨです。大和の佐藤さんと親戚です。

一人っ子だったので、後継ぎの養子を水野さんからもらった。龍三朗という弟がいたが、戦死した。

夫（由雄）は、生まれたところは忘れたが、内地から渡ってきた。コンブは採っておらず、一人で船で刺網漁をやっていた。

子どもは6人いるが、札幌、仙台、横浜、苫小牧、小樽にいて、えりもには誰もいない。一番上の娘が小樽にいる。2番目の子は肺炎で亡くしている。7人いた。

夫は、ずっと一人でやっていた。機械をつけて小さな舟で曳き網をやっていた。コマイをチップ（舟の呼び名）一杯もとったことがあった。あとで、一人で漁をやるのが大変になり、土方をやるようになった。

夫とは18歳で結婚しました。結婚式は公民館で行いました。夫が漁師をやっていたので私は、魚を売りに歩いたりした。

夫が土方をやるようになって、夫と一緒に池田建設などに働きにいました。

夫はガケから落ちたのがもとになって亡くなった。もう20年以上になる。私は、カゼで3日入院しただけだ。

戦争時代

子どもが小さい頃は戦争当方で食べるものがなく大変だった。夫も召集があって兵隊に行った。3年くらいで除隊になり帰ってきて、ズボンとかももらってきて、夫は兄（長男）と一緒に米とばくってきた。

兵隊に行ったのは結婚してからで、夫がいない間、私は土方をして子どもを育てていた。

戦争当時はもち屋さん（竹内さん）で配給のパンを並んで買ったりした。苦労して、兵隊のズボンとばくったりした米に、カボチャやイモをまぜて食べていた。サッコツなどで畑も作っていた。

夫が召集された時、兄をつれて旭川まで面会に行った。様子までバスに乗っていく時（米軍の）飛行機がきてバスの椅子の下に隠れたりした。今、苫小牧にいる兄が五つのおきだった。

旭川で面会中の宿で空襲に遭い、逃げるのに暗い中で、兄を夫におぶさせようとしたら、よその人におぶわせてしまい、「そうでない、そうでない。」と言われたりしたことを覚えている。

戦争中は集められて、綿の帽子をかぶって、竹やり訓練をやったりしたが、飛行機がパラパラやってきたことがあったが、役に立たなかった。戦争中から戦後

にかけて、子どもを育てるのに食べ物がなく一番苦労した。

その頃は、いまの淡路さんや、植木さんの向かいあたりでした。そのころ、近所に誰がいたか思い出せない。窪田さんのばあさんとは1歳違いで、栗山末吉さん、岬からきた佐々木時計屋さんのばあさんと同じクラスだ。

子どもの頃、家はコンブ採りしていたので、まるったら、函館に行く船に積んだ。

ホテルは子どもの頃にも見たことはない。

南部家とサッコツの間は今のようにながなかった。子どもの頃は、電気がなくランプだった。毎日ホヤミがきをやった。てっかいこ(手袋)を縫ったり、足袋を作ったりするのが得意だった。

学校

窪田のババはいとこだったのでよく遊んだ。家が近くで、同じクラスだった。学校に行くときも二人で行っていた。

着物に袴(はかま)はいて行っていた。ふだんは“カスメン”(綿のかすりの普段着)袴で、何かあると“メリンス”(上等な綿糸の織物)の袴をはいた。女の先生がいた記憶はない。学校は2年まで行ったかどうか、忘れた。一年でやめる人も多かった。

漁模様

夫は、岬の方までアブラコ釣りに行ったりしていた。コマイは箱でたくさん獲れるので、組合に出していた。量が獲れない魚は私が、背中に背負(しょ)って売りに歩いたりした。

昔は南部家まで祭りの神輿が来ていた覚えがない。ずっとあとになってから、“どんたく”にだいが仕事にいった。

(平成16年3月31日採録、小川悠紀弥)



防空ずきん

(郷土資料館蔵)

藤井久子 大正7(1918年)追分町生

幌泉村へ来る

日中戦争の翌年、昭和13年に岩見沢の町立女子職業学校を卒業後、空知管内青年学校で2年間教員として勤務しました。

追分で鉄道員であった父親が定年退職となり、兄が日高支庁に勤めていたので、そこに親が引っ越してきた関係で、日高に来るようになり、昭和15年に油駒尋常小学校に勤めた。

浦河から幌泉までバスが通っていた。道路は狭くカーブも多く、おっかなかった。運転手は和田(先代の和田薬局の社長)さんであった。昭和16年結婚のため退職した、生徒は50人位いました。

夫、藤井八郎は復員後、幌泉村役場に勤めていた。給料は50円位であったと思います。所帯を持ったときは和田薬局の2階(西野さん所有)のアパートで、その後、公会堂(伊藤利彦さんが入っていたが家を建てたため)に引越した。

公会堂にい住んでいた時に終戦になった。その後、官舎ができるまでということで、木炭調査員の事務所跡(現在の小川商店の福祉センター寄り)に移ったが3年くらい入った。すごく寒い住宅であった。

その後、何軒か移り、昭和44年に役場を退職し現在のところに住んでいます。

子供は、男2人、女3人です。大学3人、高校2人卒業し就職しました。長男は群馬県高崎市にいますが、あとの4人は北海道に住んでいます。

戦時中

戦時中、終戦後食料事情が悪く、ほとんどの家庭で畑を作っていた。私たちも「まんじゅう山」(現在の斎藤正さんの上の方)に土地を借りて、ジャガイモ、カボチャ、ダイコン、ニンジンなどを作った。

その場所に、立崎竜太郎さんという石碑があったと記憶している。

また、綿羊・牛も飼ったこともあります。

米がなく、東洋から夫の兄達が我が家に泊まって、朝早く買出しに行った。浦河町杵臼に夫の妹が嫁さんに行っており、そこに頼んで買った米などを、帰りに家に寄り置いてくれて、本当に助かりました。

幌泉空襲

昭和20年7月ごろ、艦砲射撃・爆撃機が飛んでくるようになり、家にいたら狙われるから、住吉神社の裏山に逃げた。主人が「俺は仕事に戻るからここを離れるな。戻ってこなかったら生きていないと思え～」と言って、山を下り、だんだん日が暮れてきて、心細くなってきたとき、「ご用かご」に食べるもの着るものを入れて持ってきてくれて、安心した。

その後毎日防空壕に通ったが、家のお民が（長女民子さん）が泣きべそで、人の中に入ったら、泣いてしょうがなかった。

法華（大法寺）さんに頼んだら、どこにいても同じだから、ここに居なさいと言われ、2晩か3晩お世話になった。

朝ご飯仕度をしたり、オシメを干していたら、家の人が来て、戦地で死んだ人を見てきたが、どこにいても死ぬ時は死ぬんだから、家に帰ろうといわれ、家に戻ったら、爆風で窓ガラスが割られており、家の中はひどかった。

墓参りと空襲

戦争が激しくなり1ヶ月早く墓参りをした。主人の先祖の墓は東洋で、13日墓参りが済んで、本家に泊まって、14日朝はガスがかかって、暗かった。飛行機の



米軍艦船機の機銃弾と爆弾の破片（郷土資料館蔵）

音が聞こえてきた。本家の爺さんが「日本の飛行機だろう」と言ったが、江川の叔母さんと子供2人を連れてバスで帰ったが、途中、歌露の寺井さんの付近にきたら、空襲警報がなり、バスを降りて逃げた。隠れるところがなく、道路のふちの側溝に隠れた。空襲警報が解除されたが、バスが動かず歩いた。途中、昆布時期で、馬車にバラスを積んだ人と会い「艦砲射撃に遭って、馬が撃たれるんでないかと心配したが助かった。」と喜んでいて。もう少しで家に着くという時に、再び空襲警報が鳴り、石井（現在の診療所）大工さんの薪の所に隠れて、ようやく家の防空壕に入ろうとしたら、役場の人が入っており、入れなかく、恐ろしかった。

物資不足

出征軍人を送るときは、役場の婦人たちも手伝いをしました。長岡村長さんの奥さんの指揮のもと、食料がなかったため、ジャガイモで紅白饅頭を作って、送ったこともあります。

衣服はほとんど売ってなく、着物・帯などを解いて、主人・子供たちのシャツ・ももひきなど、全部手作りで着せたものです。

終戦後

終戦後、公会堂に千島からの引揚者が少しの間、5~6軒住んだことがあります（その後、沢町に住んだ杵淵さん方）。何も無く、蕙を敷き、蕙で仕切り、そこに住んでいました。本当に気の毒であった。

子ども達に食べさせるお菓子がなく、シラヌマ橋の下に、小山田さんの爺さんが水あめを売っていた。木炭調査員の事務所に住んだいた時、近かったので、子供をおぶって買いに行きました。

主人は、酒はあまり飲まず、タバコも吸わなかったが、お客さんが来た時は、飲ませるのが好きでした。

子ども達も学校に行くようになってからは、幼稚園の役員、小中学校の役員、婦人部は丁度創立の時で随分苦労しました。また日高管内婦連への入会など大変だったが、今思えばいい思い出です。西えりもに住んでから、主人と2人で老人クラブに入会しました。随分色々な役員も経験、受賞も数多くありましたが、今振り返ればいい思い出になっており、皆さんに感謝しています。

（平成 18 年 3 月 8 日採録、新松隆・新松信子）

齋藤源一 大正7年(1918年)生れ

クレオソート事件

クレオソートを積んだ干珠丸（かんじゅまる）が昭和6年（1931年）3月20日に、歌露の船入瀬のちょっと上手の岩に上がったわけさ。私、ちょうど幌泉の高等小学校に通っていたときです。ここエンドモから、海岸線を1時間ぐらい歩いて、浜をかけ足しながら通ってました。

朝起きて、歩いていくと、まんどる（まんどり）に明るくて、何ごとかと思ったんです、船の明かりで明るかったんです。大きな船でした。50~60mもある大きな船でした。

その日は学校が休みになって、なんだかんだしているうちに、今思えば歌別、本町、新浜から50人も、60人も集まってきて、見に来たものさ。乗組員は最初、丘（陸）に上がらなくて、警察署来てから上がったわけ、救助したわけさ。そして、今の歌露の倉庫の片隅を囲って、そこに入れて、煮炊きして世話しました。

1週間位たってから、今いうサルベージの船が2艘も3艘も来て、引っ張ったって、ぜんぜん、なんも動かない。学校みたいな大きな船だから、引っ張ったって動かなかった。そのうち時化がきて、今度少し上の方の岩に上がったわけさ。人は救助されていたからいいけど。「タンクに穴があいたんじゃないか。」って言うているうちに、クレオソートが渚にびっしょり流れてきて、あっという間に20~30cmの厚さで、一番深いところでは一尺以上の厚さでした。クレオソートは真っ黒で、コールタールのようにドロドロしてました。